

岡山心理学会

第71回大会発表論文集

2023年（令和5年）12月9日（土）

主催校：山陽学園大学・山陽学園短期大学

目次

研究発表

(発表番号の☆は大会発表奨励賞の審査対象者であることを意味する)

☆発表番号 1

- 回想による児童期から青年期におけるきょうだい関係の変化
きょうだいの好意性とその理由の検討…………… 1
- 堤 遥香 (吉備国際大学心理学部心理学科)
 - 土居 正人 (吉備国際大学心理学部心理学科)

発表番号 2

- 自閉スペクトラム症児の睡眠問題に関する研究 (1)
— 児童発達支援専門職が捉えた睡眠特徴 —…………… 3
- 池内 由子 (川崎医療福祉大学)
 - 水子 学 (川崎医療福祉大学)
 - 岡野 維新 (川崎医療福祉大学)
 - 武井 祐子 (川崎医療福祉大学)

☆発表番号 3

- 自傷傾向を低減するソーシャルサポート
不承認環境下でも自傷傾向が低い者が受けているサポートの検討を経て……………5
- 千田 優紀 (吉備国際大学心理学部心理学科)
 - 土居 正人 (吉備国際大学心理学部心理学科)

発表番号 4

- 自閉スペクトラム症児の睡眠問題に関する研究 (2)
— 児童発達支援専門職者へのインタビュー調査からみた養育者の認識と対応 —……………7
- 武井 祐子 (川崎医療福祉大学)
 - 池内 由子 (川崎医療福祉大学)
 - 水子 学 (川崎医療福祉大学)
 - 岡野 維新 (川崎医療福祉大学)

発表番号 5

- 自傷傾向を高める不適応スキーマの検討
自傷発生までの感情情報伝達プロセスを経て……………9
- 波平 乃衣 (吉備国際大学大学院心理学研究科)
 - 遠藤 まな (吉備国際大学大学院心理学研究科)
 - 土居 正人 (吉備国際大学心理学部心理学科)

発表番号 6

- 勝ち負け場面における学童期 ASD 児の情動調整方略 11
- 岡野 維新 (川崎医療福祉大学・広島修道大学大学院)
 - 武井 祐子 (川崎医療福祉大学)
 - 門田 昌子 (川崎医療福祉大学)
 - 竹内 いつ子 (川崎医療福祉大学)

☆発表番号 7

- 一日一善が与えるネガティブ感情軽減効果の再検討
自傷傾向高低群別の質的質問回答の検討より 13
- 大平 有紗 (吉備国際大学心理学部心理学科)
 - 土居 正人 (吉備国際大学心理学部心理学科)

☆発表番号 8

- ぬり絵が大学生の生きがい感に与える影響 15
- 濱崎 琉晟 (吉備国際大学大学院)
 - 藤原 直子 (吉備国際大学心理学部)
 - 若森 孝彰 (吉備国際大学心理学部)

☆発表番号 9

- 自傷発生リスクがある中で自傷傾向が低い者のレジリエンスとは
周囲の関係者(縦・横・斜め)からのサポートの検討を経て 17
- 森岡 慶光 (吉備国際大学大学院心理学研究科)
 - 土居 正人 (吉備国際大学心理学部心理学科)

発表番号 10

- シャピロよりも努力を要する“目による新しいリラクゼーション”が著しい効果を持つ 19
- 三谷 恵一 (岡山大学・環太平洋大学)

☆発表番号 11

- インタビュー面接における一日一善心理教育プログラムの効果の質的検討
ネガティブ感情及び自傷傾向軽減に影響している要因の探索 21
- 上村 達也 (吉備国際大学大学院心理学研究科)
 - 土居 正人 (吉備国際大学心理学部心理学科)

☆発表番号 12

- 友人が関係するいじめを見聞きした第三者がいじめに関与する際の内的要因の検討 23
- 平松 美菜子 (川崎医療福祉大学大学院)
 - 進藤 貴子 (川崎医療福祉大学)

☆発表番号 13

恥と罪責感がセルフ・コンパッションに与える影響.....25

- 野田 涼祐 (吉備国際大学大学院心理学研究科)
- 村上 勝典 (吉備国際大学心理学部心理学科)
- 宇都宮 真輝 (吉備国際大学心理学部心理学科)

☆発表番号 14

自己注目における省察と解決困難な日常出来事に対するコーピングとの関係.....27

- 木暮 将平 (川崎医療福祉大学)
- 水子 学 (川崎医療福祉大学)

☆発表番号 15

児童養護施設における造花アレンジメント制作が児童の心理に及ぼす影響
—自己効力感と気分—に焦点をあてて.....29

- 奥野 優太 (吉備国際大学心理学部)
- 木曾 那光華 (吉備国際大学心理学部)
- 大恵 彩伽 (吉備国際大学大学院心理学研究科)
- 藤原 直子 (吉備国際大学心理学部)

☆発表番号 16

大学生の LINE の効用認知と LINE 相談への抵抗感との関連.....31

- 澤田 亘平 (川崎医療福祉大学大学院)

☆発表番号 17

バウムテストの指標と性格特性との関連
量的研究手法の探索.....33

- 安藤 智哉 (吉備国際大学心理学部心理学科)
- 古川 碧 (吉備国際大学心理学部心理学科)
- 櫻本 弥陸 (吉備国際大学心理学部心理学科)
- 渡邊 綾 (吉備国際大学心理学部心理学科)
- 永友 仁菜 (吉備国際大学心理学部心理学科)
- 名木田 亜侑美 (吉備国際大学心理学部心理学科)
- 土居 正人 (吉備国際大学心理学部心理学科)

☆発表番号 18

少年犯罪に対する知識が犯罪不安及び少年犯罪者の受容に与える影響.....35

- 布野 聖馬 (川崎医療福祉大学)
- 山根 嵩史 (川崎医療福祉大学)

☆発表番号 19

- 気象条件が女性の抑うつに与える影響
—ストレス・環境要因との関連から—……………37
- 橋本 穂乃香 (川崎医療福祉大学)
 - 山根 嵩史 (川崎医療福祉大学)

☆発表番号 20

- 完全主義がワーカホリズムを介してプレゼンティーズムに与える影響……………39
- 加賀 千瑛実 (川崎医療福祉大学大学院)
 - 谷原 弘之 (川崎医療福祉大学)
 - 山根 嵩史 (川崎医療福祉大学)

☆発表番号 21

- 青年の対人関係における過敏性が自己表現を介して本来感に及ぼす影響……………41
- 中川 紗耶加 (川崎医療福祉大学大学院)
 - 福岡 欣治 (川崎医療福祉大学)

発表番号 22

- 自己受容をもたらす適切な自己側面への注目
—背景要因としての被受容感・被拒絶感を含めた検討—……………43
- 照下 未夕 (川崎医療福祉大学臨床心理学科)
 - 福岡 欣治 (川崎医療福祉大学臨床心理学科)

発表番号 23

- アルバイトを中心とした他世代との関わりと大学生のコミュニケーションスキルとの関連…45
- 原田 侑佳 (川崎医療福祉大学臨床心理学科)
 - 福岡 欣治 (川崎医療福祉大学臨床心理学科)

発表番号 24

- 大学生における進路選択自己効力感とキャリア成熟の関連……………47
- 藤原 顕慈 (川崎医療福祉大学臨床心理学科)
 - 福岡 欣治 (川崎医療福祉大学臨床心理学科)

発表番号 25

- 青年期における過去の挫折の捉え方と自己肯定感の関連……………49
- 馬越 亮弥 (川崎医療福祉大学臨床心理学科)
 - 福岡 欣治 (川崎医療福祉大学臨床心理学科)

発表番号 26

不安の高い大学生は占いを信じやすいのか? 51

- 宗平 涼平 (川崎医療福祉大学 臨床心理学科)
- 福岡 欣治 (川崎医療福祉大学臨床心理学科)

☆発表番号 27

自己制御と文化的自己観が炎上の当事者及び当事者周辺に対する意識に及ぼす影響..... 53

- 中村 真由 (川崎医療福祉大学大学院)
- 高尾 堅司 (川崎医療福祉大学医療福祉学部)

☆発表番号 28

相談行動の利益とコストの予期が援助要請行動に及ぼす影響..... 55

- 篠村 美緒 (川崎医療福祉大学大学院)
- 進藤 貴子 (川崎医療福祉大学)

☆発表番号 29

小学生及び中学生のストレスやソーシャルサポートの状況が登校状態に及ぼす影響..... 57

- 假谷 奈々美 (川崎医療福祉大学大学院)
- 齊藤 由美 (川崎医療福祉大学)
- 澤原 光彦 (川崎医療福祉大学)

☆発表番号 30

自閉症スペクトラム障害児の食行動の問題に対する養育者の困り感の変化及び支援者に
求められる支援 59

- 平 優希 (川崎医療福祉大学大学院)
- 武井 祐子 (川崎医療福祉大学)
- 齊藤 由美 (川崎医療福祉大学)
- 寺崎 正治 (川崎医療福祉大学)

☆発表番号 31

大学生の親準備性が子どもの反抗的行動に対する認知と対応に及ぼす影響 61

- 笠石 愛莉 (川崎医療福祉大学大学院)
- 武井 祐子 (川崎医療福祉大学)
- 池内 由子 (川崎医療福祉大学)
- 寺崎 正治 (川崎医療福祉大学)

☆発表番号 32

未来展望の曖昧と気分の関連における制御焦点の調整効果 63

- 白石 奈津栄 (岡山大学社会文化科学研究科)
- 堀内 孝 (岡山大学学術研究院社会文化科学学域)

☆発表番号 33

児童生徒の援助要請行動を高める養護教諭の役割 65

- 長町 朋香 (川崎医療福祉大学大学院)
- 武井 祐子 (川崎医療福祉大学)
- 岡野 維新 (川崎医療福祉大学)
- 寺崎 正治 (川崎医療福祉大学)

☆発表番号 34

バランスのとれた時間的展望を示すクラスターは存在するのか 67

- 張 澤 (岡山大学社会文化科学研究科)
- 白石 奈津栄 (岡山大学社会文化科学研究科)
- 堀内 孝 (岡山大学学術研究院社会文化科学学域)

☆発表番号 35

未来展望と就職動機づけとの関連

一交差遅延効果モデルを用いた縦断データの検討一 69

- 閻 琳 (東海学院大学)
- 張 澤 (岡山大学)
- 白石 奈津栄 (岡山大学)
- 李 媚祺 (岡山大学)
- 鈴木 千晴 (立命館大学)
- 堀内 孝 (岡山大学)

発表番号 36

親からの期待と青年期のアイデンティティ形成との関連

一きょうだいの有無に着目して一 71

- 小柳 穂乃実 (川崎医療福祉大学大学院)
- 門田 昌子 (川崎医療福祉大学)
- 武井 祐子 (川崎医療福祉大学)

発表番号 37

大学生における大学用語に対する理解度と大学生活への適応感の関連 73

- 廣瀬 結衣 (山陽学園大学総合人間学部ビジネス心理学科)
- 高橋 功 (山陽学園大学総合人間学部ビジネス心理学科)

☆発表番号 38

青年期の愛着スタイルがもたらすインターネット上で出会った相手への信頼感の差異75

- 森 詩媛 (川崎医療福祉大学大学院)
- 武井 祐子 (川崎医療福祉大学)
- 高尾 堅司 (川崎医療福祉大学)
- 寺崎 正治 (川崎医療福祉大学)

発表番号 39

学齢期を対象とした LGBTQ 啓発教材開発および 開発活動者の自尊感情と自己成長感について77

- 脇田 藍 (山陽学園大学)
- 上地 玲子 (山陽学園大学)

☆発表番号 40

自己志向的完全主義傾向者のコーピング方略
—主観的幸福感からの検討—79

- 東 加奈子 (川崎医療福祉大学大学院)
- 武井 祐子 (川崎医療福祉大学)
- 則武 良英 (川崎医療福祉大学)
- 寺崎 正治 (川崎医療福祉大学)

発表番号 41

「LGBTQ 啓発かるた」を使ったワークショップに参加した小学生の心理的变化81

- 中村 文香 (山陽学園大学)
- 上地 玲子 (山陽学園大学)

発表番号 42

コロナ禍における友人関係83

- 黒住 若葉 (山陽学園大学)
- 上地 玲子 (山陽学園大学)

発表番号 43

ダウン症児の母親における就労継続について85

- 上地 玲子 (山陽学園大学)

大会発表奨励賞

大会発表奨励賞受賞者87

回想による児童期から青年期におけるきょうだい関係の変化

きょうだいの好意性とその理由の検討

○堤 遥香* ・ 土居 正人*

(*吉備国際大学心理学部心理学科)

キーワード：きょうだい，好意性，評価，類似

問題と目的

現代の日本は少子化・核家族化が進んできていることから、家族構成の中で祖父母あるいはきょうだいといった関係は少なくなってきた。家族内のコミュニケーションは、親と子だけ一方向のみであり、簡素化している。さらに近年では、きょうだいの数の減少と共に、外面的・表面的にしか関係を結べない希薄なきょうだい関係が増加していると言われている(岡崎ら, 2004)。親でもない友達でもない存在であるきょうだいとは、それを持つ者にとって、どのような関係であるのだろうか。本研究では、きょうだいとの関係について検討し、家族内における役割について考える。きょうだい関係は、児童期から青年期へと年代が上がるにつれて変化し、上下関係による単純な関係から対等な関係としての複雑な関係へ変化すること(岡崎ら, 2004)や、きょうだいを好む度合い(好意性)や誇りに思う気持ちは、中～大学生にかけて高まること(磯崎, 2006; 2019)、きょうだいとの関係がポジティブになるのは、女子では中学～高校生、男子では高校生～大学生であること(磯崎, 2019)が、これまでの研究で分かっている。しかし、例えば磯崎(2006)の研究では、中～大学生を対象に研究を行っているが、各年代を代表する参加者それぞれが回答しているため、年代に変化があるかどうかには疑問が残る。そこで本研究では、調査の質問をする際に、参加者の過去のきょうだい関係(小～大学生)をそれぞれ思い出してもらい記入してもらうことで、同じ参加者によるきょうだい関係の好意性を検討することを可能にできると考えた。

そこで本研究の目的は、きょうだい関係の好意性がどの年代で変化するのか、変化するのであれば、どのような理由で変化しているのかについて検討することである。仮説としては、先行研究と同様にきょうだいの好意性は年代が上がるにつれて高くなると予測する。

方法

本研究の調査は大学生 126 名(有効回答者 121 名、率 96.0%)を対象に実施した。男性は 58 名、女性は 62 名、その他は 1 名であった。平均年齢は 20.0 歳($SD=3.18$)、分析対象は全て日本人学生とした。きょうだいがいる参加者は 98 名(有効回答者 93 名、率 94.9%)、きょうだいがいない参加者は 23 名であった。

用いた調査用紙について、研究の目的及び倫理的配慮に関する内容をフェイスシートに記載した。調査参加は記入をすることによって承諾することとし、倫理的配慮(成績の評価にはならないこと、中断はいつでも行って良いこと等)を行った上で調査を実施した。

使用した質問紙について、①きょうだいの構成を分類できるようにするため、参加者はきょうだいが生まれた順番(参加者本人も含む)と性別を記入してもらった。そして、その中から最も好意的な 1 名のきょうだいを選んでもらった。②熊谷(2020)の日本語版 Lifespan Sibling Relationship Scale(成人期)の尺度(23 項目)から、きょうだいの好意性に当てはまる項目を参照して 2 項目を用いた。本研究において「好意性」は、「私は私のきょうだいと一緒にいる時は、楽しい気持ちになる」と、「私は私のきょうだいと一緒に時間を過ごすことが好きである」の項目を合わせて平均した得点として表現した。回答は 5 件法(1:そう思わない～5:そう思う)であった。③磯崎(2006)のきょうだいに関する質問項目(9 項目)に加えて、興味を持った事柄についての項目を追加した尺度(9 項目)である。項目は、「きょうだいと容姿が似ている」や「きょうだいを尊敬している」等の 18 項目とした。回答は 5 件法(1:そう思わない～5:そう思う)であった。好意性及びきょうだいの評価の項目は、それぞれ小学生、中学生、高校生、大学生(現在)の年代を想起し回答してもらった。

結果

まず、きょうだいに対する評価の 18 項目に対して最

尤法 Promax 回転による探索的因子分析を行った。その結果、2 因子が抽出され、第 1 因子は自分からきょうだいの評価に関する 4 項目で構成された。第 2 因子は自分ときょうだいの類似度の評価に関する 8 項目から構成された。

次に、きょうだいに対する好意性・評価の各年代の差について検討するため、期間（回想した時の小～大学生時）を独立変数、好意性を従属変数とした対応ありの一要因分散分析を行った。その結果、全ての従属変数に有意な差が見られた(好意性： $F(3, 285)=6.33, p<.01, n=.06$ ，評価： $F(3, 285)=23.44, p<.001, n=.20$ ，類似度： $F(3, 285)=3.42, p<.05, n=.04$)。Tukey の多重比較の結果、好意性では、中学校($m=3.34$)が最も低かった。きょうだいへの評価因子では、中学生($m=2.93$)が最も低く、大学生($m=3.61$)が最も高かった。きょうだいとの類似度因子は小学校($m=2.58$)が最も高かった。

次に、各因子及び各項目における好意性との相関を調べた所、きょうだいへの評価因子の相関係数は全体的に高いが、その中でも高校生が最も高く、各項目でも特に高校生が高かった。類似度因子では、きょうだいへの評価因子よりは低い値を示していた。どの年代も同程度であり、各項目で見ると、「容姿($r=.34, p<.001$)」と「コミュニケーション($r=.33, p<.001$)」は高校生が高く、「学力($r=.21, p<.05$)」は小学生が、「努力の割合($r=.29,$

$p<.01$)」は大学生が高かった。

考察

結果より、きょうだいに対する好意性と自分からきょうだいに対する評価は、小学生から中学生にかけて低下し、以降、高校生・大学生へと高まっていくことが分かる。自分ときょうだいの類似度の評価は、小学生から中・高校生で低くなっている。

相関係数を見ると、自分からきょうだいへの評価は、好意性と同じ意味を示しているの、高い値を示しやすいのだろう。しかし、自分ときょうだいの類似度は、高いほど好意性が高まるようで、小学生時には、学力がきょうだいと同程度であるほど好意性が高く、高校性になるほど容姿とコミュニケーションが同程度になると高まるようである。ここから、きょうだいの好意性は他者からの評価が大きな要因となっていると考えられる。すなわち、高校性になると、他者から比較されることが多くなり、自分ときょうだいに異なりがあることで、好意的に見られなくなるようである。

以上のことから、きょうだいへの好意性は、単に自分から見た好き嫌いだけではなく、他者評価によって脅かされる自身の劣等感等も関係していると推測され、今後の研究では、他者評価も含めた検討をしていくことが重要であると考えられる。

表 1 各年代の好意性・評価における一要因分散分析

n=95	小学生	中学生	高校生	大学生	F	偏 η ²	
	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)			
きょうだいに対する好意性	3.65 (1.14)	3.34 (1.33)	3.67 (1.30)	3.85 (1.26)	6.33**	.06	中<小**・高***・大***, 高<大*
因子 I：自分からきょうだいに対する評価	3.13 (1.08)	2.93 (.99)	2.99 (1.09)	3.61 (1.15)	23.44***	.20	中*・<小, 小***・中***・高***<大
因子 II：自分ときょうだいの類似度の評価	2.58 (.88)	2.37 (.82)	2.38 (.91)	2.45 (.93)	3.42*	.04	中***・高*<小

表 2 各因子及び各項目における好意性との相関

きょうだいに対する評価項目	小学生好意性 n=94	中学生好意性 n=95	高校生好意性 n=96	大学生好意性 n=96
因子 I：自分からきょうだいへの評価	.66***	.79***	.84***	.83***
項目 11：きょうだいと一緒にいると楽しい	.83***	.86***	.94***	.88***
項目 14：きょうだいがいることに対して感謝の気持ちがある	.50***	.76***	.77***	.69***
項目 17：きょうだいに相談事をする	.37***	.49***	.59***	.52***
項目 18：きょうだいを尊敬している	.47***	.68***	.70***	.61***
因子 II：自分ときょうだいの類似度の評価	.30**	.24*	.30**	.32**
項目 1：きょうだいと容姿が似ている	.12	.27**	.34***	.30**
項目 4：きょうだいと学力は同程度だ	.21*	.05	.12	.13
項目 5：きょうだいとコミュニケーション力は同程度だ	.16	.10	.33**	.26**
項目 6：きょうだいの才能は同程度だ	.29**	.22*	.27**	.24*
項目 7：きょうだいの努力の割合は同程度だ	.25*	.09	.24*	.29**
項目 8：きょうだいの目立ち度は同程度だ	.22*	.20*	.20*	.24*
項目 9：きょうだいの他人からの人気は同程度だ	.09	.18	.18	.16
項目 10：きょうだいの褒められ度は同程度だ	.30**	.30**	.37***	.32***

*= $p<.05$, **= $p<.01$, ***= $p<.001$

自閉スペクトラム症児の睡眠問題に関する研究（1）

—児童発達支援専門職が捉えた睡眠特徴—

○池内 由子 ・ 水子 学 ・ 岡野 維新 ・ 武井 祐子

(川崎医療福祉大学)

キーワード：autism spectrum disorder, sleep problems, sleep wake cycle

問題・目的

自閉スペクトラム症（autism spectrum disorder, 以下 ASD）のある子どもには睡眠問題が生じやすいことが報告されている。稲沼（1984）は、自閉症児の入眠時刻と起床時刻は定型発達児と比べて不規則であること、一日の睡眠回数が変動しやすいこと、中途覚醒が多いことなど、睡眠-覚醒リズムの不規則さを報告している。また、瀬川（1982）は、定型発達児の睡眠-覚醒リズムは5歳以降に夜間1回の単相性睡眠に移行する一方で、自閉症児はそれより遅れる傾向があることを示唆している。以上のことから、ASD児の睡眠特徴のひとつに睡眠-覚醒リズムの不規則さが考えられ、そのリズムは年齢が上がっても確立されにくいことが考えられる。子どもの睡眠は量だけでなく、入眠時間・起床時間の規則的なリズムや眠りの質の確保が心身の発達・発育に重要であるとされており、睡眠問題が自律神経系の不調や問題行動につながる可能性が指摘されている（谷口，2017）。さらに、ASD児においては、児のもつ特性や症状によって睡眠が妨げられる可能性があることが示唆されており（池内ら，2019）、ASD児の支援に携わる専門職が睡眠問題に早期に着目し、支援につなげていくことにより、問題行動や二次障害の予防に寄与できるのではないかと考えられる。

そこで、本研究では、発達支援に携わる専門職を対象とし、専門職がASD児の睡眠特徴や睡眠問題をどのように捉えているかを探索的に分析し、日常の発達支援の現場において家族と共有すべきASD児の睡眠特徴を抽出することを目的とした。

方法

被調査者 A県内の児童発達支援事業所、相談支援事業所等で発達支援に携わる専門職5名であった。性別は全て女性であり、年代は40代～60代、職種の内訳は、児童発達支援管理責任者3名、相談支援専門員1名、保育士1名であった。

調査手続き 被調査者の所属機関の所属長に同意を得た後、当該機関の専門職者に対して調査目的、概要を説明し、得られたデータは厳重に保管し、研究以外の目的で使用しないこと、個人が特定されることはないこと、一旦同意後も辞退可能であり、辞退に伴う不利益は一切生じないことを文書と口頭で説明した。調査

協力への同意が確認された場合、同意書への署名、捺印を得たうえで面接を実施した。調査時期は、2020年9月～2021年8月であり、各被調査者に対して30分～60分の半構造化面接を1回実施した。面接では、ASDの診断または疑いのある乳幼児期の子どもの睡眠について、就寝前、睡眠中、夜間覚醒、起床時、昼寝・日中の眠気、その他、子どもの睡眠に関する養育者の対応に関して専門職からみた特徴や気づいたことを尋ねた。面接内容は、被調査者の同意を得た後にICレコーダーに録音した。なお、本研究は川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を受けて実施した（19-114号）。

データの整理 録音した音声データについて逐語録を作成した。そのうえで、心理学を専門とする研究者2名により、回答内容から、ASDまたはASDの疑いのある子どもの「入眠前」、「入眠後」、「起床時」、「日中の睡眠」に関する内容を抽出した。抽出した内容は、KJ法を用いて分類し、カテゴリー化を行った。

結果

「入眠前」に関する回答は29件あり、【入眠困難】【リズムの不規則さ】【特定の環境が必要】【環境変化で寝られない】【眠れない時の行動】【その他】の6つのカテゴリーが生成された。そのうち【入眠困難】に関する回答は8件あり、5名中4名が報告した。内容は、“寝付けないお子さんが比較的多くいるということ”、“寝付くまでに時間がかかりますっていう”などであった。【リズムの不規則さ】は4件あり、5名中2名が報告した。内容は、“なかなか睡眠リズムが整わなくて”、“もう夕方になったらパタッと寝てしまうお子さん”などであった。【特定の環境が必要】は7件あり、5名中2名が報告した。内容は、“チャイルドシートで寝られる子だったんです”、“寝ない、抱かないと寝られない”などであった。【環境変化で寝られない】は2件あり、5名中1名が報告した。内容は、“寝具を変えたりとかにとっても不安でそういうときは全く寝れないとかよくお聞きします”、“季節の変わり目に寝にくいとかはよく聞くなど”であった。【眠れない時の行動】は7件あり、全員が報告した。内容は、“他の部屋に移動したり”、“いくら環境を整えても遊んでしまう”、“やることなくただただ動いていたりとかというふうな状況は多いと感じて”などであった。【その他】は1件

あり、“もともと寝にくいお子さんが喉が渇いたとか”であった。

「入眠後」に関する内容は30件あり、【朝まで寝られる】【浅眠・寝ぼけ】【中途覚醒・一度に眠る時間が短い】【夜驚・うなされる】【一旦起きると寝られない】

【中途覚醒後の行動】【その他】の7つのカテゴリーが生成された。【朝まで寝られる】は3件あり、5名中2名が報告した。内容は、“一旦寝てしまえば朝まで寝られるっていうタイプのお子さん”、“夜間覚醒はあまりしなくて”などであった。【浅眠・寝ぼけ】は6件であり、5名中3名が報告した。内容は、“2階で寝た子どもが半分寝ぼけた状態で1階に降りてきて”、“2回目に寝たときは、かなり長くうつらうつらするというイメージ”などであった。【中途覚醒・一度に眠る時間が短い】は7件あり、5名中3名が取り上げた。内容は、“眠りについたらけど小さな物音で起きてしまう”、“ぐっと短い時間寝る”などであった。【夜驚・うなされる】は5件あり、5名中3名が報告した。内容は、“ほんとに泣いたり叫んだりが激しいので、お母さんがたいへん困られてる”、“時々うなされたり”などであった。【一旦起きると寝られない】は4件あり、5名中2名が報告した。内容は、“反対にもうぱっと目が冴えてしまってそこから寝付けなくなる”、“寝ない”などであった。【中途覚醒後の行動】は4件あり、5名中3名が報告した。内容は、“朝かのような行動をしてしまう子”、“夜驚ではないけれども夜中ずっと遊んでるっていう子どもさんも聞きます”などであった。【その他】は1件で、“結局何しても寝ないのでドライブに連れていくしかない”であった。

「起床時」に関する内容は17件あり、【早朝覚醒】【寝起きの良さ】【機嫌の悪さ】【朝起きられない・寝起きの悪さ】の4つのカテゴリーが生成された。【早朝覚醒】は2件あり、5名中1名が報告した。内容は、“ほんとに早く目覚めて”、“夜遅かったのに早くから起きて”であった。【寝起きの良さ】は5件あり、5名中2名が報告した。内容は、“すっきり目覚めているお子さんもいれば”、“起床のところはパンと起きるといふか、それでグズグズはないというお子さんはかなり多い”などであった。【機嫌の悪さ】は5件あり、5名中1名が報告した。内容は、“起きた時にとても機嫌が悪い”、“機嫌の悪さを引きずって、お昼ぐらいまで機嫌の悪さを引きずるっていう話は時々聞きます”などであった。【朝起きられない・寝起きの悪さ】は5件であり、5名中3名が報告した。内容は、“寝起きが悪いお子さんなんですけど”、“起きてても自分で降りてこれないので、親御さんが抱いて下ろす”などであった。

「日中睡眠」に関する内容は16件あり、【日中寝る】【昼寝ができない】【昼寝の習慣づくりの難しさ】の3

つのカテゴリーが生成された。【日中寝る】に関する回答は7件あり、5名中4名が取り上げた。内容は、“夕方ほんとに一瞬5秒ぐらいカクッと寝ちゃって”、“普通に寝ても(昼間)寝てしまう、3歳、4歳になっても・・・っていうことも”、“寝たまま受け取ったりっていうこともある”などであった。【昼寝ができない】に関する回答は7件あり、5名中3名が取り上げた。内容は、“過敏なお子さんのお昼寝、眠りに入るまで高ぶっているものがやはりすぐに落ちないので、眠りにとても時間がかかる印象”、“お昼寝の時間カーテンを閉めてあるけどまぶしくて寝れない”などであった。【昼寝の習慣づくりの難しさ】に関する回答は2件あり、5名中1名が報告した。内容は、“シーズンの始めはリズムがついていないので、眠りまでかなり時間がかかるが定着してくるとリズムが整ってきて”などであった。

考察

調査結果から、一部の専門職はASD児またはASDの疑いのある児の睡眠特徴として、入眠困難や眠る時間が一定しないなど睡眠-覚醒リズムの不規則さを認識していた。また、一部の専門職は一旦入眠すれば朝まで眠る児もいる一方で、浅眠や夜驚、過敏さによる中途覚醒があると捉えていた。さらに、一旦目覚めると睡眠の維持が困難になり、日中のような行動が見られる場合があると捉えている専門職もあった。起床時については、総睡眠時間や睡眠の質に関わらず、早朝覚醒やすっきり起床できると認識している専門職がいる一方で、寝起きの悪さや機嫌の悪さが続くと認識している専門職がいることも明らかになった。専門職間で認識している特徴に違いはあるが、入眠困難、夜間覚醒、不規則な睡眠-覚醒リズム、日中睡眠の特徴は、先行研究の知見と概ね一致するものであった。それ以外に、入眠困難な場合に就床を維持しにくく日中活動に近い行動が見られること、入眠しても浅眠や寝ぼけ、僅かな刺激で覚醒しやすいといった特徴も認識されており、就床していても、ASD児は睡眠の質に問題を抱えている可能性が示唆された。さらに、昼寝が困難との認識もあり、不規則な睡眠-覚醒リズムにより、必要時に眠れず、日中活動や夜間睡眠に影響が及ぶといった悪循環に陥りやすい可能性もうかがえる。ASD児においては、睡眠の質が低下しやすいことを踏まえ、日常的な関わりの中で、総睡眠時間や就床・起床時間等を家族と共有することに加え、入眠困難や睡眠の質に関連すると考えられる寝ぼけや中途覚醒の有無や頻度、日中睡眠の情報をASDの診断前後を含めた発達早期の段階から家族と共有する必要があると考えられる。

本研究は、令和元年度川崎医療福祉大学医療福祉研究費の助成を受けて実施した。

自傷傾向を低減するソーシャルサポート

不承認環境下でも自傷傾向が低い者が受けているサポートの検討を経て

○千田 優紀* ・ 土居 正人*

(*吉備国際大学心理学部心理学科)

キーワード：非自殺的自傷行為，ソーシャルサポート，不承認

問題と目的

近年、自分の手首をカミソリやナイフ等を使って傷つけるリストカット等、自分自身に意図的に身体的な苦痛や損傷を与える行いである非自殺的自傷行為（以下、自傷）が問題になっている。自傷研究は、現在までに様々行われており、特に、土居・三宅 (2020)と土居・齋藤 (2021)は自傷者の感情情報の伝達のプロセスモデルを作成し、自傷発生のメカニズムについて検討している。それによると、本人が持つ気質的要因である感受性の高さと環境要因である親からの不承認がリスクファクターであるとし、それが子供の推論の誤りを高め、感情調節機能を低下させ、自傷傾向（自傷が行われる可能性の高さのこと）を高めることにつながっている。例えば、肯定感の低い中学生は、高い者よりも両親からのサポートが低いといった研究結果が報告されており(細田・田畠, 2009)、両親からの関わりが子供の自己肯定感にとって重要であることを意味している。確かに、親から不承認的な態度をとられ続けることは、子供にとって大きなストレス要因になることは容易に想定できる。しかしながら、全ての親からの不承認を受けている者が自傷をしているとは限らない。そこで本研究では、親から不承認を受けている環境下の中であっても、自傷傾向が低い者が受けている環境要因について焦点を当てて考えたい。

その一つにソーシャルサポートが考えられる。ソーシャルサポートは社会における人とのつながりの中で行われる精神的または物質的な支援である。例えば、友人からのサポートがある者は生きがい感が高く、抑うつが低いことが報告されている(遠藤・大石, 2016)。また、心療内科に通院している患者と健常者を比較した研究では、患者の方がソーシャルサポートが不足している結果が示されている(加藤・芝山・坪井・中野, 1999)。このようなことから、ソーシャルサポートは抑うつの低減や肯定感の向上等に影響を及ぼすと考えら

れる。ここで自傷傾向が低い者が受けている周囲からのソーシャルサポートの状況を調べることができれば、自傷改善のための周囲の人達による自傷者への関わり方を検討することができると考えられた。

そこで本研究では、母親から不承認を受けている可能性が高い群（母親不承認高群）と低い群（低群）に分けた上で、母親不承認高群であるにも関わらず、自傷傾向が低い人達のソーシャルサポートを調べることで、自傷を低減する支援方法を見当することを目的とした。ここで母親に限定する理由は、父親不承認では結果が見られないというこれまでの研究結果を踏まえたからである。仮説としては母親不承認高群でありかつ自傷傾向低群の場合ソーシャルサポートの値は、母親不承認高群で自傷傾向高群のそれよりも高いと予測される。

方法

本研究は、大学生 117 名(有効回答数 112 名, 率 95.7%)を対象に調査を実施した。男性は 61 人, 女性は 50 人, 無回答 1 名であった。平均年齢は 21.21 歳, $SD=3.24$ 歳であった。分析対象は日本人のみとした。用いた調査用紙について、フェイスシートには研究目的及び倫理的配慮に関する内容を含み、調査の際に匿名での記入を行ってもらうこと、授業の評価にはならないこと、答えづらい質問がある場合は回答を飛ばしてもよいこと、集団のデータを統計的に処理し、分析済みの調査用紙はシュレッダーで処分すること等、個人情報の保護について説明を行った。

使用した質問紙は、土居・三宅・園田 (2013)の自傷行為尺度を用いた。尺度は 20 項目からなり 4 件法 (1: まったくその通り~4: 全く違う) であった。この尺度の因子は「抑圧状態」, 「自責思考」, 「承認欲求」, 「親子葛藤」から構成されている。次に、片受・大貫 (2014)の大学生用ソーシャルサポート尺度を用いた。尺度は 23 項目 4 件法 (1: 全く当てはまらない~4: よくあてはまる) であった。因子について「評価的サポート」因

子は、「あなたの成果に感謝してくれる」等の人からの評価に関するソーシャルサポートに関して、「情報・道具的サポート」因子は、「問題解決方法について、アドバイスしてくれる」等の人からの情動的サポートと道具的サポートについて、「情緒・所属的サポート」因子は、「あなたの悩みやグチを聞いてくれる」等の気持ちの面でのサポートや所属に関するサポートについてたずねている。最後に、母親不承認を測定するために落合・佐藤(1996)の親子関係の心理的離乳尺度の「子が親から信頼・承認されている関係」因子の得点を逆転させた母親不承認尺度を用いた。尺度は20項目からなり、5件法(1:全く当てはまらない~5:かなりあてはまる)であった。統計的分析には、HAD(清水,2016)を使用した。

結果

各尺度及びその下位因子における平均値及びSD、 α 係数を表1に示した。次に、母不承認低高と自傷傾向低高におけるソーシャルサポートの差を検討するため、二要因分散分析を行った(表2)。ソーシャルサポート全体(順に自傷: $F(3, 108)=4.16, p<.05$, 母不承認 $F(3, 108)=9.33, p<.01$), 評価的サポート($F(3, 108)=4.15, p<.05$, $F(3, 108)=9.53, p<.01$), 情報・道具的サポート($F(3, 108)=2.83, p<.10$, $F(3, 108)=4.32, p<.05$)において、自傷傾向低高と母不承認低高の両方の主効果に有意または有意傾向が見られた。次に、母不承認高群の中で、自傷傾向の低高のソーシャルサポートの違いを検討するため、

t 検定を行った(表3)。その結果、「項目10:あなたの努力や心がけを労ってくれる($t(25.6)=1.98, p<.10$)」, 「項目14:あなたに必要な情報を与えてくれる($t(27.9)=2.84, p<.01$)」, 「項目16:あなたの努力や心がけに感謝してくれる($t(24.1)=1.92, p<.10$)」の項目において有意または、有意傾向の差が見られた。

考察

母不承認低高と自傷傾向低高における二要因分散分析の結果より、ソーシャルサポート、その中でも評価的サポートと情報・道具的サポートは、母親不承認が高く自傷傾向が高いほど、少なくなる傾向にあり、それぞれの要因がソーシャルサポートを低めていることが分かる。母親からの不承認環境下に置かれていたとしても自傷傾向が低い者がいるが、その人達は周囲からどのようなサポートを受けているかについて検討した。その結果、努力や心がけを労ってくれ感謝してくれること、必要な情報を与えてくれることが自傷傾向を低めるソーシャルサポート的関わりであることが推定された。

このことから、例え生活の多くを共にする母親から不承認的態度をとられていたとしても、周囲の人達が、その子の努力を褒め褒めること、困ったことがあれば、助けとなる言葉がけをしてくれることが重要であり、その関わりを受けている人ほど、辛い環境下に置かれていたとしても、自傷に至るほどのネガティブな精神状況に陥らずに済むと考えられる。

表1 基礎データ

尺度及び下位因子	$n=112$ $M(SD)$	α
自傷傾向	2.00 (.47)	.85
母不承認	2.14 (.77)	.95
ソーシャルサポート全体	2.96 (.70)	.97
評価的	2.92 (.71)	.97
情報・道具的	3.01 (.67)	.88
情緒・所属的	3.03 (.70)	.87

表2 母不承認低高×自傷傾向低高における二要因分散分析

		主効果				交互作用
		自傷傾向低群		自傷傾向高群		
		$M(SD)$	$M(SD)$	F	F	
ソーシャルサポート全体	母不承認低群	3.25 (.53)	3.02 (.58)	4.16*	9.33**	.08
	母不承認高群	2.89 (.77)	2.59 (.65)	.04	.08	.00
評価的サポート	母不承認低群	3.27 (.54)	3.00 (.62)	4.15*	9.53**	.01
	母不承認高群	2.56 (.74)	2.57 (.73)	.04	.08	.00
情報・道具的サポート	母不承認低群	3.18 (.65)	3.06 (.68)	2.83 †	4.32*	.76
	母不承認高群	3.00 (.79)	2.62 (.73)	.03	.04	.01
情緒・所属的サポート	母不承認低群	3.27 (.64)	3.07 (.57)	2.36	6.86**	.06
	母不承認高群	2.91 (1.00)	2.64 (.72)	.02	.06	.00

※主効果・交互作用列の上方はF値を、下方は効果量(偏 η^2)値を示している † $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$
 ※母不承認低群における自傷低群は46名, 高群は17名, 母不承認高群における自傷低群は14名, 高群は35名であった

表3 母不承認高群における自傷傾向低高のソーシャルサポートの差

ソーシャルサポート尺度の項目	母不承認高群の自傷傾向低群		母不承認高群の自傷傾向高群		t	df	r
	$M(SD)$	$n=14$	$M(SD)$	$n=35$			
項目10: あなたの努力や心がけを労ってくれる	3.07 (.83)		2.54 (.89)		1.98 †	25.6	.27
項目14: あなたに必要な情報を与えてくれる	3.29 (.73)		2.60 (.85)		2.84**	27.9	.36
項目16: あなたの努力や心がけに感謝してくれる	3.07 (.92)		2.51 (.92)		1.92 †	24.1	.27

※効果量 r 値の目安: .10 小 .30 中 .50 大

† $p<.10$, * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

自閉スペクトラム症児の睡眠問題に関する研究（2）

—児童発達支援専門職者へのインタビュー調査からみた養育者の認識と対応—

○武井 祐子 ・ 池内 由子 ・ 水子 学 ・ 岡野 維新

(川崎医療福祉大学)

キーワード： autism spectrum disorder, sleep problems, parents' awareness, parents' coping

問題・目的

発達障害には睡眠障害が併存することが指摘されているが(松澤,2014),自閉スペクトラム症(ASD:Autism Spectrum Disorder)においても就床時刻が遅い,夜間覚醒時間が長い,総睡眠時間が短いなどの睡眠障害が合併しやすいことが指摘されている(林,2006).ASDの子どもが睡眠問題を呈する割合は,少ない報告で34%,多い報告になると80%にも及ぶことが示されており(林,2006),ASD児は,高い割合で睡眠障害を呈すると言える.自閉症児の早期兆候として「睡眠が不規則」「睡眠時間が短い」といった睡眠に関する問題があること(星野他,1980),ASD児の養育者は,3歳の時点で睡眠リズムに関する心配ごとを訴えること(小淵,2007)が報告されており,ASD児に対する支援に関わる専門職者が,ASD児の幼児期からの睡眠の問題と支援すべき内容を適切に理解していることは重要であると考えられる.

そこで,本研究では,乳幼児期のASD児の支援に関わる専門職者に面接調査を行い,ASD児の睡眠問題に対する養育者の認識のあり方と対応方法について,専門職者がどのように捉えているかを探索的に分析し,ASD児とその家族に対して,専門職者が早期に提供すべき支援のあり方や内容について明らかにすることを目的とする.

方法

被調査者 A県内の児童発達支援事業所,相談支援事業所等で発達支援に携わる専門職者の女性5名であり,年代は40代から60代,職種は児童発達支援管理責任者3名,相談支援専門員1名,保育士1名であった.

調査手続き 所属長の同意を得た後,当該機関の専門職者に対して調査概要,得られたデータは厳重に保管し,研究以外の目的で使用しないこと,個人が特定されないことがないように分析することなどについて説明し,調査協力依頼を行った.調査協力への同意が得られた専門職者に対して,同意後も随時辞退可能であること,辞退に伴う不利益は一切生じないことを説明し,協力への同意が確認された場合,同意書への署名および捺印を得たうえで,被調査者に面接を実施した.2020年9月~2021年8月の間に,被調査者に対して,個別に30分~60分の半構造化面接を各1回実施した.面

接調査で聴取する内容について,ICレコーダーに録音することを被調査者に説明し,同意を得たうえで録音した.面接では,ASDの診断またはASDの疑いのある乳幼児期の子どもの睡眠について,就寝前,睡眠中,夜間覚醒,起床時,昼寝・日中の眠気,その他について尋ねるとともに,発達に心配のある,あるいはASDの診断や疑いがある乳幼児期の子どもの睡眠に関する養育者の状況や対応について気づいたことを尋ねた.なお,本研究は川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を受けて実施した(19-114号).

データの整理 逐語録化した被調査者の発言について,養育者の状況や対応についての専門職者からみた特徴や気づきを中心に,専門職者の認知に基づく養育者の睡眠特徴・問題に対する態度として抽出し,KJ法を用いて分類し,整理した.心理学を専門とする研究者1名が抽出し,心理学を専門とする研究者3名が確認した.

結果

抽出された被調査者の発言は48であった.抽出した発言について,KJ法を用いて分類し,カテゴリーを作成した結果,以下の5つのカテゴリーが生成された.

【養育者による取り組みの内容】を構成する発言は,“バスとか車のチャイルドシートで囲われると眠りやすいっていうお子さんで,あのお母さんがご自宅の寝室にチャイルドシートを大きいのをちょっと用意してそこで,ちょっと包まるようなしっかりしたものであれば寝やすいっていうことを取り組まれたり”など,延べ10件であり,5人中3人が報告していた.【養育者のしんどさ・困り感】に関する発言は,“眠れないってほんとにつらいこと,本人も大変だし,周りはほんとにつらいし,どうしてもやっぱり親御さんがこう,自信を無くす部分でもあるかなと,ちゃんと育てられないっていうような,ことも感じたり中にはそこで責められてるような保護者の方もいらっしゃいますし,とてもしんどい状況だなと思うんです”など,延べ13件であり,5人中4人が報告していた.【養育者の適切な対応がない】に関する発言は,“お母さんたちの対応も,ぐずったら「はい」ってタブレットがわたるみたいで,とても多いなって思います.…なんか体ゆらすとか,よしよしとか…っていうのはあんまり聞かないです”など,延べ7件であり,5人中3人が報告していた.

【訴えがない・対応のあきらめ】に関する発言は、“前だと8時からまあ9時までには寝かせたいと言っていたお母さんたちが、できれば9時だけれども、10時ぐらいまでは仕方がないよねというような発言が聞かれるようになったり”など、延べ8件であり、5人中4人が報告していた。【専門家としての考え・援助方針】に関する発言は、“生活を寝ない子のリズムで、すべてそこが巻き込まれていくというふうな、それをやっぱりこう、こういうふうな児童発達支援センターとかで、こう、毎日通園してくだされば、そのリズムがやはり変わってくるということで、応援できる”など、延べ10件であり、5人中3人が報告していた。

考察

【養育者による取り組みの内容】からは、養育者が日常生活の中での試行錯誤を通して、子どもの睡眠問題に取り組んでいることが明らかとなった。その背景として、ASD児の睡眠問題を引き起こす要因には感覚過敏などASD児特有の問題があり、日常生活において養育者がASD児特有の問題に対応すると同時に、ASD児の睡眠問題に対する取り組みが行われている可能性がうかがわれた。このことから、専門職者による早期支援においては、専門職者と養育者の双方が児の特性に関する理解を共有し、その上で養育者が日常生活に取り入れやすい対応方法を提案していくことが有効なのではないかと考えられる。【養育者のしんどさ・困り感】は、最も発言数が多かった。内容については、ASD児本人や養育者のしんどい気持ちや困り感、無力感だけでなく、家族関係の問題に言及されるなど、内容は多岐にわたっていた。養育者のしんどさや困り感は専門職者が最も注目している点であり、ASD児の睡眠問題に対する早期支援の必要性に関して、専門職者に強く認識されているのではないかと考えられる。【訴えがない・対応のあきらめ】については、母親をはじめとする養育者は、ASD児の睡眠問題に取り組んでも改善がみられないと、結果的にどのような対応になっていくのかというプロセスに専門職者が注目していることが明らかになった。この点について【養育者の適切な対応がない】の内容と合わせて考えると、ASD児の睡眠問題には、養育者だけの対応や工夫には限界があり、専門知識をもとに評価し、対応案を提案できる専門職者の早期からの介入が必要な問題だと捉えられていると考えられる。一方、【専門家としての考え・援助方針】では、家族のみでの解決が難しい際に、養育者の困り感やしんどさに寄り添いながら、専門職者は日常の関わりの中かで支援していくことが可能だと捉えられていた。したがって、ASD児の睡眠問題は養育者にとって困り感やしんどい思いにつながっている一方で、養育者はASD児の睡眠問題に対する対応をあきらめ

てしまったり、訴え自体がみられなかったりすること、養育者が中心となり様々な取り組みをする一方で、効果があらわれないことで対応が不適切となっていく可能性があることと専門職者に理解されていた。そのような理解をもとに、専門職者は、ASD児の睡眠問題に対して、養育者のしんどい思いや困り感に寄り添いながら、日常の関わりの中かで、専門職者としてASD児の特性に配慮した対応方法を早期に具体的に提案、提供していく必要があると捉えていると考えられる。

吉田(2003)は、子どもの発達について心配を感じたとき、保護者はそれが本当に心配すべきことなのかどうかをまず迷うこと、相談すべきかどうかを悩むのは保護者にとって苦しいことだと指摘している。一方で、日本だけでなく、海外においても、幼児期において、約20%、5人に1人が相談現場において、なんらかの育児上の心配があると指摘されていることが報告されており(吉田,2003)、相談現場などにおいて養育者が専門職者に相談できること、専門職者が養育者からの相談を適切に把握することは重要であると考えられる。今回の面接調査では、ASD児の睡眠問題は養育者の困り感やしんどい思いにつながっているものの、養育者の訴え自体がみられなかったりすることが明らかとなった。しかし、養育者の訴え自体がみられないとしても、支援を必要としている状態、あるいは支援を求めている状態と理解して、相談現場においては支援を開始していくことが重要ではないかと考えられる。特に、養育者は夜中に起きるのが当たり前の新生児のときから子どもを育てているため、眠らないことについて相談するきっかけをもちにくいとも指摘されている(吉田,2003)。ASD児の睡眠問題についてはとくに、ASD児本人にとっても養育者を含む家族にとっても支援が必要な状態である可能性が高いにもかかわらず、相談につながりにくい状況であることを考慮して、幼児期より専門職者が養育者に対して児の睡眠状態に対する聞き取りを実施していく必要があると考えられる。

以上、専門職者は、相談現場において養育者から睡眠問題を含めたASD児の日常生活の状況を適切に聞き取ることを試み、たとえ養育者から問題を訴えられることがなくても、養育者のしんどい思いや困り感に寄り添いながら、ASD児の特性を踏まえて、児とその家族に合った対応を日常の関わりの中かで助言していくことが必要であると考えられる。

引用文献

吉田友子：高機能自閉症・アスペルガー症候群「その子らしさ」を生かす子育て。初版，中央法規出版，東京，2003。

本研究は、令和元年度川崎医療福祉大学医療福祉研究費の助成を受けて実施した。

自傷傾向を高める不適応スキーマの検討

自傷発生までの感情情報伝達プロセスを経て

○波平 乃衣* ・ 遠藤 まな* ・ 土居 正人**

(*吉備国際大学大学院心理学研究科) (**吉備国際大学心理学部心理学科)

キーワード：非自殺的自傷行為，スキーマ，HSP，母親不承認，推論の誤り

問題と目的

思春期・青年期における自傷行為は、近年になってから増え始めた若者の問題行動である。自傷が起こるまでの経路についてはLinehan(1993)が提唱する「生物社会モデル」を元に土居・三宅(2020)と土居・齋藤(2021)が調査による実証研究を通して「自傷発生までの感情情報伝達プロセス」として提示している。それによると、子供自身に高い感受性(HSP: Highly Sensitive Person)の特性を有している者が、過去の生育環境の中で親(特に母親)からの不承認をとられ続けてきた場合、その子供には推論の誤りが生じやすくなるとされている。その推論の誤りは、感情調節不全とネガティブな感情の向上を経て自傷傾向を高めるとしている。

このように親不承認から推論の誤りの間の経路について検討されてきたが、そもそも推論の誤りの根底には、過去の体験を経て形成される個人の中核信念であるスキーマが関連していると考えられている(Beck, Rush, Shaw, & Emery, 1979)。その中でもYoungは「早期不適応スキーマ」を提唱した。これは非機能的な発達初期段階で形成され、生涯にわたって維持される自滅的な認知と感情のパターンであり、不適応な行動(例えば自傷等)は不適応スキーマによって駆動される反応であるとしている(Young, Klosko, & Waishaar, 2006)。

本研究の目的は自傷発生までの感情情報伝達プロセスの中でHSP傾向と親不承認が各不適応スキーマのうちどれを高め、その後の推論の誤りや自傷傾向を高めるのかについて検討することである。本研究では親子関係と自傷との関連について、特に結びつきが強い母子関係(土居・三宅, 2018; 土居・三宅, 2020; 土居・齋藤, 2021; 松岡・土居, 2022)に絞って検討する。

仮説としては、自傷発生までのプロセスの中で介する不適応スキーマは、母親不承認が関連していると予測される。

方法

調査対象者は大学生129名(有効回答者は125名、有効回答率は96.9%)であり、男性72名、女性53名であった。平均年齢は20.2±2.92歳であった。参加者は全て日本人学生であった。本調査では研究の目的、回答は強制ではないこと、授業の成績にはならないこと、個人情報の保護等について説明した。調査手続きについて、本調査は大学の講義前後に調査を依頼し、承諾を得た者を参加者として回答してもらった。

本調査で用いた尺度は、①親子関係の心理的離乳尺度(落合・佐藤, 1996)の母親用のうち、「子が親から信頼・承認されている関係」因子の合計得点を反転させて使用している。他にも、②青年期不適応スキーマ尺度 Adolescent Maladaptation Schema Questionnaire: AMSQ(松岡・土居・三宅, 2021)、③日本版 Highly Sensitive Person Scale(高橋, 2016)、④推論の誤り尺度(丹野・坂本・石垣・杉浦・毛利, 1998)、⑤自傷行為尺度(土居・三宅・園田, 2013)を用いた。自傷行為尺度は自傷傾向(自傷をする可能性の高さ)を検討することができる。

結果

統計的解析では、SPSS 23 及び Amos23 を使用した。分析では不適応スキーマを含めた自傷発生までのプロセスモデルを作成し、パス解析を行った。結果、適合度指標は、 $\chi^2(44)=66.34, p<.05, GFI=.94, AGFI=.82, RMS-EA=.06, AIC=250.34$ であった。パス係数及び有意水準は図1に示している。HSP傾向から不適応スキーマのパスでは、全てのスキーマに正のパスが示されていた。母親不承認から不適応スキーマのパスでは一部のスキーマ(欠陥・恥、依存・無能、評価希求、感情抑制スキーマ)に影響を与えていた。

考察

HSP傾向は、調査参加者の全ての不適応スキーマに影響を与えていることが示されていた。その反面、母親不承認はいくつかの不適応スキーマに限定されていた。まずHSP傾向のみから不適応スキーマ、そして推

論の誤り及び自傷傾向へとつながっている経路について見ていくと、感受性の高い者は育ってきた環境の中で他者の反応に敏感になりがちであり、失敗は許されないと考え（厳密・批判スキーマ）、その割には、どれだけ頑張っても親や周囲の人達から認められないと思いついでしまい、簡単な課題でも失敗だと認識してしまうようである（失敗スキーマ）。相手から嫌われないようにと努力して自分の思いを相手に伝えないことから従うだけとなってしまう（服従スキーマ）、自分のしたいことを後回しにしてきたため物事を素直に受け止めることができず、悲観的に捉えようとしてしまうのである（否定・悲観スキーマ）。

次にHSP傾向と母親不承認の両方が不適応スキーマを介して推論の誤り及び自傷傾向に至っている経路について見てみると、母親は子供が未熟であるとして過保護的に関わっていて、過剰な援助をしていることが予想される。それゆえに子供は生活面や金銭面において、必要以上に他者の力に依存してしまい、自分の力で困難を乗り越えようとする力が欠損していることが

想定される（依存・無能スキーマ）。また、子供は努力すればするほど母親から承認される関係にあり、推論の誤りを通過していることから、努力をしなければ褒められないとネガティブに捉えているとも考えられる（評価・承認スキーマ：負のパス）。そして、達成できない体験をする度に自身の能力や性格に問題や欠点があると捉えてしまっていて、それを恥ずかしいと考えているのだと考えられる（欠陥・恥スキーマ）。親に嫌われないようにと考え自身の気持ちを抑制し、素直に表現することが困難になっているのであろう（感情抑制スキーマ）。

以上のことから、HSP傾向の性質はどのような環境であれ、様々な不適応スキーマを生み出してしまいうのである。それに加えて母親からの不承認から分かることは、母親が子供に必要以上に関わろうとしているようで、母子関係が近すぎると考えられる。その関わりが子供のチャレンジする姿勢を失わせ、他者評価を重視するがあまりに子供に自身の基準を持たなくさせている可能性があることが推論された。

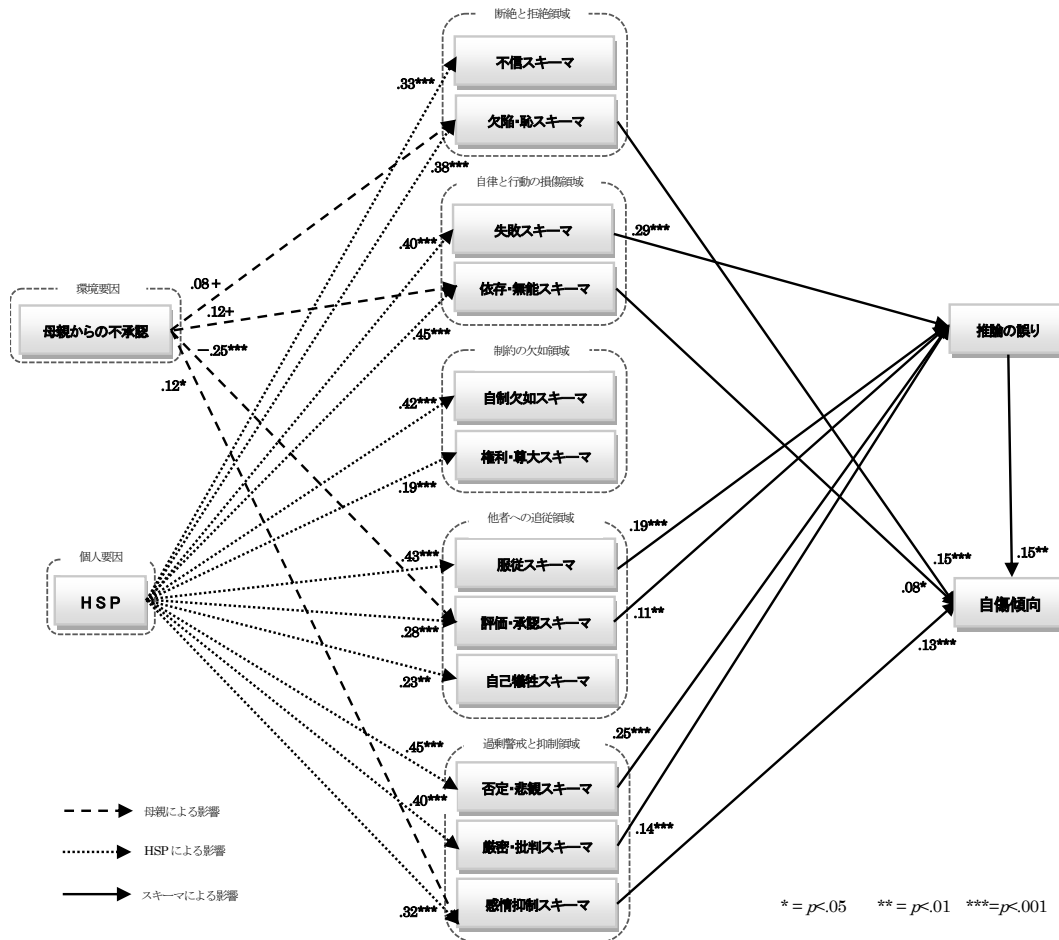


図1 HSP傾向と母親不承認が不適応スキーマを介して推論の誤り及び自傷傾向に及ぼすプロセス

勝ち負け場面における学童期 ASD 児の情動調整方略

○岡野 維新^{1,2} ・ 武井 祐子¹ ・ 門田 昌子¹ ・ 竹内 いつ子¹

(川崎医療福祉大学¹ ・ 広島修道大学大学院²)

キーワード：ASD, 学童期, 情動調整方略, 勝ち負け

問題・目的

自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder) のある子ども (以下 ASD 児) は情動調整が苦手であることが指摘されている (Mazefsky et al., 2014)。情動調整のために用いる具体的な方法を情動調整方略と言う (Gross, 2014)。これまで ASD 児の情動調整方略を検討した研究によれば, ASD 児は定型発達児 (以下 TD 児) よりも問題の原因を直接解決する, あるいは考え方をポジティブに捉え直すといった情動調整に効果的とされる方略の使用が少ないことや, 反対に攻撃などの表出的な方略が多いという特徴があることが示されている (Jahromi et al., 2012; Samson et al. 2015)。一方で, 先行研究では幼児期もしくは青年期も含めた学童期の ASD 児を対象としていることが多く, 学童期独自の特徴は未だ検討されていない (岡野, 2021)。

また, これまでの研究では ASD 児の情動調整の困難さに焦点が当たっていた。しかし, 岡野 (2023) が療育場面において学童期 ASD 児がどのように情動調整しているのかを参与観察した結果, 情動調整が困難となる場面 (激しい情動表出, トラブルへの発展) より, 情動調整を成功させている場面 (葛藤が生じても解決できる, 激しい表出等がみられない) の方が多いことを示した。つまり, 学童期 ASD 児は様々な特性を抱えながらも自ら方略を用いて情動調整を成功させている側面があることが明らかとなった。このように, いかにして学童期 ASD 児が情動調整を成功させているかという観点から方略の検討を行うことは, ASD 児支援において重要な知見を与えるだろう。さらに, 岡野 (2023) では観察可能な行動面の方略の検討に留まっており, 頭の中で行う認知的な方略の検討も併せて行う必要があるだろう。

そこで本研究では, 日常において頻繁に遭遇しかつ情動調整を必要とする勝ち負け場面を設定し, 学童期 ASD 児が情動調整成功に至る過程で用いた方略の特徴を行動面および認知面から検討することを目的とする。

方法

対象児 ASD の診断がある学童期の子ども 36 名 (M=7.97, SD=1.81, range=6-12) であった。

実験期間と場所 2023 年 8 月~11 月であった。対象児が利用する放課後等デイサービス内の個室で実施した。

実験課題 心理実験用ソフト PsychoPy (Pierce, et al., 2019) を用いて, 景品をかけてコンピューター (以下 CPU) とじゃんけんで勝負を行い, 総得点を競うじゃんけん課題を作成した。全 12 回戦で, 各対戦間に 15 秒のインターバルを設定した。勝つと 1p, 負けとあいこは 0p, 対象児のみ 3 回連続で勝つと追加の 3p が入る設定とした。4 から 9 回戦は必ず負ける設定とした。ただし, 1~3 回戦および 10~12 回戦で得た得点で最後は必ず総得点が逆転するように設定した。

手続き 実験者は PC 画面上で教示 (動作やルール, 総得点が CPU を上回ると優勝で景品がもらえること等) を行った。動作確認のための練習を行った後, 実験者は退室し, 対象児は 1 人でじゃんけん課題に取り組んだ。終了後実験者は入室し, 認知による情動調整方略を測定するために「負けた時に, 嫌な気持ちや, もやもやした気持ちがしましたか」と口頭で質問した。対象児が「した」と回答したら, 続けて「その気持ちが無くなるようにどのようなことを考えましたか」と質問し, 対象児が「しなかった」と回答したら「どうしてしなかったのか, その時どのようなことを考えていましたか」と質問した。最後はデブリーフィングを行い, 景品を渡して実験終了とした。実験中の対象児の様子は同室に設置したビデオカメラで記録した。

分析方法 本研究では全 12 回戦を最後まで取り組めたことを情動調整が成功したと捉え, その間に見られた行動および考えたことを情動調整方略とした。分析対象は CPU にじゃんけんで負けた時, および総得点で CPU に負けている時である 4~11 回戦の 8 回分とした。

行動による情動調整方略 Jahromi et al. (2012), Gross (2014) を参考にカテゴリーを作成し (Table 1), 記録した対象児の行動を評定した。評定は 8 回分の 120 秒 (8×15 秒) を 5 秒ごとに区切り 1 単位 (全 24 単位) とする時間見本法を用い, 生起頻度を集計した

認知による情動調整方略 Gross (2014) と岡野 (2021) を参考に作成したカテゴリーを作成した (Table 2)。評定は実験直後の質問に対して対象児が語った内容を切片化し, カテゴリーに基づいて分類した。そして発言回数を集計した。

倫理的配慮 本研究は川崎医療福祉大学倫理委員会に承認を受けて実施した (承認番号: 23-012)。

結果と考察

行動による情動調整方略の特徴 学童期 ASD 児が勝ち負け場面において情動調整が成功に至る過程で用いた行動による方略の結果を Table 1 に示した。観察された方略の中で頻繁に用いられていた方略は自己刺激と気逸らしであった。さらにその中で最も生起頻度の平均値が高かったものは自己刺激であった。また、自己刺激の具体的内容は自身で自身の身体の一部に触れるというものであった。これらのことから、何かしらネガティブな情動が喚起され得る状況下において、学童期 ASD 児にとって自身の身体に触れて感覚的な刺激を得る事は自身を落ち着かせる情動調整方略として意味を持つ可能性が示された。

認知による情動調整方略の特徴 学童期 ASD 児が勝ち負け場面において情動調整が成功に至る過程で用いた認知による方略の結果を Table 2 に示した。報告された方略の中で頻繁に用いられていた方略は再評価と問題解決であった。これは先行研究とは異なる結果が示された (Mazefsky et al., 2014; Samson et al. 2015)。さらに最も回答回数が多かった再評価の具体的内容は負けた状況を認識した上で前向きな気持ちに捉え直そ

うとするものであった。これらのことから、学童期 ASD 児は行動面だけでなく認知面においても効果的に情動調整を行っている実態が明らかとなった。

情動調整に用いた方略数 学童期 ASD 児がどのように情動調整方略を用いたのかを明らかにするために、1 人あたりが用いた方略数の平均値を算出した。その結果、行動による情動調整方略は 9.97/24 回 (SD=4.91)、認知による情動調整方略は 1.25 回 (SD=0.93) であった。学童期 ASD 児は TD 児よりも一度の情動調整場面で用いる方略の数が多く、調整には数を打って段階を踏む必要があることが指摘されている (岡野 2022; 岡野 2023)。本研究でも同様の傾向が示され、調整成功に至る過程には複数の方略を用いることが重要である可能性が見出された。

まとめ

本研究から学童期 ASD 児が行動面そして認知面において多様な方略を用いながら情動調整を行っている様相を示すことができた。今後は TD 群や他の臨床群との比較を通して学童期 ASD 児独自の情動調整方略の有無を検討する必要がある。

Table 1
行動による情動調整方略のカテゴリーと生起頻度と具体的内容

方略	操作的定義	平均値	SD	内容例
課題集中	課題に集中するための行動	0.50	0.66	・座り直して姿勢を正す ・手を使ってじゃんけんのシュミレートをする
気逸らし	課題から一時的に注意を逸らし注目を外す行動	3.58	2.29	・カメラや壁をみる ・パスボタンを押す
自己刺激	身体の一部に触れる、あるいは動かす行動を通して自身に刺激を入れる行動	4.89	3.40	・口に指を入れる、歯に指を当てる ・口元を触る
攻撃	自身あるいは物への攻撃行動	0.67	1.70	・キーボードを連打する ・頭を叩く
逃避	課題への取り組み自体を辞める行動	0.00	0.00	—
その他	上記に該当しない行動	0.33	0.63	・深呼吸をする ・状態を身振りで表現する
行動無し	行動がみられない	14.08	4.94	—

注1) 1つの行動が単位間で継続している場合は評定しなかった

注2) 1単位内で2つの異なる行動が見られた場合は先行した行動を評定した

Table 2
認知による情動調整方略のカテゴリーと回答数と具体的内容

方略	操作的定義	回答数	内容例
問題解決	勝つための戦略を考える	12	・「次何が出てくるかなと考えていた」 ・「神様お願い」
気逸らし	課題と無関係のことを考える	2	・「ほかのことを考える。好きなこと」 ・「髪の毛引っ張ってたらすぐ忘れる」
再評価	状況を前向きに捉え直すように考える	25	・「負けても大丈夫かって」 ・「次はぜってー勝ってやる」
反すう	負けている状況に焦点をあてて考える	3	・「あー間違えたって思った」 ・「得点をゲットできるかなと不安な気持ちを考えてた」
抑制	不快さに耐えることを考える	1	・「モヤモヤ感を溜めるって感じ。家に帰って割ります」
その他	上記に該当しない回答	2	・「特には考えなかった」
分からない	分からないと回答	6	—

注) 複数回答も評定している

JSPS 科研費 20K03405 の助成を受けて行ったものの一部です

一日一善が与えるネガティブ感情軽減効果の再検討

自傷傾向高低群別の質的質問回答の検討より

○大平 有紗* ・ 土居 正人*

(*吉備国際大学心理学部心理学科)

キーワード：非自殺的自傷行為，一日一善，心理教育プログラム，仏教，縁

問題と目的

近年、若者の間で問題となっている行動である非自殺的自傷行為について、これまでの研究では、自傷の原因から発生までのメカニズムが検討されてきた(土居・三宅, 2018; 土居・三宅, 2020; 土居・齋藤, 2021)。土居・山本・川内 (2023)は、自傷傾向者(自傷が行われる可能性の高い者)は実存感が低く、その要因として、「自分の生き方を自身で決められないこと」と「周囲の人の役に立てていないと感じていること」があると報告した。それらを解決する方法は、「一日一善をすること」であると考え、土居・藤原 (2023)「一日一善心理教育プログラム (Ichizen Psychoeducational Program) (以後、一善プログラム)」を作成した。これは、一日に一つ善いこととする体験と、その日の記録をつけて振り返ることを通して、個人と社会のつながりについて自発的に気づくように促すことで、精神健康の改善を目指すプログラムである。後藤・土居 (2022)は、大学生(介入群 42 名、統制群 38 名)を対象に介入を実施した所、介入群の自傷傾向、抑うつ得点において有意な減少が確認された。ここから、一善プログラムがネガティブな行動や感情に軽減効果を持つ可能性が示されたが、この研究の中では、どのようなことが軽減に効果があったのかについて質的質問(感想等)でたずねて分析しているが、自傷傾向高群と低群に分けて分析されていないため、高群の者にどのようなことが効いたのかが示されなかった。そこで、本研究では、一善プログラムを実施することにより、ネガティブ行動・感情の軽減の再検証及び、自傷傾向高群の質的質問の回答の分析を行うことで、一善プログラムの何が効いているのかについて推定することである。仮説としては、一善プログラムを実施することにより、自傷傾向、抑うつ、不安、怒り得点は減少し、プログラムの中で、個人と社会がつながり合うことに関することが効いていると予測される。

方法

本研究では、介入群のみの効果検証とし、比較のため、各尺度得点を年間を通して計測している土居・川内(2022)のデータ(12月時点の平均値)を用いた。参加者は大学生 11 名であり、有効回答数は 11 名(率 100%)、平均年齢は 19.4 歳、 $SD=1.12$ 歳であった。男性は 3 名、女性は 8 名であった。介入は最初の 1 週間のみとし、2 週目以降は指示は特にせず、自由に過ごしてもらう期間であるとした。

本研究で用いた尺度として、一つ目は自傷行為尺度(土居・三宅・園田, 2013)であり、20 項目 4 因子(抑圧状態、自責思考、承認欲求、親子葛藤) 4 件法で構成されている。これらの得点を合計することで、自傷をする可能性の高さを示す「自傷傾向」を測定することができる。近年の自傷研究の倫理的配慮からこの尺度を用いることにした。もう一つは、POMS 短縮版 (Profile of Mood States Brief Form Japanese Version) (横山, 2006)であった。この尺度は、30 項目 6 因子 5 件法から構成されており、そのうちの「抑うつ-落ち込み(以後、抑うつ)」、「緊張-不安(以後、不安)」、「怒り-敵意(以後、怒り)」に絞って分析を行った。

倫理的配慮については、参加者に研究開始時に承諾を得ており、承諾書に署名をしてもらった。また、介入説明では、仏教等の思想に関することは伝えなかった。統計的解析では HAD (清水, 2016)を使用し、自傷傾向高低を分ける基準は、土居・三宅 (2019)の平均値を用いた。これは本研究参加者の全体の平均値が高いためである。また質的質問項目の回答を分析するため、KJ 法(川喜田, 2017)を参考にして、公認心理師・臨床心理士資格を有する者と学生 3 名でまとめた。

結果

分散分析の結果は表 1 と図 1~3 に、質的質問項目の回答は表 2 に示した。まず一要因分散分析を行った。その結果、「怒り」因子以外の全ての尺度において期間

の主効果が有意であったことから、Holm の多重比較を行った。いずれも Pre と Post, Pre と Follow に有意な差が見られた(自傷傾向：順に Pre-Post: $t=2.32, p<.05$, Pre-Follow: $t=2.67, p<.05$, 抑うつ： $t=3.11, p<.05, t=3.40, p<.05$, 不安： $t=4.08, p<.01, t=3.23, p<.01$)。

考察

結果より、過去の先行研究における自傷傾向及びネガティブ感情得点の年間推移のうち、同じ月の平均値と比較しても、Pre 時には高く、Follow 時には低くなっていた。このことから、一善プログラムの介入は、参加者の自傷傾向、抑うつ、不安得点を有意に減少させる可能性が示唆された。

次に質的質問項目の回答結果について述べる。自傷傾向高低で人数が異なるため、ここでは人数を合わせた場合を想定して考察する。どのような一善をしたかについては、自傷高群の方が全体的に一善を行って

る。また、どのように思ったのか、一善の良かった所についての質問では、高群の回答に「1 日目は今日は良いことをしようと考えていたが、7 日目には気がついたら、自然と良いことをしていたことに後から気づくようになった」とあるように、自発性と継続性があると考えられる。「落ちているゴミに意識がいくように細かいことに気づくようになった」や「アパートの前を掃除していたら、ゴミが散らかっている事自体が少なくなった気がする。他の人も綺麗にしてくれていると思った」ともあるように、視野の拡大、他者配慮、個人と社会のつながりへの意識が高まっていることが分かる。以上のことから、一善プログラムは、自発的に行われやすく、参加者による他者を思う気持ちを経て、視点が広がり、個人から社会へのつながりに気づききっかけとなっていると考えられる。それが自傷傾向やネガティブ感情を軽減していると推測される。

n=11	Pre	Post	Follow	主効果：期間	
尺度	M(SD)	M(SD)	M(SD)	F	偏 η^2
自傷傾向	2.18 (.34)	2.03 (.36)	1.88 (.38)	5.95*	.37
抑うつ	1.55 (1.06)	.75 (.88)	.64 (.89)	9.17**	.48
不安	2.18 (1.11)	1.22 (.81)	1.16 (.94)	9.97**	.21
怒り	1.02 (1.13)	.46 (.64)	.49 (.85)	2.62	.08

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

表1 各尺度の介入前後の得点推移

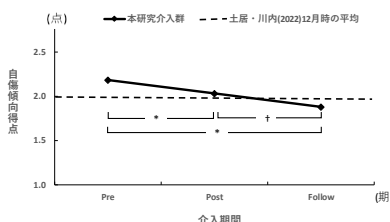


図1 自傷傾向得点の推移

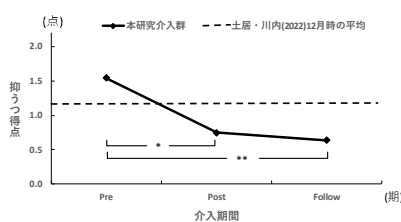


図2 抑うつ得点の推移

表2 一日一善に対する質的質問項目の回答

大カテゴリー	自傷傾向 低群 n=3	自傷傾向 高群 n=8
(記述数)	どのような一善をしたかについての参加者の回答と記述数	
身施(42)	助ける・話をする・教える(6)(人数合わせた場合 16): 「グループワークの授業の時に、班が分からなくなっていた友達の班と一緒に探した」「バイト先の新人教育で、丁寧に教えた」	助ける・話をする・教える(36): 「道に空のペットボトルが落ちていたので、拾って持って帰った」「電車の外で、入り方の分からない人がいたので、代わりに自動開閉ドアのボタンを押してあげた」「アパートの前にゴミが落ちていたので掃除した」「友達の相談にのってあげた」
床座施(7)	無し	避ける・席を譲る(7): 「前からバイクが来たので通りやすいよう端によけた」「スーパーのレジ前で、次の人に順番を譲った」
言辞施(10)	無し	伝える・労う・言葉かけ・挨拶(10): 「体調を崩した母親に『大丈夫?』と声をかけた」「宅配員にお礼を言った」「いつもは挨拶しない相手に『おはようございます』と言った」
	一善をした後どう思ったか、どのような感情を感じたかについての参加者の回答と記述数	
ポジティブな感情(139)	良い・安心・ほっこり・達成感(35)(人数合わせた場合 93): 「見て見ぬふりをしなくてよかった」「喜ぶ顔を見て良かった」「安心した」「ほっこり」「達成感があった」	良い・安心・ほっこり・達成感(104): 「すごく勇気が必要だったが、発言して良かったと思う」「過去に自身が落とし物をして拾ってもらったので、自分も相手に落とし物を届けることが出来て良かった」「あいさつをするのは清々しい」「お風呂磨きをして、心地良かった」「少し心が軽くなった」「お礼を言われて嬉しかった」「達成感があった」
他者配慮(7)	お互い様(1)(人数合わせた場合 3): 「困った時はお互い様だしな～」	お互い様・相手のことを思う・他者との交流(6): 「相手の役に立っていたら嬉しい、物を受け取った人が喜んでくれるのを考えた」「凄く喜んでくれたので良かった」
	一善プログラムの良かった所、変化した所の参加者の回答と記述数	
行動的变化(13)	自発性(3)(人数合わせた場合 8): 「何かしている時に『あ、これ一善になるな』という考え方が生まれた」「一善しようと1日の中で思うようになった」	自発性・継続性(10): 「最初は、何をしたらよいかわからなかったが、少しずつ一善ができるようになった」「1 日目は今日は良いことをしようと考えてから始めていたが、7 日目には気がついたら、自然と良いことをしていたことに後から気づくようになった」
認知的变化(12)	他者配慮(1)(人数合わせた場合 3): 「相手が何をしたら、喜んでくれるかを考えるようになり、相手を尊重する気持ちが身についたと思う」	視点の拡大・個人と社会のつながり・他者配慮(11): 「落ちているゴミに意識がいくように細かいことに気づくようになった」「地域の方は交流しやすく、とても良い人たちが沢山いることを知った」「アパートの前を掃除していたら、ゴミが散らかっている事自体が少なくなった気がする。他の人も、綺麗にしてくれていると思った」「相手の気持ちを考えた」

ぬり絵が大学生の生きがい感に与える影響

○濱崎琉晟¹・藤原直子²・若森孝彰²

(¹吉備国際大学大学院・²吉備国際大学心理学部)

キーワード：創作活動 ぬり絵 生きがい感

問題・目的

広辞苑によると、生きがいは「生きる張り合い」や「生きていてよかったと思えるようなこと」と定義され、源泉または対象となる「生きがい対象」と、生きがいを感じている精神状態である「生きがい感」の2通りの使い方がある(神谷, 1980)。生きがい感は青年期より確立する概念である(近藤・鎌田, 1998)。生きがい感に関する研究は老年期を対象にしたものが多い(大風, 2022)。

人に生きがい感を与えるものとして、創作活動があげられる(原田・加藤・小田・内田・大野, 2011)。その中でもぬり絵は、絵の得手不得手が関係なく、手軽に行える活動であり(野末・近江・長尾, 2018)、ぬり絵を行うことで、心的に落ち着いた状態になることが示唆されている(埜崎・宮崎・中館, 2014)。

そこで、本研究では、ぬり絵が大学生の生きがい感に与える影響について検討することを目的とする。さらに、ぬり絵活動続けることによる生きがい感へ与える影響も検討する。

方法

1. 対象者

大学生 57 名(男性 22 名, 女性 33 名, その他 2 名, 年齢: 20.12 ± 4.20) が本研究に参加した。ぬり絵活動を行う実施群は 36 名(男性 14 名, 女性 21 名, その他 1 名, 平均年齢 21.10 ± 5.27) であり, そのうち 18 名(男性 7 名, 女性 11 名, 平均年齢: 19.61 ± 1.25) を継続群とした。また, ぬり絵を行わない対照群は 21 名(男性 8 名, 女性 12 名, その他 1 名, 平均年齢 19.71 ± 0.76) であった。

2. 実施期間

2023 年 5 月～6 月に実施した。

3. 実施内容

(1) 実施スケジュール (Fig.1)

実施群は, ぬり絵を 1 回行い, その前後に質問紙を実施した。その後, 継続群は, 1 週間に 1 枚ぬり絵を行い, その後のシェアリング及び質問紙記入を 3 週間にわたって実施した。

対照群は, ぬり絵を行わず, 同時期に質問紙のみ実施した。

(2) 手続き

1 回目のぬり絵活動では, 質問紙に回答し, ぬり絵を 30 分間実施した。ぬり絵は, 大人のぬり絵(丹羽, 2010; 友野, 2021) から, 難易度や題材が異なるものを 7 種類用意し, その中から参加者が選定した。その後, 3～4 名のグループになり, シェアリングを 10 分程度行った。最後に, 終了後の質問紙を実施した。

継続群には, 自宅で 1 週間に 1 枚以上のぬり絵を完成させるよう依頼し, 1 週間に 1 回大学においてシェアリング及び質問紙を実施した。

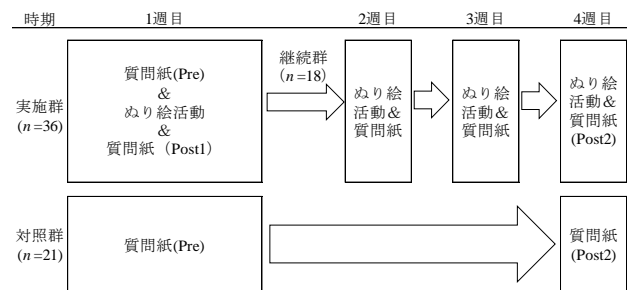


Fig.1 活動スケジュール

4. 評価方法

(1) 大学生版生きがい感スケール(近藤ら, 1998): 現代大学生の生きがい感を測定する尺度であり, 31 項目で構成されている。

(2) 特性的自己効力感尺度(成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田, 1995): 日常場面における行動に影響する自己効力感である特性的自己効力感を測定する尺度であり, 23 項目で構成されている。

(3) 芸術活動に対する自己効力感尺度(宇恵, 2018): 場面や課題に依存する自己効力感である課題特異的自己効力感を測定する尺度であり, 6 項目で構成されている。

(4) ぬり絵活動の感想: ぬり絵活動実施後と継続群のシェアリング後に自由記述で求めた。

5. 倫理的配慮

本研究は, 吉備国際大学倫理審査委員会の承認を受けて実施した(承認番号: 23-01)。ぬり絵活動への参加や質問紙への回答は任意であり, 個人情報保護されること, 学業成績とは関係ないことについて説明し, 同意を得た。

結果

1. 1回のぬり絵活動の影響

ぬり絵活動の影響を検討するため、実施群の Pre と Post1 の得点について Wilcoxon の符号順位検定を行った結果、生きがい感では、現状満足 ($Z = -3.02, p < .01$), 人生享楽 ($Z = -3.46, p < .01$), 存在価値 ($Z = -2.90, p < .01$) に有意差が認められ、いずれも Pre よりも Post1 の得点が増加していた。また、自己効力感では、特性的自己効力感 ($Z = -3.63, p < .01$) 及び課題特異的自己効力感 ($Z = -2.08, p < .05$) に有意差が認められ、いずれも Pre よりも Post1 の得点が増加していた (Table 1)。

Table 1 ぬり絵活動前後の生きがい感と自己効力感の平均値と標準偏差および Wilcoxon検定結果

	Pre		Post1		Wilcoxon 検定結果
	M	SD	M	SD	
生きがい感					
現状満足	11.50	2.06	12.28	2.44	**
人生享楽	13.28	2.56	13.89	2.52	**
存在価値	26.86	4.86	27.92	4.56	**
意欲	22.39	3.67	23.00	3.13	
特性的自己効力感	70.33	10.65	73.92	11.98	**
課題特異的自己効力感	19.47	4.10	20.22	4.06	*

* $p < .05$ ** $p < .01$

2. 継続による影響

ぬり絵活動を続けることによる影響を検討するため、継続群および対照群の Pre と Post2 の得点について時期(2)×群(2)の2要因分散分析を行った (Table 2)。その結果、生きがい感では、現状満足に交互作用が示された ($F(1,37) = 6.85, p < .05$)。単純主効果検定を行ったところ、継続群における時期の単純主効果が認められ ($F(1,37) = 11.95, p < .01$)、Pre よりも Post2 の得点が高いことが示された。

自己効力感では、特性的自己効力感に交互作用が示された ($F(1,37) = 11.28, p < .01$)。単純主効果検定を行ったところ、継続群における時期の単純主効果が認められ ($F(1,37) = 22.64, p < .01$)、Pre よりも Post2 の得点が高いことが示された。課題特異的自己効力感においても、交互作用が示され ($F(1,37) = 6.73, p < .05$)、単純主効果検定を行ったところ、継続群における時期の単純主効果が認められ ($F(1,37) = 12.13, p < .01$)、Pre よりも Post2 の得点が高いことが示された。また、Post2 における群の単純主効果が認められ ($F(1,37) = 8.71, p < .01$)、対照群よりも継続群の得点が高いことが示された。

3. ぬり絵活動に対する感想

1回のぬり絵活動後には、「久しぶりにして楽しかった (18名)」という主旨の記述が多く、シェアリン

Table 2 2群間の生きがい感と自己効力感の分散分析結果と交互作用および主効果

		Pre		Post2		時期の主効果	群の主効果	交互作用
		M	SD	M	SD			
生きがい感								
現状満足	継続群	11.61	2.00	13.11	2.42	*	ns	*
	対照群	12.62	2.77	12.57	3.14			
人生享楽	継続群	12.61	2.99	13.67	2.68	*	*	ns
	対照群	14.67	2.97	15.00	2.21			
存在価値	継続群	27.11	4.70	29.39	3.27	**	ns	ns
	対照群	27.48	5.09	27.90	5.08			
意欲	継続群	22.22	3.64	23.61	3.20	*	ns	ns
	対照群	23.48	4.40	23.81	3.52			
特性的自己効力感	継続群	70.44	10.79	77.94	9.79	**	ns	**
	対照群	70.86	14.77	71.14	14.62			
課題特異的自己効力感	継続群	20.44	4.49	23.67	3.36	*	*	*
	対照群	19.81	3.50	19.76	4.67			

* $p < .05$ ** $p < .01$

グ後は、「他の方の工夫した点を聞いて楽しかった (19名)」が多くみられた。

継続群の1ヶ月後の感想では、「いいリフレッシュになった (6名)」, 「塗り方を参考にできて楽しかった (5名)」といった感想が多く記述された。

考察

本研究の結果、ぬり絵活動によって、生きがい感や自己効力感が向上することが示された。創作活動によって生活の満足度が高まることが報告されており (Fujiwara D., Kudrna L., Dolan P, 2014), 本研究においても、ぬり絵活動によって「楽しかった」という充実感を得ることができ、生きがい感の向上に影響を与えたと推察される。また、自己効力感は、成功体験をすることで形成や向上すると考えられ (Bandura, 1995), ぬり絵などの活動が自己効力感に影響を与えると示唆されている (Legendyk, 2022)。ぬり絵を完成させ、それを他者に賞賛されるという成功体験が自己効力感の向上につながったと考えられる。

さらに、ぬり絵活動を続けた参加者には、生きがい感の現状満足、特性的自己効力感、課題特異的自己効力感の向上が認められた。継続群では、「リフレッシュした」という感想が多く、これまで報告されてきたぬり絵の癒し効果 (初田, 2007) に加え、気分転換にも効果がある可能性が示唆された。習慣的にぬり絵をすることが生活の満足感や成功体験につながったと考えられるが、今回は週に1回1ヶ月間という短期間であったため、さらに長期的な継続効果を検討することが必要である。また、今回はシェアリング後に質問紙を実施したため、本研究の結果をぬり絵そのものの効果とすることは困難である。今後、ぬり絵とシェアリングそれぞれの効果を検討していくことも必要と考えられる。

自傷発生リスクがある中で自傷傾向が低い者のレジリエンスとは 周囲の関係者（縦・横・斜め）からのサポートの検討を経て

○森岡 慶光* ・ 土居 正人**

(*吉備国際大学大学院心理学研究科) (**吉備国際大学心理学部心理学科)

キーワード：自傷行為，レジリエンス，縦・横・斜めの対人関係，ソーシャルサポート

目的

近年，青年期において自傷行為が問題となっており，その改善に向けて様々な研究が行われている。自傷の発生要因とそのプロセスについては，Linehan (1993)が提唱する「生物社会モデル」を元に土居・三宅 (2020) や土居・齋藤 (2021)がパスモデルの検討を行い，自傷発生のプロセスを作成した。それによると，自傷傾向（自傷が行われる可能性の高さ）を高めるリスク要因は，感受性の高さである HSP: Highly Sensitive Person と親からの不承認的関わりであるとし，その両者が合わさることで，子供の推論の誤りが高められ感情調節不全となり，抑うつ等の二次的感情が高まることで自傷が行われるとした。しかし，実際的には二つのリスクファクターが揃っていたとしても自傷にまでは至らない人々が一定数存在する。その理由の一つとして，高いレジリエンスを有している者は苦痛なライフイベントを経験したとしても，自尊心を高く持つことができるとの報告があることから(小塩・中谷・金子・長峰, 2002)，このレジリエンスと自傷の関係について見ていくことが重要であると考えられた。レジリエンスとは，「逆境に耐え，試練を克服し，感情的・認知的・社会的に健康な精神活動を維持するのに不可欠な心理特性(森・清水・石田・富永・Hiew, 2002)」とされている。これは生得的，あるいは後天的なレジリエンスに分かれるとされており(平野, 2010)，二つのリスクファクターを抱える者（以降，High Risk 群と表記）で自傷傾向が低い者は，レジリエンスを生まれつき備えていた，あるいは生育環境の中で身につけたのではないかと推測できる。そこで，自傷傾向が高い人と低い人の過去における周囲の関係者とのつながりについて調べることで，自傷傾向を高めないレジリエンスを見出すことができると考えられた。子供が成長過程の中で社会生活を過ごすにあたって出会う周囲の関係者は，「縦，横，斜めの関係」として分類することができる(早川・依田，

1983, 笠原,1977)。これは子供から見て親や先生にあたる関係を「縦の関係」，友人やきょうだい，部活仲間を「横の関係」，祖父母，近所の人達を「斜めの関係」とし，縦と横の関係には何かしらの利害があり，斜めの関係にはそれがないとされる。

以上のことから本研究の目的として，第1研究では自傷傾向低-HR 群が持つレジリエンスの検討について，第2研究では周囲の関係者（縦・横・斜め）からの具体的なサポートについて検討する。仮説として，第1研究では自傷傾向低-HR 群は自傷傾向高-HR 群よりもレジリエンスが高く，その中でも問題解決や自己理解の能力が高いと予測する。第2研究では，自傷傾向低-HR 群は斜めの関係者から問題解決を高めるようなサポートを受けていると予測する。

方法

第1研究：対象者は大学生 115 名（有効回答者 110 名，男性 61 名，女性 48 名，無回答 1 名），平均年齢 21.2 歳 ($SD=3.17$)である。調査用紙について，①日本語版 Highly Sensitive Person Scale (高橋, 2016)：3 因子（低感覚閾，易興奮性，美的感受性）で 19 項目 7 件法を用いた。②親子関係の心理的離乳尺度 (落合・佐藤, 1996) のうちの「子が親から信頼・承認されている関係」因子の項目を逆転にし「不承認されている関係」尺度として用いている。20 項目 5 件法である。③自傷行為尺度 (土居・三宅・園田, 2013)：4 因子（抑圧状態，自責思考，承認欲求，親子葛藤），20 項目 4 件法を用いた。④二次元レジリエンス要因尺度 (平野, 2010)：7 因子（資質的レジリエンス要因として楽観性，統御力，社交性，行動力，獲得的レジリエンス要因として問題解決志向，自己理解，他者心理の理解）で 21 項目 5 件法を用いた。前者は生まれつきのレジリエンスを，後者は後天的なレジリエンスを測定している。本研究は吉備国際大学の倫理審査で承認されている(No. 22-28)。統計的分析では SPSS 23 を使用し，今回の分析では女性参加者に絞

って記述する。

第2研究：第1研究の調査データに追加して調査を行った。対象者は大学生306名（有効回答者224名，男性142名，女性81名，無回答1名），平均年齢19.9歳（SD=2.65）であった。調査用紙は，第1研究で用いた尺度（HSPの尺度，親子関係の尺度，自傷の尺度）に加えて質的質問項目を使用した。この項目では参加者の過去についてたずねており，関係者（縦・横・斜め）から「どのように助けてくれたか，言ってくれたか」について回答を要請した。分析では，回答の記述データをKJ法（川喜田，2017）を参考にして分類した。

結果及び考察

第1研究：HSP傾向，母親不承認，自傷傾向を独立変数とし，レジリエンスの各因子を従属変数とした3要因分散分析を行った。結果では，単純・単純主効果の検定におけるHSP高群－母親不承認高群が有意であり，かつHSP高群－母親不承認低群が有意でないものを取り上げる（表1）。女性参加者の結果として，楽観的（ $F(1, 40)=4.91, p<.05$ ），問題解決（ $F(1, 40)=5.22, p<.01$ ）において有意な主効果が見られ，自傷傾向低-HR群の方が自傷傾向高-HR群よりもレジリエンスの得点が有意に高かった。この結果から，ハイリスクな状況にある中でも自傷傾向が低い者はポジティブで楽観的な資質があり，かつトラブルに対して問題解決できる能力を有しているということが示され，仮説は一部支持された。

第2研究：健康群，自傷傾向低-HR群，自傷傾向高-HR群における女性参加者が，過去にサポートをしてく

れた関係者の回答回数の割合において，独立性の検定を行った。その結果有意な偏りが見られた（表2）。各群で有意，あるいは特徴的な差が見られたものについて，健康群は自傷傾向高-HR群よりも「母親」と「先輩」，「祖母」，「祖父」が高く，自傷傾向低-HR群は自傷傾向高-HR群よりも「父親」，「祖母」，「地域」が高く，自傷傾向高-HR群は健康群よりも「担任」，「兄弟」，「相談」が高かった。

具体的なサポートについてたずねた結果より，健康群は母親や祖母から子供が困難にぶつかった時に，別の角度から捉えられるような声かけがされていた。このような関わりは，子供が困難に直面する時に適応的な対処方法として学びを得ていると推察される。自傷傾向低-HR群は父親や祖母，友達，地域からのサポートがあり，母親からのサポートが少ない代わりに父親や祖母が間に入って助けてくれていると考えられる。特に祖母からは，問題場面の対処の考え方について教えてくれている。自傷傾向高-HR群は周囲からの助けが極端に少ない状況にあり，その中でも「担任」，「兄弟」，「相談できる職員（養護・スクールカウンセラー）」が多く，日常で自然には接しない関係者が関わっていた。以上のことから，女性におけるハイリスク条件下で自傷傾向が低い人は，父親（縦），友達（横），祖母・地域（斜め）の関係者からサポートが得られており，仮説は一部支持された。日常で自然と接する周囲の人達からのサポートは，一時的に関わってくれる者よりも自傷傾向を低める要因である可能性が示唆された。

表1 女性参加者における自傷傾向低-HR群及び高-HR群のレジリエンスの分散分析結果

尺度	HSP 低群		HSP 高群		上段：主効果						
	母不承認 低群	母不承認 高群	母不承認 低群	母不承認 高群	HSP		母不承認		自傷傾向		
					下段：交互作用		下段：単純・単純主効果				
	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)	HSP× 母不承認	偏η ²	HSP 高群における 母不承認 低群	偏η ²	HSP 高群における 母不承認 高群	偏η ²	
楽観的	自傷低群	4.21 (.59)	3.67 (.94)	3.61 (1.44)	4.44 (.51)	1.94	.05	.00	.00	2.39	.06
	自傷高群	4.17 (.24)	3.78 (.38)	2.83 (1.16)	2.90 (1.24)	1.58	.04	2.16	.05	4.91*	.11
問題解決	自傷低群	3.58 (.58)	3.17 (.64)	3.72 (.85)	4.56 (.38)	2.36	.06	1.13	.03	2.97	.07
	自傷高群	3.00 (.00)	3.56 (.51)	3.25 (.59)	3.40 (1.14)	.64	.02	1.51	.04	5.22*	.12

※HSP 低群・母不承認低群・自傷傾向低群は8名，高群は2名，HSP 低群・母不承認高群・自傷傾向低群は4名，高群は3名，
HSP 高群・母不承認低群・自傷傾向低群は6名，高群は12名，HSP 高群・母不承認高群・自傷傾向低群は3名，高群は10名であった

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

表2 女性参加者の各群におけるサポートしてくれた関係者の回答回数の割合

	母親	父親	担任	兄弟	友達	先輩	祖母	祖父	相談	担任以外	地域	無し	計 (%)
健康群	21.4***	4.8	4.8	0.0*	16.7	2.4*	10.7	7.1*	0.0	1.2	6.0	25.0*	100.0
自傷低	5.3*	5.3	8.8	5.3	21.2	0.0	8.0	1.8	2.7	2.7	6.2	32.7	100.0
自傷高	3.4*	0.0†	10.2	6.8	16.9	0.0	1.7†	1.7	3.4	1.7	3.4	50.8**	100.0
合計	10.2	3.9	7.8	3.9	18.8	0.8	7.4	3.5	2.0	2.0	5.5	34.4	100.0

† $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

シャピロよりも努力を要する“目による新しいリラクゼーション”が著しい効果を持つ

岡山大学・環太平洋大学

三谷 恵一

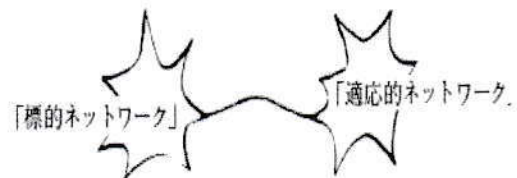
キーワード 脳と眼筋一旦緊張する漸進的弛緩

目的 “目”によるリラクゼーションは90年近く間に開発されたものであるにも関わらず、日本の医療では全く実施されていないし理学療法士もその講義も受けていない。“目”によるリラクゼーションはアメリカのジェイコブソ（1934）により開発され同国のマクギーガン（1981）が発展させてきたものを三谷・森が翻訳して日本に導入した（三谷恵一・森昭胤訳（1988）リラックスの科学—毎日のストレスを効果的に開放する）。その後、アメリカのシャピロ（2001）が**眼球運動による脱感作および再処理法：EMDR**（Eye Movement Desensitization and Reprocessing）を開発した。



“眼球運動をカウンセラーがクランケに促した”結果、22名すべてにおいて

古い記憶は心を破壊する電荷のほとんどを失い、彼らのさまざまな非合理的で否定的な自己帰属と心に浮かんでくる“ブツブツ・グチグチした不平”が著しく改善された。その際<右眼球のみを動かし顔を動かさないことが大切である>。これにより<グチグチした「認知のクセ」である「自動思考」を取り去ることが出来る>。<慢性的ストレスやトラウマも軽減させることが出来る>。

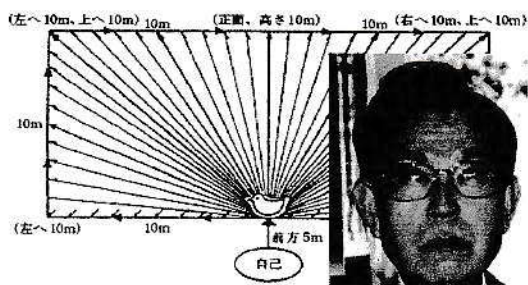


・眼球運動による脱感作および再処理法：EMDRによって治療を必要としている「標的ネットワークの細胞集成体」と「適応的ネットワークの細胞集成体」が結びついていくと仮定される（シャピロ：2001）

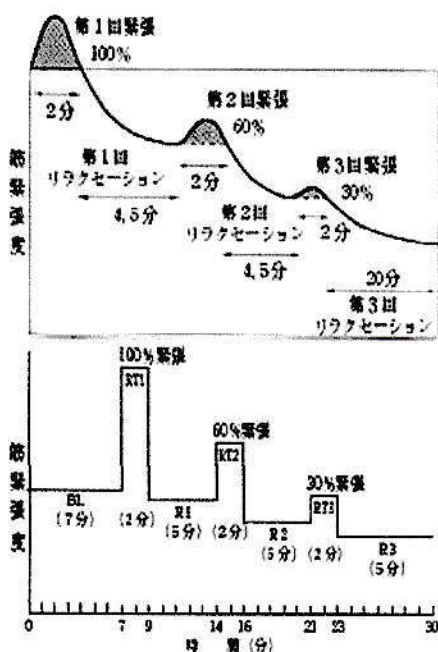
しかしながら<被験者はカウンセラーの教示のままに”受動的”にその手の動きを1秒単位で目で追っているに過ぎない。そのために、眼筋にも連絡のある脳の部位にも十分に負荷をかけ作動させ働かせていることにはなら

ない。

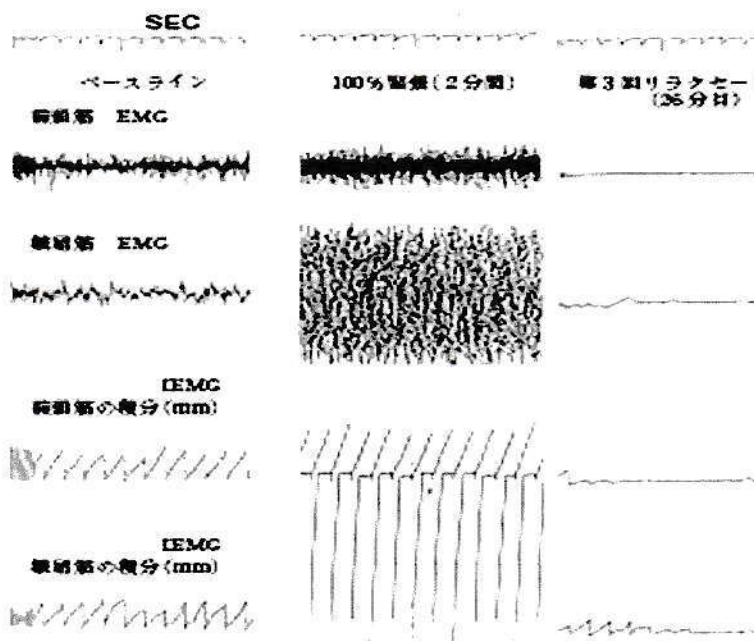
方法と結果 それに対して三谷は“いったん緊張することによるリラクゼーションの獲得”を一貫して提唱している。新しいリラクゼーションは受動的ではなく、能動的な努力を要求している。それも”2分間に及ぶ緊張を自ら作り出す”ことを要求している。



その後三谷によって創案させた“28項目ストレス尺度”を配布して自己評価して頂く。一枚でありながら信頼度が高く、直ちに隠れたストレスを発見できそれを軽減できる。また、前頭筋と愁眉筋の筋電図とその積分値は著しく減衰した。



そこで「新し目の部位によるリラクゼーション」においては、小鳥の動きを左へ10m・上へ10m・右へ10m・更に右へ10m・下へ10m・左へ10mと出発点に戻るといふ“大きな空間的移動の想像を1メートル単位で行う”という“大変な努力が要求される心像化”を次の概念図に従った言語的指示によって遂行する。



文献 三谷恵一 1990 漸進的弛緩法の改革と内観報告(2)
-目の部位・心像化によるリラクゼーションと全体的印象
岡山大学文学部紀要,13,73-91.

インタビュー面接における一日一善心理教育プログラムの効果の質的検討

ネガティブ感情及び自傷傾向軽減に影響している要因の探索

○上村 達也* ・ 土居 正人**

(*吉備国際大学大学院心理学研究科) (**吉備国際大学心理学部心理学科)

キーワード：自傷行為，一日一善，心理教育プログラム，仏教，個人社会間のつながり

目的

自傷行為は、近年の若者の間で流行している問題行動の一つである。土居・三宅 (2020)と土居・齋藤 (2021)は Linehan の理論を基に他の文献も併せて、「自傷発生までの感情調節プロセスモデル」を作成し、量的調査によってそのモデルの検証を行っている。その結果、自傷発生のリスクファクターは環境刺激に対する感受性(Highly Sensitive Person: HSP)の高さと親から不承認的対応を取られることの二つであると推定された。そして土居・山本・川内 (2023)は自傷傾向者が持つ実存感の研究を行った。結果として自傷傾向が高い人ほど実存感が低いこと、さらには実存感尺度の各項目の内、どれが自傷傾向に影響を及ぼしているかについて重回帰分析を行った所、「私は自分の生き方は自分で決めることができる」と「私は周囲の人にとって何らかの役に立っていると感じている」の項目が、有意な負の偏重回帰係数を示されたことを報告した。このことから、自傷傾向者の実存性を低めているのは、自身の生き方を自身の意思で決められていないことや、周囲の人の役に立てている実感が持てないことから生じていることが推察された。そこで土居・藤原 (2023)は、それらの思いを補う行い、すなわち、自身の意思決定によって行動し、かつ周囲の人ためになることをすることをすれば、自傷傾向を低めることが可能になるのではないかと考え、「一日一善心理教育プログラム(ICHIZEN Psychoeducational Program (以後、一善プログラム))」を作成した。

その後、後藤・土居 (2022)は一善プログラムの効果を検証するため、大学生を対象に集団式プログラムを実施した。その結果、統制群の自傷傾向高群よりも介入群の自傷傾向高群の方が自傷傾向、抑うつ尺度において有意に得点が減少することが確認された。また、いくつかの質的な質問項目の回答からは、個人と社会のつながりについての気づきが増えたことや実存性が

向上したという内容が報告された。しかし、この研究ではそれ以上の詳しい検討がされていなかった。したがって本研究では、一善プログラムを用いた介入を実施し、それを半構造化面接によるインタビューをすることによって、一善プログラムによる自傷傾向及びネガティブ感情軽減の効果に影響を与えた要因について探索的に検討することを目的とした。仮説として、一善プログラムは個人社会間のつながりと実存感への意識を高めていると予測する。

方法

インタビュー面接を行った参加者は、大学生6名(全員女性)であり、有効回答数は4名(有効回答率は66.7%)であった。有効回答者の平均年齢は20歳、 $SD=.82$ であった。初回面接時には研究の説明(研究の目的と実施方法、倫理的配慮)を行った。研究期間は3週間であり、その内の介入期間は2週間、何も介入指示を出さない期間を1週間とした。介入内容は一日一善をすることであり、具体的には、①他者にとって有益であること。②他者から感謝されることが目的ではないこと。③特定ではない他者に対して実施する方が望ましいとした。本研究では、仏教の理念に関することは伝えなかった。

介入記録は一善をした時間と場所、状況や場面、一善の行動、その後の思考と感情について記入してもらった。また、感想として自由記述式の質問項目を設けている。使用した心理尺度は POMS 短縮版(Profile of Mood States Brief Form Japanese Version) (横山, 2006) (30項目, 6因子, 5件法) と自傷行為尺度(土居・三宅, 2013) (20項目, 4因子, 4件法) であった。インタビュー面接は半構造化面接で実施され、録音機を使って会話を記録した。録音機の使用については初回の面接時に参加者に説明を行い、承諾を得た上で実施した。逐語録による質的データは個人が特定されないように配慮し、特定されるような内容があった場合は、分析段階で修

正を加えている。以上のことを説明した上で承諾してもらい、承諾書にサインしてもらった。尺度得点の分析については、サンプル数が少ないため定量的な検定を行うことができなかった。そのため本研究では各参加者の得点変化を質的に評価する。記録用紙またはインタビュー面接の質問に対する回答は、KJ法(川喜田, 2017)を参考にしてまとめた。

結果及び考察

各参加者における尺度得点の推移について、期間中に参加者全員の抑うつ得点(参加者Aの得点変化: -1点, B: -2, C: -9, D: -1), 及び自傷傾向得点(A: -13, B: -3, C: -12, D: -7)が減少した。自傷傾向の下位因子の中でも特に減少したのは承認欲求得点(A: -7, B: -3, C: -2, D: -4)であった(図1~3)。次に実施された一善の行動は、「助ける」、「手伝う」、「話を聞く」、「教える」等の身施(身体を使った奉仕をすること)が最も多かった。

個人と社会がつながりへの意識が高まっているかどうかについて調べるため、インタビュアーは「あなたがした一善を周りの誰かが見ていた場合、その人はどのようなことを考えると思いますか」とたずねた。その結果、「普段の行いが善いことだったかも」や「誰かの役に立っているかも」の個人と社会のつながりを意識する内容が述べられた。また、「自分もしようかな」や「困っていたら助けようかな」といった、個人と社会とのつながりを増やしていくような思考も生まれていた。次に実存感については、「自分がここにいてもよい

と思える感覚を持つことができましたか」、「(持てる場合) どうしてその感覚を持つことができましたか」とたずねた。その結果、他者から感謝や会釈をされた時、あるいは記録シートやインタビューの振り返りの時に実存性を感じていることが多かった。またプログラムの感想では、「(以前は) 思考が自分の内面に向かってしまっていた。一善で周りに意識が向けれるようになって、落ち込む時間が減った」等の回答があったことから、参加者の視点が拡大することによって抑うつ状態に落ち込みにくくなっている可能性が示唆された。

これらをまとめると、一善プログラムでは「自身の意思決定」により善いと思う行動を実行する。すると視点が拡大し、意識が外に向くことで抑うつが低減する。そして、周囲の他者からの感謝や会釈、あるいは記録やインタビュー等のフィードバックを受けることによって、自身がした行いを振り返ることができる。こうすることで「他者の役に立っている」と感じられることから実存性を感じ、かつ感謝されることで自身の承認欲求も満たされ、自傷傾向が軽減されていると推考できる。参加者が個人と社会のつながりを意識することは継続性を向上させ、自発的・持続的に一善を行うことから介入指示のない3週目になっても得点が減少していたと考えられる。

以上のことから、一善プログラムは個人と社会をつながりを増やすことで自傷傾向を軽減しているとも捉えられ、今後の自傷研究の発展に寄与すると考えられる。

表1 個人と社会のつながり、変化したこと、良かったところ、感想の質問結果

＜個人と社会のつながり＞ 質問:「今回、あなたがした一善を、もし周りの誰かが見ていた場合、その人はどのようなことを考えると思いますか」	
【 緑の意識 】(13):	「自分もしようかな」、「困っていたら助けようかな」、「代わりに行こうかな」、「してあげようと思う」、「自分は開けとく这件事情を考えるとかな」、「普段の行いが善いことだったかも」、「誰かの役に立っているのかも」、「周りの人の行いを真似しようと思うことが多くなった」、「つながりが広がった所がいい」
＜変化したこと・良かったところ・感想＞	
【 視点の拡大 】(10):	「落ちているゴミに気づきやすくなったり、周りに困っている人がいたら助けようという気持ちになった」、「周りを見れるようになった」、「新しい視点が増えた」
【 実行のポジティブ感情 】(7):	「やってみるといいことがいっぱいあるし、楽しい」、「夜に今日ダメだったと思出しがちだけど、『今日あれできたな』に変わっていった」、「一日にその日の意味ができる」、「一善をやることによって、いい思いの方をいっぱいしたから続けていきたい」、「ポジティブに考えられるようになった。続けていきたい」
【 ネガティブ思考の減少 】(4):	「悪いことを振り返ることが減った」、「ぐるぐる悩むことが減った」、「(以前は) 思考が自分の内面に向かってしまっていた。一善で周りに意識が向けれるようになって、落ち込む時間が減った」、「自分が好き」

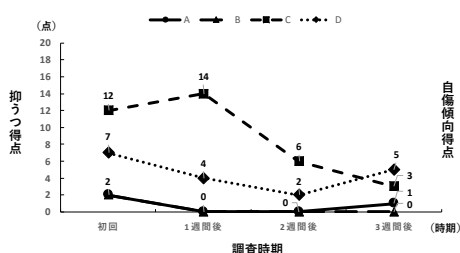


図1 抑うつ得点の推移

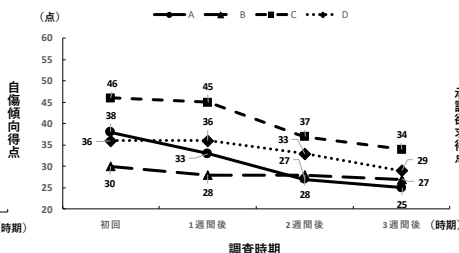


図2 自傷傾向得点の推移

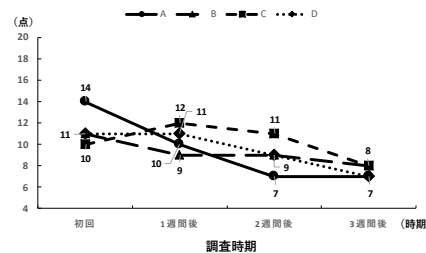


図3 承認欲求得点の推移

友人が関係するいじめを見聞きした第三者がいじめに関与する際の内的要因の検討

○平松 美菜子 ・ 進藤 貴子

(川崎医療福祉大学大学院) (川崎医療福祉大学)

キーワード：いじめ, 傍観者, 友人関係, いじめ介介入行動

問題・目的

学校内のいじめを撲滅することは難しい。いじめがなかなか抑止に至らない要因として、学校内における加害者と被害者の関係性に変化がみられず、また、集団における立場が固定化され抜け出せず(唐, 2020)、閉鎖的な環境による交友関係の限局化が考えられる。いじめには元々の友人関係を含む関係性の固着があると推察され、更に、友人関係は当事者間だけではなく、周辺の周辺児童・生徒との間にも存在しており、周辺の児童・生徒との関係性もいじめに影響を与えているのではないだろうか。いじめと友人関係の関連に着目した研究では、いじめ被害者への支援をする生徒は、広く深い友人関係を築く傾向があり、一方いじめ加害者に同調する生徒や傍観する生徒は、狭く浅い友人関係を築く傾向があること(吉田・善明, 2016)、当事者と交友関係がある場合、いじめを自分と関係のある問題として捉えやすく、積極的な援助行動を起こす可能性があること(藤村, 2018)などが明らかにされている。

平松(2021)は、大学生の友人関係の築き方といじめに対する傍観者意識および、いじめ関連行動について調査した。その結果、友人関係の築き方の傾向によって、援助行動をとる際の内的要因が異なることが推察された。例えば、拒否不安傾向の高い者は、いじめによって仲の良い友達を失い、孤立する事を避けるために援助行動を行うが、親和傾向の高い者は、友人と親密な関係を築くため、関係の深い相手を守ろうとすることなどである。また、藤野・長沼(2013)の、いじめ場面に対する周囲の反応に影響する要因研究では、加害者、被害者のいずれかと親密であると、親しい相手を自己カテゴリー化し、支持することが示唆されている。このことより、子どもたちの友人関係に働きかけることはいじめを予防・防止する上で重要であることは明らかである。また、平松(2021)で示唆された、援助行動をとる際の内的要因についても詳しく把握

する必要がある。

森田・清永(1989)は、いじめは「加害者」、「被害者」、「観衆」、「傍観者」の4層構造から成ると述べ、中でも「傍観者」の存在が「仲裁者」になることで、いじめの停止につながる可能性があることを述べている。我が国では「加害者」、「被害者」、「傍観者」に着目した研究が多いが、ほとんどが個人的な特性要因について検討しており(坂本・小岩, 2020)、関係性についての研究も少なくは無いが、いじめが起きている時点での友人関係について検討されたものは多くない。また、傍観者研究においても、友人関係に着目した研究もあるが、いじめ当事者と周辺児童・生徒との関係に着目した数は少ない(坂本・小岩, 2020)。いじめの心理学的研究において、いじめ加害者と被害者、および観衆や傍観者らの相互作用と、これらの友人関係全体を研究対象とする必要性(久保, 2014)や、いじめが発生するメカニズムを理解するためには加害者を取り巻く仲間関係を理解する必要性(唐, 2020)があると考えられる。

そこで本研究では、いじめ当事者の周辺の児童・生徒らの、加害者・被害者への思い、また、いじめへ関与する際の思いについて、実情を収集し、いじめ傍観者の心理過程を検討することを目的とする。

方法・結果

Web 調査

友人が関係するいじめを見聞きした経験の全体傾向を把握するために Google Forms を用いた質問紙調査を行った。

大学生 73 名を対象に調査を実施し、有効回答である 70 名(男性 27 名, 女性 40 名, 無回答 3 名, 平均年齢 19.0 歳, $SD=0.74$)を分析対象とした。

(1)友人が関係するいじめを見聞きした経験の有無

経験が有る人が 44 名 (男 18 名 : 66.7%、女 29 名 :

72.5%)と、大学生の多くがこれまでの学校生活の中でいじめを見聞きしていた。

(2)いじめを見聞きした時期

いじめを見聞きした時期を複数回答可として尋ね、さらに、最も印象に残ったいじめの時期を尋ねたところ、どちらも中学校が最多であったが、小学校低学年から大学までのすべての時期でいじめを見聞きした経験が得られた (Table 1)。

Table 1 いじめを見聞きした時期

質問項目	いじめを見聞きした時期					
	小学校低学年	小学校中学年	小学校高学年	中学校	高校	大学
友人が関係するいじめを見聞きした時期	8	13	18	35	19	1
最も印象に残っている時期	2	5	3	27	8	0

(3)いじめ当事者との関係

印象に残っているいじめにおける、加害者及び被害者との関係性については、Table 2 の通り、どちらか (または両方) と「時々話す」という関係以上にある者が半数を越えていた。

Table 2 いじめ当事者との関係性

質問項目	関係の程度			
	仲の良い友達	時々話す	顔見知り	よく知らない
加害者との関係	6	23	11	4
被害者との関係	12	21	8	3

(4)どのようないじめであったか (複数回答)

最も印象に残ったいじめの内容は、物を盗ったり、隠したりするいじめ 10 件、暴言や暴力によるいじめ 15 件、見た目をからかったり、バカにしたりするいじめ 24 件、仲間外れや無視をするいじめ 20 件であった。

(5)いじめ加害者についてどう思うか

いじめの加害者についてどのような心情を抱いているか、自由記述で回答を求めたところ、64 名 (91.4%) が何らかの記述をしていた。得られた結果から類似する語句を分類したところ、「疑問」(どうしてそんなことをするのか気になる等)8 件、「否定」(絶対してはいけない・間違っ

ている等)7 件、「不快」(最悪な人・関わりたくない人等)20 件、「蔑み」(可哀そうな人・人のところがわからない人等)19 件、「その他」(いじめに対する意見等)10 件、計 5 つのラベリングが得られた。

(6)いじめ被害者についてどう思うか

いじめの被害者についてどのような心情を抱いているかについては、59 名 (84.3%) が何らかの記述をしていた。得られた結果から類似する語句を分類したところ、「同情」(可哀そう・心配等)27 件、「支援」(力になりたい・助けてい等)11 件、「原因の帰属」(何かしらの原因があるのではないかと等)7 件、「その他」(励ましの言葉、被害者からの援助要請が欲しい等)16 件、計 4 つのラベリングが得られた。

面接調査

インタビュー調査協力に同意した、友人が関係するいじめを見聞きした経験が有った学生 2 名 (女性、平均年齢 23 歳) に半構造化面接を実施した。

面接では、(1)いじめを見聞きした時期、(2)いじめの内容、(3)いじめの被害者・加害者との交友関係の有無、(4)親しさの程度、(5)いじめを見聞きしてどう思ったか、(6)いじめの被害者についてどう思ったか、(7)いじめの加害者についてどう思ったか、(8)いじめに対しどのような行動をとったか、(9)その行動の動機及び当時の感情について、(10)周囲の反応、(11)その後いじめはどうなったか、また、被害者・加害者との関係の変化等について尋ねた。加えて、被害者・加害者の属性やいじめへの認識等についても尋ねた。

2 名とも、小学校卒業間際の女子グループ内の出来事を、記憶に残っているいじめであるとして想起し、どちらも当時は明確ないじめの認識はなかった。発言力がある加害者に疑問や不快を感じているが、自身が標的になる事への忌避感があり、明確な対応や周囲への相談ができなかった事が語られ、一方で、加害者に加担しないことや、被害者と交友を続けることを決意していた。こうしたいじめへの対応について、当事者との親密さの程度や、グループ内のより仲の良い友達の存在が影響していることが示唆された。その後 2 名とも進学を機に、当事者双方と疎遠になった事が語られ、いじめが起きているグループ内の周辺児の葛藤が見出された。

恥と罪責感がセルフ・コンパッションに与える影響

○野田 涼祐*¹・村上 勝典*²・宇都宮 真輝*²

(*¹ 吉備国際大学大学院心理学研究科 *² 吉備国際大学心理学部心理学科)

キーワード：セルフ・コンパッション，恥，罪責感

問題・目的

セルフ・コンパッション (self-compassion, 以下 SC とする) とは、「苦しい時や失敗した時、現状が不十分であると感じた時に、自分を責めたり、批判的になったり、痛みや否定的な感情を無視したりするのではなく、親切で暖かく、自分の良き理解者となろうとする態度」(Neff, 2003)と定義されている。SCは、「自分への優しさ (self-kindness)」、「共通の人間性 (sense of common humanity)」、「マインドフルネス (mindfulness)」の3つの要素によって構成されている。それぞれに対となる要素として「自己批判 (self-judgment)」、「孤立 (isolation)」、「過剰同一化 (over-identification)」がある。

本邦でも、SCの向上を目的としたプログラムの開発および研究がされている。効果を確かしている研究がある一方、短期介入を実施した結果、他国に比べ、効果量が小さいこと (森石・前田・嶋田, 2022)、筆記介入では、群間で有意差がみられなかった (加来・織田・大久保・大屋・井森・池田, 2022) などの結果もみられ、介入の難しさや効果の出にくさがあることも分かっている。

鋤柄・石村・小金井・山口・野村 (2015) は、プログラムの草案および試行をおこない、自己へ向ける思いやりについて学ぶ段階から、自分の行動パターンや感情の傾向、価値観を振り返り、内省を深め自分のものにしていく実践段階に入ると、上手くいかない自分自身に対する不信や批判も含めた混乱を起こす場合があり、自身の思いやりをめぐる思考や固定概念にぶつかるため、介入の難しさがあると述べている。

Gilbert (2009) は自分への思いやりを向けることが難しい人の特徴の1つとして、自己批判や恥の高い人をあげており、恥の高さはSCの向上を阻害する要因の1つであるといえる。つまり、日本人の特徴として、自己卑下的な傾向があるため、恥や罪責感を感じやすく、自分を思いやることに抵抗があると考えられる。

しかし、恥や罪責感がSCに与える影響を検討した研究は散見されない。そのため、恥や罪責感がSCに与える影響を検討することで、介入プログラムを開発および実施する際に留意すべき点を得ることができ、SCを向上させるために必要な新たな知見も得られると考えられる。そこで本研究は、恥や罪責感がSCに与える

影響の検討を目的とする。

方法

調査対象者と調査時期 大学生139名 (男性78名, 女性57名, 無回答4名, 年齢: $M \pm SD = 19.66 \pm 2.87$) を対象に質問紙調査を実施した。調査時期は、2023年7月と10月であった。質問紙回答前に、文章と口頭で説明をおこない、合意を得た者にものみ回答してもらった。

調査内容 ①フェイスシート：学年、学科、性別、年齢、在籍区分、について尋ねた。②自分への思いやり尺度日本語版 (宮川・新谷・谷口・森下, 2015)：「自分への優しさ」、「自己批判」、「人間としての共通体験」、「孤立」、「マインドフルネス」、「過度の一致」の6因子24項目で構成されており、5件法で回答を求めた。③TOSCA-3日本語版 (菊池, 2003)：11の否定的シナリオについて、本研究では、「恥」、「罪責感」の2つの行動や感情について、5件法で回答を求めた。

分析方法 自分への思いやり尺度日本語版とTOSCA-3日本語版の相関分析および、自分への思いやり尺度日本語版を目的変数、TOSCA-3を説明変数とした重回帰分析をおこなった。

倫理的配慮 調査は任意であり、個人情報への配慮を行うこと、回答中に気分が悪くなった場合は、中断しても良いことを伝え、内容に同意した者に対し、調査を実施した。

結果

分析対象者 対象者のうち、回答に不備があった者を除外した結果、126名 (男性71名, 女性51名, 無回答4名, 年齢: $M \pm SD = 19.66 \pm 2.97$) を分析対象とした。

恥と罪責感がSCに与える影響 相関分析の結果、「恥」と「SC ポジティブ因子」($r = -.26, p < .01$)、「自分への優しさ」($r = -.23, p < .05$)、「マインドフルネス」($r = -.26, p < .01$) に負の相関、「SC ネガティブ因子」($r = .59, p < .01$)、「自己批判」($r = .54, p < .01$)、「孤立」($r = .54, p < .01$)、「過度の一致」($r = .47, p < .01$) に有意な正の相関がみられた。また、「罪責感」と「SC ポジティブ因子」($r = .18, p < .05$)、「マインドフルネス」($r = .18, p < .05$) に有意な正の相関がみられた (Table1)。

重回帰分析の結果、「自分への優しさ」に対しては、「恥」($\beta = -.32, p < .01$) が負の影響を与えていることが確認された。「自己批判」に対しては、「恥」($\beta = .57, p$

<.01) が正の影響を与えていることが確認された。「人としての共通体験」に対しては、「罪責感」($\beta=.31, p<.01$) が正の影響を、「恥」($\beta=-.29, p<.01$) が負の影響を与えていることが確認された。「孤独」に対しては、「恥」($\beta=.61, p<.01$) が正の影響を与えていることが確認された。「マインドフルネス」に対しては、「罪責感」($\beta=.34, p<.01$) が正の影響を、「恥」($\beta=-.40, p<.01$) が負の影響を与えていることが確認された。「過度の一致」に対しては、「恥」($\beta=.53, p<.01$) が正の影響を与えていることが確認された (Figure1)。

考察

本研究では、恥や罪責感が SC に与える影響の検討を目的とした。その結果、恥は SC のポジティブな側面に負の影響を与えており、ネガティブな側面には正の影響を与えていることが認められた。恥は進化論的にみて、適応的な機能がある。例えば、Kaufman (1996) は社会的規範を学び、集団に所属し、自分を守ってくれる仲間や愛着対象とのつながりを維持するのに貢献すると述べている。このような適応的な側面がある反面、恥は、現実または想像上の他者により批判される有害な自己を意味し、苦痛を伴い、自己の価値観や自己効力感への直接的脅威を意味する自己批判の経験であり、全体的自己を否定するため不適応な自己機能を導く恐れがある (Tangney, 1995)。このように、恥は自己自身を意識せざるを得ない状況で生じる情動であり (久崎, 2010)、特に他者からの評価や失敗経験が不適応な自己を導き、全体的に自己を否定することにより、自分自身に思いやりの気持ちを向けることが困難になると考えられる。

Table1
自分への思いやり尺度と TOSCA-3 の相関

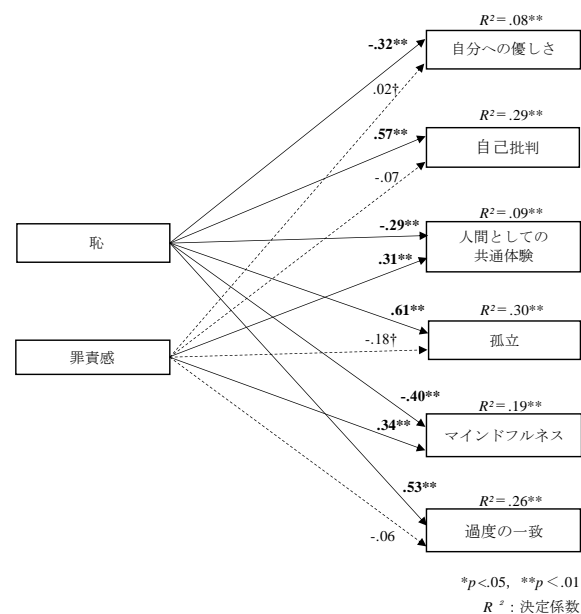
	恥	罪責感
SC (ポジティブ因子)	-.26**	.18*
SC (ネガティブ因子)	.59**	.12
自分への優しさ	-.23*	.08
自己批判	.54**	.12
人としての共通体験	-.15	.17
孤立	.54**	.04
マインドフルネス	-.26**	.18*
過度の一致	.47**	.17

* $p<.05$, ** $p<.01$

罪責感、SC のポジティブな側面に一部正の影響を与えていることが認められ、SC の向上に影響があることが明らかになった。高橋 (1994) は、罪悪感と罪責感の違いについて仔細にみれば微妙なズレがあるが、共通性の度合いに比べれば無視しうるほどに小さいとしている。罪責感とほぼ同義に扱われている罪悪感を経験すると、一般的には特定の宗教、道徳上の罪に関して脅迫的に考え、違った行動をとるべきであったと思ひ、できることなら自己の行いを「やりなおしたい」と思うとされる (Tangney, 1995)。このことから、罪責感、謝罪や損害に代わる修復行動を促進するといった、適応的な機能をもつため、SC のポジティブな側面を高めると考えられる。

恥の問題に詳しい臨床家は、恥に触れられると生傷に触れられるような痛みが走り、それを癒そうとする試みさえも拒否してしまうと指摘している (Kaufman, 1996)、臨床場面で用いられる心理療法は恥を喚起しやすく、恥の扱いによっては心理療法の展開を阻害することにつながると考えられる。心理療法がうまく進むためには、恥と闘いながら自己開示をしていくのではなく、安全な環境の中で、ポジティブ感情に導かれながら、自身の世界を探索することが大切である (岩壁, 2023)。今後、SC の向上を目的としたアプローチを臨床場面に導入する際には、恥に焦点を当てた介入は、全体的な価値低下による自己評価の減損につながる可能性があるため、否定的感情を感じても、修復行動が促進されやすい罪責感からアプローチを始めることで、参加者の負担を軽減しながら、SC 向上に取り組むことができるのではないかと考えられる。

Figure1
自分への思いやり尺度を従属変数とした重回帰分析



* $p<.05$, ** $p<.01$
R²: 決定係数

自己注目における省察と解決困難な日常出来事に対するコーピングとの関係

○木暮将平 ・ 水子学

(川崎医療福祉大学)

キーワード：自己注目，省察，コーピング，解決困難

問題・目的

大学進学率が上昇する昨今，大学生生活に不適応を示す学生が増加しているという問題がある（熊田他，2007）。特に，大学生は，多様な生活領域を有しており，学業，アルバイト，サークル活動などを通して，日常的にストレスを抱えやすいとされている（真船・鈴木・大塚，2006）大学生の心理的健康や適応の向上に寄与する要因を明らかにすることは，大学生の適応に関する理解を深める上で重要であると考えられる。

人の適応状態や精神的健康を規定する個人特性の1つとして，近年，自己注目の傾向に焦点を当てた研究が行われている（Trapnell & Campbell, 1999）。自己注目（self-focus）とは自分に注意を向けている状態およびそうしやすい性格特性と定義されている（坂本，1997）。自己注目過程のうち，特に物事を何度も繰り返し考え続けることは反芻と定義され（Martin & Tesser, 1989），抑うつ状態を維持し心理的不適応との関連が指摘されている（Nolen-Hoeksema & Morrow, 1993）。

しかし，最近では，自己注目には自己理解を促し，精神的衛生を促進する適応的な側面があることが指摘されている（Trapnell & Campbell, 1999）。この側面は省察（reflection）と呼ばれ，反芻と区別されている。

省察に関する最近の研究では，省察が問題解決を促進することが示されている。例えば，森他（2014）は，大学生を対象に英単語テストを用いた問題解決課題を作成し，省察による問題解決課題成績の向上を実験によって明らかにしている。この結果より，省察は日常生活で遭遇する解決困難な出来事に対するコーピング方略を規定する可能性がある。

ところで，大学生が経験する日常生活上の否定的出来事のうち，レポート提出や単位取得といった目標達成に関する出来事と他者とのトラブルといった対人関係上の出来事がある。これらは，適応状態と密接に関係していると考えられる。Lazarus & Folkman（1984）によれば，適応のプロセスは「刺激」「認知的評価」「コーピング」「心理的ストレス反応」の4側面で構成され，特にコーピングが適応の鍵とされている。コーピングは問題焦点型と情動焦点型に大別され，問題焦点型が適応の向上に寄与することが示されている。

しかし，省察特性が日常生活で経験する目標達成に

関する出来事，対人関係上の出来事に対するコーピング方略を規定するのにかについては未だ明らかにされていない。省察特性が高い人ほど，解決困難なストレスに対して，積極的に働きかけ，コーピングの面で問題解決に強くコミットする可能性がある。

そこで本研究では，大学生を対象に個人特性としての省察特性と解決困難な達成領域および対人領域のストレスに対するコーピング方略との関係について検討することを目的とした。

方法

調査対象者

中国地方の私立大学の学生136名を対象に調査を実施した。欠損値のない104名（男性：39名，女性：64名，どちらでもない：1名）を分析対象とした。平均年齢は20.10歳（SD=4.30）であった。

質問紙の構成

省察特性 高野・丹野（2008）が作成した Ruminative Reflection Questionnaire (RRQ) 日本語版のうち「省察」を測定する12項目を使用し，「当てはまらない」（1点）～「よくあてはまる」（5点）の5件法で回答を求めた。

コーピング方略 まず，過去6カ月で体験した最も困難だった達成領域および対人領域の出来事をそれぞれ具体的に記述するよう求め，各出来事の問題解決困難性の程度について「まったく解決が困難ではなかった」（1点）～「非常に解決が困難だった」（4点）の4件法で回答を求めた。そして，尾関（1993）の大学生用ストレス自己評価尺度のコーピング尺度（計14項目）を用いて，各々の出来事に対する各コーピング方略の頻度を「まったくやらない」（0点）～「いつもする」（3点）の4件法で評定するよう求めた。

調査手続き 2023年7月に，2つの講義にて開始前に調査協力を依頼した。質問紙を配布し，研究概要および倫理的配慮について説明を行った後，調査協力に対する同意を表明した上で回答するよう求めた。調査に同意した人には，その場で自分の座席での回答を求めた。授業終了後，教室の前に設置した回収ボックスに入れてもらう形で，提出するよう求めた。

結果

省察と特定のコーピング傾向が解決困難な課題であ

っても関連が示されると予測したため、以下の分析では、ストレスラーの解決が困難ではなかったことを意味する「まったく解決が困難ではなかった」を分析対象から除外した。

相関分析

省察特性と対人・達成領域別ストレスラーに対する各コーピング方略との関連を検討するため、相関分析を行った (Table 1)。また、

その結果、対人領域に関しては、「省察」と「情動焦点型コーピング」の間のみ有意な正の相関が確認された。一方、達成領域に関しては、「省察」と「問題焦点型コーピング」の間に有意な正の相関が確認された。

以上の結果より、省察特性が高い人ほど対人領域ストレスラーに対して情動焦点型コーピング、達成領域ストレスラーに対して問題焦点型コーピング頻度が高いことが明らかになった。

重回帰分析

対人および達成領域のストレスラーに対して、省察特性が各コーピング方略頻度を規定するか検討するために、説明変数を「省察」、目的変数を領域ごとのストレスラーに対する各コーピング得点とする重回帰分析 (強制投入法) を実施した。なお、ストレスラーの解決困難性の差異による影響を統制するために、解決困難性を説明変数に加えた。

その結果、達成領域ストレスラーに対しては、省察が問題焦点型コーピングのみ正の影響を与えることが確認された ($\beta=.26, p<.05$)。

考察

Burwell & Shirk, (2007) は、省察が問題解決的な適応的コーピングと関連していることが報告している。本研究における省察特性と達成領域ストレスラーに対する問題焦点型コーピングとの間に正の関連が示されたことは、従来の知見と一致した結果であると言える。このことから達成領域において省察特性の高い大学生は問題解決や目標達成に焦点を合わせる特性があると考えられる。その結果、課題に集中し、効果的な対処法を見つけ出すことに特に重点を置くと考えられる。また、対人関係領域に関しては、省察は他者視点の獲得など高い共感的能力を持っているとされている (Joireman et al., 2002)。

Table 2

記述統計量および変数間の相関係数

		<i>M</i>	<i>SD</i>	1	2	3	4	5	6	7
自己注目	1 省察	3.13	0.80	—						
対人領域	2 問題焦点型コーピング	1.62	0.56	0.21	—					
	3 情動焦点型コーピング	1.66	0.73	0.21*	0.31**	—				
	4 解決困難性	3.13	0.77	-0.07	0.02	-0.24	—			
達成領域	5 問題解決型コーピング	1.78	0.60	0.24*	0.14	0.23*	0.00	—		
	6 情動焦点型コーピング	1.79	0.80	0.18	0.48**	0.48*	-0.02	0.45**	—	
	7 解決困難性	3.24	0.75	-0.29**	-0.15	-0.07	0.09	-0.02	-0.05	—

** $p < .01$, * $p < .05$.

そのため、対人関係領域において、省察特性と情動焦点型コーピングの関連が示されたのではないかと考えられる。

この結果より、省察は問題解決を促進する一方で、解決困難なストレスラーに対しても、積極的に働きかけ、コーピングの面で問題解決に強くコミットすると考えられる。しかし、解決困難な状態が継続した場合でも、省察特性の高い人は問題解決に向けて努力し続ける可能性があり、その結果として疲弊を招く恐れもある。杉浦 (2002) によれば、問題焦点型コーピングにおいては、粘り強く考えることに固執しすぎるとかえって有害になる場合もあると示唆している。そのため、省察特性の高い人は解決困難な状況に対しても問題焦点型コーピングの頻度を適切に寛容させることが難しく、かえって不適応的な情緒の消耗感を感じる可能性がある。

なお、本研究は横断的研究であるため、省察特性の高い人が長期間にわたって解決が難しい課題に取り組む場合、問題解決に過度に焦点を当て、結果的に適応力が損なわれるか否かについて追跡することはできなかった。この点に関する縦断的研究が行われれば、省察特性の高い人が時間とともにどのように変化し、問題解決へのアプローチが適応にどのような影響を与えるかを検討できると考えられる。

引用文献

- Burwell, R. A., & Shirk, S. R. (2007). Subtypes of rumination in adolescence: Associations between brooding, reflection, depressive symptoms, and coping. *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology, 36*, 56-57.
- 尾関 友佳子 (1993). 大学生用ストレス自己評価尺度の改訂: トランスアクションナルな分析に向けて久留米大学大学院比較文化研究科年報, *1*, 95 - 114.
- 高野 慶輔・丹野 義彦 (2008). Rumination-Reflection Questionnaire 日本語版作成の試み パーソナリティ研究, *16*, 259-261.
- Trapnell, P. D., & Campbell, J. D. (1999). Private self-consciousness and the five-factor model of personality: Distinguishing rumination from reflection. *Journal of Personality and Social Psychology, 76*, 284-304.

児童養護施設における造花アレンジメント制作が児童の心理に及ぼす影響

—自己効力感と気分 に焦点をあてて—

○奥野 優太¹・木曾 那光華¹・大恵 彩伽²・藤原 直子¹

(¹吉備国際大学心理学部 ²吉備国際大学大学院心理学研究科)

キーワード：児童養護施設，制作活動，自己効力感，気分

問題・目的

児童福祉法第41条によると、児童養護施設とは、保護者のいない児童や虐待されている児童などを入所させ、養護し、また退所後の児童に対する援助を行うことを目的とする施設である。入所児の処遇においては、生活支援のみでなく、何らかの心理的、行動的な支援が求められることもあり（保坂・音山，2016）、心理的支援としてさまざまなアプローチ法を現場に取り入れていく必要がある（渡邊，2018）。このような心理的支援のひとつに、制作活動がある。実際に制作活動を行った実践では、入所児のストレス緩和、自己効力感や自尊感情の向上（三谷・古荘，2015）、「子どもの行動チェックリスト」の総得点、内向及び攻撃的行動の得点の減少（保坂・音山，2016）といった効果が報告されている。以上の実践は複数回あるいは長期間の制作活動であるが、1回のみ活動によって自己効力感が向上したとの報告もある（藤原・日下部，2022）。

自己効力感とは、ある状況下である結果を達成するために必要な行動を上手く実行できるかどうかの予期を指す（Bandura，1977）。自己効力感が高い人は、問題解決行動に積極的で、困難な状況下でもあきらめず努力すること、適切なストレスコーピングができ、ストレスフルな状況でも耐えられることが明らかになっており（嶋田，2002）、自己効力感の高まりは生きる力の向上につながると考えられている（福井他，2009）。また、児童の自己効力感の向上は、抑うつ低減や再発予防に効果的であることも示されている（板野，1998）。

そこで、本研究では、児童養護施設に入所する児童を対象に、造花アレンジメント制作を実施した。本研究の目的は、造花アレンジメント制作が児童の自己効力感や気分 に及ぼす影響を明らかにし、心理的支援としての効果を検討することである。

方法

対象者

A市の児童養護施設に入所する小学生から高校生の女子児童10名が活動に参加した。内訳は、小学生7名、中学生2名、高校生1名であった。

結果の分析において、二次元気分尺度のみ、回答に不備のあった2名を除いて分析した。

実施時期・場所

2023年9月に、施設内のホールで実施した。

実施者

全体の進行、質問紙及び制作方法の説明は、第二著者が行った。補助スタッフとして大学生2名、大学教員1名、施設職員1名も参加し、児童への助言や制作の補助を行った。

実施内容

以下の手順及び時間で実施した。

- (1) 質問紙記入①：自己効力感尺度，気分尺度
- (2) 題材や制作方法の説明
- (3) 制作（約30分）

造花アレンジメントとは、生花の代用として造花を使ったフラワーアレンジメントのことである。様々な種類や色の造花を用意し、その中から児童が好きな花を選び、デザインを考えた。花を入れる容器も、複数の形や素材の中から児童が好きなものを選び、容器の中にある生花用スポンジに花を挿して制作した。

- (4) 質問紙記入②：自己効力感尺度，気分尺度
- (5) シェアリング（約10分）

作品を他の参加者に見せながら、作品のイメージや制作した感想を語った。

- (6) 質問紙記入③：自己効力感尺度，気分尺度，振り返りシート

質問紙

(1) 児童用一般性自己効力感尺度（GSESC-R）（福井他，2009）：「安心感」「チャレンジ精神」の2因子，18項目4件法で構成される。

(2) 二次元気分尺度（TDMS）（坂入他，2009）：「活性度」「安定度」「快適度」「覚醒度」の4因子，8項目6件法で構成される。

(3) 振り返りシート：満足度を評価する2項目について4件法（1：そう思わない～4：とても思う）で回答を求めた。自由記述による感想欄も設けた。

倫理的配慮

吉備国際大学倫理審査委員会の承認（受理番号：21-50）並びに施設長の許可を得て実施した。活動への参加や質問紙への回答は児童の自由意志によるものであり、発言や回答内容など、個人情報保護について説明し同意を得た。

結果

自己効力感の変化

GSESC-R の得点について Friedman 検定を行い、有意差が見られた項目に Wilcoxon の順位和検定を実施した。その結果、「総得点」の制作前・シェアリング後間 ($Z = -2.10, p < .05$) と制作後・シェアリング後間 ($Z = -1.99, p < .05$)、「安心感」の制作前・制作後間 ($Z = -2.50, p < .05$) と制作前・シェアリング後間 ($Z = -2.26, p < .05$) に有意差が認められ、得点が上昇していた (Table 1)。

Table 1 自己効力感尺度の平均値と標準偏差及び検定結果 ($n=10$)

	制作前	制作後	シェアリング後	Friedman
	M (SD)	M (SD)	M (SD)	
自己効力感 総得点	45.00 (7.36)	47.20 (5.87)	50.10 (5.78)	*
安心感	22.70 (6.95)	25.10 (7.23)	26.50 (5.97)	**
チャレンジ精神	22.30 (4.95)	22.10 (6.28)	23.60 (7.14)	

* $p < .05$, ** $p < .01$

気分の変化

TDMS の得点について Friedman 検定を行い、有意傾向が見られた項目に Wilcoxon の順位和検定を実施した結果、「快適度」の制作前・制作後間 ($Z = -1.69, p < .10$) に有意傾向が認められ、得点が上昇していた (Table 2)。

また、項目ごとに分析した結果、「イキイキした」の制作前・制作後間 ($Z = -2.38, p < .05$)、制作前・シェアリング後間 ($Z = -2.38, p < .05$) に有意差が認められ、得点が上昇していた。

Table 2 気分尺度の平均値と標準偏差及び検定結果 ($n=8$)

	制作前	制作後	シェアリング後	Friedman
	M (SD)	M (SD)	M (SD)	
活性度	3.00 (3.12)	5.56 (4.07)	5.56 (4.30)	
安定度	5.11 (4.17)	7.22 (3.73)	6.56 (3.91)	
快適度	8.11 (6.33)	12.78 (7.46)	12.11 (7.96)	†
覚醒度	-2.11 (3.76)	-1.67 (2.29)	-1.00 (2.06)	

† $p < .10$

制作活動の満足度と感想

満足度評価では、4 点満点中、「楽しかったですか」は平均 3.9、「また参加したいですか」は平均 3.7 であった。感想では、「楽しかった (6 名)」という記述が最も多く、その他にも活動や作品に対する肯定的な内容の記述が見られた (Table 3)。

Table 3 感想に記載された内容 ($n=10$)

- ・楽しかった (6 名)
- ・自由にお花を飾って楽しかった
- ・自分のイメージ通りにできて楽しかった
- ・初めてやったから楽しかったし、またやりたいと思った
- ・初めてやったけど、すごく良い感じにできてよかった
- ・きれいに植えられるか不安だったけど、きれいにできた
- ・また色々なことに挑戦したいと思った

考察

自己効力感について

本研究の結果、自己効力感の総得点と「安心感」に向上が認められた。感想において、「イメージ通りにできた」「不安だったけど、きれいにできた」といった記述があり、制作するまでの不安が、結果として「きれいにできた」という達成感や喜びに変化したことが推察される。自分が選んだ材料を用いてアレンジメントが完成した達成経験が、自己効力感の向上に影響を与えたと考えられる。さらに、シェアリングを通して、他の参加者から賞賛を受けたことが承認感情になり、自己効力感につながったと推察される。

また、「安心感」とは、何かを実行するうえで前向きな気持ちになる程度のことを示す (隈元・岩田, 2020)。「またやりたい」「また色々なことに挑戦したい」といった意欲的な感想があり、制作活動によって前向きな気持ちが向上したと考えられる。

藤原・日下部 (2022) では、タイルを用いた制作活動を実施して「チャレンジ精神」が向上しているが、本研究では特に「安心感」の向上が認められた。古賀・岩崎 (2018) は、花を見ることには癒し効果があり、その傾向は男性より女性が強いと報告している。造花ではあるが花を用いたことによる癒し効果が、「安心感」を向上させた可能性が考えられる。題材や制作方法によって心理面に及ぼす影響が異なると推測され、題材の特徴や効果に関する詳細な検討が必要である。

気分について

気分では、「快適度」の向上が示唆され、質問項目では「イキイキした」が向上した。「快適度」は、快適で明るい気分の状態を示す (坂入他, 2009)。感想には「楽しかった」という記述が多く、「イメージ通りにできて楽しかった」「自由にお花を飾って楽しかった」といった記述も見られた。こうした活動そのものに対する楽しさや充実感が、明るい気分や「イキイキした」気分の向上につながったと推察される。

今後の課題

本研究は、ひとつの施設における実践であり、対象児も少人数のため、結果を一般化することはできない。また、有意な向上が認められたのは一部であった。

しかしながら、制作活動が児童の自己効力感や気分に対する肯定的な影響を及ぼすことは示唆された。1 回の活動であっても児童への心理的支援として有効であると考えられ、活動内容や題材を検討するとともに、他の施設にも実践を拡大させていくことが課題である。

謝辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただいた施設職員の皆様と子ども達に、心より感謝申し上げます。

大学生の LINE の効用認知と LINE 相談への抵抗感との関連

澤田 亘平

(川崎医療福祉大学大学院)

キーワード：LINE 相談，学生相談室，LINE の効用認知，相談への抵抗感

問題・目的

LINE の普及を背景に，専門的な相談を LINE を用いておこなうサービス（LINE 相談）が導入されつつある。LINE 相談は，特に若い世代には，アクセスが容易であり，それまでだれにも相談できなかった人にとっても相談しやすいと考えられている（杉原・宮田，2018）。しかし，LINE 相談に対しては対面での心理相談と同様の心理的な抵抗感の存在が報告されている（畑中，2022）。このように，LINE 上のコミュニケーションは実際には LINE に特有のものではなく，対面での対人関係を反映していることが示唆される。そのため，LINE 相談は，対面での専門的な相談に対するのと変わらず心理的な抵抗感を生じさせていると考えられる。

本研究では，大学生を対象に，LINE の効用認知が LINE 相談への抵抗感の低さにつながるのかどうかを検討する。LINE の効用認知とは，LINE における機能やコミュニケーションのポジティブ面およびネガティブな面をどの程度認知しているかを表す。LINE の効用を高く認知しているということは，LINE は便利なものであり，LINE に対してよい印象を抱いていることになる。しかし，西村（2020）によれば，LINE の効用認知が高い人は，同時に現実の対人関係も豊かであり，関係を回避しようとする傾向は低い。反対に，LINE の効用認知が低い人は，自己閉鎖的であり，他者との関係を回避しようとする（西村，2020）。本研究の仮説は，LINE に対する効用の認知と LINE 相談への抵抗感との間に負の相関が見られるのではないかと考える。

方法

参加者

大学生 96 名を対象に調査を実施した。そのうち回答に不備のあった 11 名を除いた有効回答 85 名（男：28，女：57，有効回答票率：88.5%）のデータを分析の対象とした。また有効回答該当者の平均年齢は 18.80 歳（SD = 0.78）であった。

測定内容

LINE の効用認知 西村（2017）が作成した LINE の効用認知尺度を用いた。どれくらいあてはまるかを「1：

全くあてはまらない」～「5：非常にあてはまる」の 5 件法で回答を求めた。

学生相談室の認知と利用経験 学生相談室の利用経験と認知について尋ねた。「1：知っていて利用したことがある」「2：知っているが利用したことがない」「3：知らない」の 3 件法で回答を求めた。

LINE 相談の認知と利用経験 LINE 相談の利用経験と認知について尋ねた。前項と同様の方法で尋ねた。

学生相談室の相談への抵抗感 心理相談への抵抗感を測定するために姜・浅川・南・祁（2011）が作成した尺度を用いた。各因子から因子負荷量の大きいものから順に 4 項目ずつ抜粋した。質問内容が対面状況と LINE 状況のどちらにも対応する 10 項目を採用した。

「対面での学生相談室について，あなたはどの程度当てはまるかお答えください。」と教示を行い，各項目について「4：全くその通り」「3：かなりそう思う」「2：少しそう思う」「1：全くそう思わない」の 4 件法で回答を求めた。

LINE 上での相談への抵抗感 LINE 上での相談への抵抗感の測定方法は前項の方法と同一であった。

「LINE 上での相談について，あなたはどの程度当てはまるかお答えください。」と教示を行った。

個人属性 年齢，性別，学年の回答を求めた。

実施手続き

調査は，2022 年 10 月下旬の心理学関係の講義において行った。講義に先立って質問紙を講義室の前方に置き，それを来室した参加者各自で手に取ってもらう形で配布した。その後，倫理的な配慮について，文書及び口頭で説明した。講義終了後，講義室前方に設けた提出場所に調査票を提出してもらう形で回収を行った。

結果

学生相談室・LINE 相談の認知および利用経験の回答分布を確認し，男女差の有無を検討するため Fisher の正確検定を行った。学生相談室は $p=0.55$ ，LINE 相談は $p=1.00$ であり，回答者の性別と学生相談室ならびに LINE 相談の認知および利用経験との間に関連性は認められなかった。

測定した各尺度について，クロンバックの α 係数を

算出した。その結果、おおむね.70 前後ないしそれ以上の値が得られた。やや低い値であったが、項目数が3ないし4項目と少ないためであり、一定の信頼性が確保されていると判断した。また、回答者の性別による尺度得点の差異を検討するために *t* 検定を行った。その結果、回答者の性別による各尺度得点間の差異は認められなかった。

学生相談室・LINE 相談の認知および利用経験と相談への抵抗感との関連を調べるために *t* 検定を行った (Table1)。なお、学生相談室の利用経験のある人が少ないため「知っている利用したことがある」回答者と「知っているが利用したことがない」回答者を合わせた「知っている」群を新たに構成し、「知らない」人との2群で比較を行った。その結果、学生相談室の認知・利用経験において「面子のこだわり」にのみ有意な差が確認され、知っている群よりも知らない群の方が高得点であった。その他は、有意な差が認められなかった。

尺度得点間の関連性を検討するために、相関係数を算出した (Table2)。その結果、LINE の効用認知と LINE 上での相談への抵抗感との間には有意な相関は認められなかった。しかし、LINE の効用認知における「利便性」および「束縛感・不安感」と「親和充足感」との間に有意な正の相関が認められた。また、学生相談室の相談への抵抗感と LINE 上での相談への抵抗感との間に有意な正の相関が確認された。

考察

LINE の効用認知と LINE 上での相談への抵抗感との間には有意な相関は認められなかった。そのため、仮説は支持されなかった。つまり、LINE に対する効用を認知していても、LINE 相談の抵抗感を低めることはできないということになる。

今回の結果は、大学生の LINE の主な利用目的に起因していると考えられる。大学生にとって LINE は友人とのコミュニケーションツールであり、専門家への

相談ツールとしては認識していない。LINE が身近で常にそばにあるものでも、専門家への相談ツールとしてのイメージがなければ LINE の効用認知が高くても相談の抵抗感は低くならないと考えられる。つまり LINE を専門家への相談ツールとしても認識するようになれば、抵抗感は低くなると考えられる。

本研究の問題点として、LINE 相談があまり普及していないなかで、LINE 相談がどのようなものなのか想像がつきにくく、LINE 相談を知らないと回答する人が多く、そのために LINE 相談への抵抗感が高くなってしまった可能性がある。そのため、LINE 相談の機能やメリットを明確にするにより、LINE 相談への抵抗感を低くすることができると考えられる。

引用文献

- 畑中 千紘 (2022). 社会から見た SNS カウンセリング
杉原 保史・宮田 智基・畑中 千紘・樋口 隆弘・鈴木 優佳 (編) SNS カウンセリング・トレーニングブック (pp. 21-37) 誠信書房
- 姜 鳳麗・浅川 潔司・南 雅則・祁 秋夢 (2011). 大学生の心理相談抵抗感に関する中日比較研究 教育実践学論集, 12, 127-134.
- 西村 洋一 (2017). LINE のプライバシー設定と利用行動の現状と関連する要因の検討 日本教育工学会論文誌, 40, 367-377.
- 西村 洋一 (2020). 大学生の友人関係における LINE の利用——自己開示の深さおよび効用認知に注目して—— 聖学院大学論叢, 32, 128-141.

謝辞

本研究は発表者の 2022 年度の川崎医療福祉大学医療福祉学部臨床心理学科の研究の一部を改変したものである。卒業研究計画並びに卒業論文の執筆につきましては、福岡 欣治先生 (川崎医療福祉大学) にご指導いただきました。また、本抄録の取りまとめにあたっては、高尾 堅司先生 (川崎医療福祉大学) よりご助言いただきました。ここに記してお礼を申し上げます。

Table 1
学生相談室の認知・利用経験別に見た尺度得点の平均と標準偏差

変数・下位尺度	知っている		知らない		t値	d
	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
学生相談室の相談への抵抗感	14.57	4.56	15.91	5.13	-1.00	0.29
心理相談の回避	4.14	1.56	4.64	1.57	-0.13	0.33
カウンセラーへの不信	6.72	2.45	6.82	2.36	-1.72	0.04
面子のこだわり	3.72	1.30	4.45	1.51	-0.89	0.56
LINE上での相談への抵抗感	15.0	5.06	17.82	8.38	-1.57	0.51
心理相談の回避	4.69	1.93	5.55	3.01	-0.88	0.41
カウンセラーへの不信	6.69	2.59	7.45	3.33	-2.62	0.29
面子のこだわり	3.62	1.20	4.82	2.27	-1.58**	0.87

***p*<.01

Table 2
尺度得点間の関連性 (相関係数)

変数・下位尺度	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	
LINEの効用認知									
利便性	①	1.00							
親和充足感	②	.76***	1.00						
束縛感・不安感	③	.17	.39***	1.00					
学生相談室の相談への抵抗感									
心理相談の回避	④	-.03	-.03	.03	1.00				
カウンセラーへの不信	⑤	.20	.01	.14	.77***	1.00			
面子のこだわり	⑥	.25*	.33**	.19	.51***	.55***	1.00		
LINE上での相談への抵抗感									
心理相談の回避	⑦	-.11	-.05	.06	.72***	.60***	.51***	1.00	
カウンセラーへの不信	⑧	.09	.05	.18	.67***	.76***	.50***	.78***	1.00
面子のこだわり	⑨	.07	.16	.19	.50***	.49***	.71***	.67***	.66***

****p*<.001,***p*<.01,**p*<.05

バウムテストの指標と性格特性との関連

量的研究手法の探索

○安藤 智哉*・古川 碧*・櫻本 弥陸*・渡邊 綾*・永友 仁菜*・名木田 亜侑美*・土居 正人*

(*吉備国際大学心理学部心理学科)

キーワード：バウムテスト、性格、エゴグラム、BigFive、量的分析

問題と目的

投影法の中でも代表的な検査の一つとして、コッホ (koch, k) が考案したバウムテストがある。これは木の絵を描くことによって、その特徴から被験者の性格特性や心理状態を分析することを可能とする。これまでのバウムテストと性格の関連について調べている研究について見てみると、例えば、登校行動や心理的状态との関連(田山, 2008)や、不登校経験や性格との関連(桑代・郷間・森下, 2002)、ADHD症状との関連(久保・駒井・谷口・榎原, 1999)、アルツハイマー型認知症の進行度との関連(黒瀬, 2013)等があり、バウムテストと性格・心理的状态、不適応行動には関連があることが想定され、樹木の描画による各指標と性格特性及び心理的状态との関連として量的に検討されている。

そのような中、名張・名張 (2009) は、描画の配色や形状から性格や潜在意識等の心理的状态が投影されているとし、独自の解析方法を開発している。それをまとめたものを書籍として出版している。そこには例えば、「画面の上部に伸びる木」が描かれた場合、達成願望、顕示、希求、積極、過度の自意識、楽観、対人萎縮、自己陶醉、思いの強さ、自尊や自身の拡大、非現実、非計画等の性格特性との関連があると解釈している。このようにバウムテストと性格の関連について書かれたものは多くあるが、いずれも量的・統計的に分析されていないことから、その解釈と信頼性には疑問が残っている。確かに投影法は主観的な解釈によって分析することが研究として一般的ではあるが、それが量的分析によって検証された研究が少ないのも事実である。

そこで本研究の目的は、バウムテストに関する書籍に書かれている解釈が、尺度による性格に関連を示すのかについて、量的調査によって検証することである。さらには量的変数によって分析をする際、指標の有無の検討では、「有(本研究では木が画面からはみ出る)」に対して、「無」とは、どこからどこまでを指すのかに

についても検討する。すなわち、木が画面からはみ出ないだけではその他の様々な剰余変数まで含んでいるため、それらを段階的に統制することによって t 値がどのように変わるかについても検討する。

本研究の仮説として、「画面の上部に伸びる木」は、積極性の性格があるとされていることから、Big Five 性格尺度の「外向性」、エゴグラムの「FC」と関連があると予想される。

方法

本研究の調査は、大学生 118 名 (有効回答者 116 名、率 98.3%) に実施した。男性は 67 人、女性は 48 人、その他が 1 人であった。平均年齢は 21.1 歳、 $SD=3.1$ 歳であった。分析対象は日本人 111 名、留学生 5 名であった。使用した調査用紙について、一つ目は、性格傾向を測定するために並川・谷・脇田・熊谷・中根・野口 (2012) の Big Five 短縮版を用いた。これは 29 項目からなり 7 件法 (1: まったく当てはまらない~7: 非常に当てはまる) であった。二つ目は東京大学医学部診療内科 TEG 研究会による TEG (東大式エゴグラム) を使用した。この尺度は、50 項目からなり 3 件法 (1: いいえ、2: どちらでもない、3: はい) である。最後に、バウムテストは A4 の用紙と鉛筆を用いて行った。バウムテストの紙は調査用紙にクリップで留め、絵を描く際には、クリップを外してもらった。用紙の向きは横向きで渡された。指示は「1 本の木を書いてください」とし、調査も含めて 20 分以内で描いてもらった。調査は授業の前後に行い、倫理的配慮として授業における評価にはならないこと、個人情報保護を徹底することの説明を行い、記入をすることによって研究参加の承諾をすとした。分析では HAD (清水, 2016) を用いた。

結果

描かれた木が用紙からはみ出しているかどうかで性格に差があるかを検討した(表 1)。その結果、「外向性」や「FC」に有意な差は見られず、「開放性」と「A」に

のみ有意傾向の差が示された(開放性: $t=-1.76, p<.10$, A: $t=-2.10, p<.10$)。次に、条件を統制して分析することにした。①用紙を横向きに描いた者のみの条件及び、②縦向きに描いた者のみの条件、③小さい木を除いた条件、④多重線を除いた条件、⑤単線を除いた条件、⑥濃い線を除いた条件、⑦薄い線を除いた条件による分析を行った。その結果、「開放性」は全体と①横のみで、「誠実性」は②縦のみ、③小さい木無、④単線無、⑦薄い線無で有意または有意傾向の差が見られた。

次に、描かれた木が用紙からはみ出しているかどうかに加えて、削除する条件を順に重ねていくことで t 値がどのように変化するかについて検討した。①小さい木を除いた条件、②①に加えて用紙を横向きに書いた者のみの条件、③①と②に加えて薄い線を除いた条件、④①と②に加えて単線を除いた条件、⑤①に加えて用紙を縦向きに書いた者のみの条件、⑥①と⑤に加えて薄い線を除いた条件で分析を行った。その結果、条件を重ねた場合では、全ての因子において有意な差が見

られなかった。

考察

書籍に記されている樹木画が表す指標である「画面の上部に伸びる木」と性格特性「外向性」、「FC」との間に有意な差は示されず、仮説は認められなかった。ここから主観的な解釈と統計的分析による結果は、異なっていることが示された。次に、条件統制を重ねていった場合(表2)では有意な差はなくなっていたが、一つの条件で統制した場合(表1)、全体や横のみの条件統制の場合では「開放性」に差が見られていたが、その他の指標を追加して統制した場合には、「誠実性」に差が出現していた。このことから、どの条件で統制するかによって解釈が異なってしまうこと、さらには、条件を重ねていけばいくほど、差が無くなる可能性が示唆された。量的な分析はどのようにすれば正解であるかまだ分からないが、このような検討を続けていくことにより、その指標が意味することについての理解が深まると考えられる。

表1 条件を一つだけ統制した場合の t 検定結果

下位因子	全体			①横のみ ②縦のみ ③小さい木無 ④多重線無 ⑤単線無 ⑥濃い線無 ⑦薄い線無							
	はみ出し無	はみ出し有	$n=97$ $n=12$	はみ出し無	はみ出し有	はみ出し無	はみ出し有	はみ出し無	はみ出し有	はみ出し無	はみ出し有
	$M(SD)$	$M(SD)$	t	t	t	t	t	t	t	t	t
外向性	4.14 (1.36)	4.20 (1.46)	-.13	.40	-.33	-.67	-.89	1.20	.61	-.71	
情緒不安定性	4.99 (1.27)	4.37 (1.43)	1.45	.60	1.02	1.30	1.44	.27	.78	.44	
開放性	3.80 (1.01)	4.22 (.76)	-1.76†	-2.07†	.08	-.79	-.31	-.76	-.40	-.79	
調和性	4.55 (1.10)	4.88 (.78)	-1.30	-1.24	.45	-.53	.01	.47	.13	.70	
誠実性	3.56 (1.23)	3.26 (.77)	1.15	.26	2.41*	1.89†	.91	2.35*	1.04	2.57*	
CP	1.79 (.44)	1.89 (.49)	-.71	-.15	-.07	.30	.84	-.39	-.59	1.56	
NP	2.41 (.51)	2.47 (.34)	-.48	-.73	1.58	.14	.51	1.05	1.30	.16	
A	1.95 (.45)	2.19 (.36)	-2.10†	-.83	-.09	-.22	.41	-.57	.22	.48	
FC	2.10 (.44)	2.13 (.31)	-.29	-1.09	.98	-.66	.40	-.33	-.76	.32	
AC	2.23 (.50)	2.14 (.43)	.69	.07	.53	.24	-.90	.18	.44	-.91	

† $p<.10$, * $p<.05$

表2 条件を重ねて統制した場合の t 検定結果

下位因子	①小さい木無			②=① ③=①+② ④=①+② ⑤=① ⑥=①+⑤				
	はみ出し無	はみ出し有	$n=58$ $n=19$	はみ出し無	はみ出し有	はみ出し無	はみ出し有	はみ出し無
	$M(SD)$	$M(SD)$	t	+横のみ	+薄い線無	+単線無	+縦のみ	+薄い線無
	$M(SD)$	$M(SD)$	t	t	t	t	t	t
外向性	4.00 (1.48)	4.24 (1.32)	-.67	-.31	.46	.02	-1.54	-1.36
情緒不安定性	4.97 (1.36)	4.53 (1.27)	1.30	.61	.15	-.14	1.50	1.44
開放性	3.81 (1.17)	3.99 (.76)	-.79	-.66	-1.20	-.08	-.53	.06
調和性	4.59 (1.15)	4.73 (.98)	-.53	-1.03	-1.57	-.12	-.05	.40
誠実性	3.77 (1.24)	3.19 (1.12)	1.89†	.85	.53	1.67	1.49	.91
CP	1.83 (.48)	1.79 (.49)	.30	.95	.33	1.14	-.04	.67
NP	2.42 (.52)	2.40 (.49)	.14	-1.07	-1.93	-.31	.76	.31
A	1.95 (.46)	1.98 (.51)	-.22	.05	-1.88	.09	-.38	.31
FC	2.07 (.45)	2.15 (.41)	-.66	-1.53	-.98	-.19	-.09	.40
AC	2.20 (.52)	2.17 (.43)	.24	-.70	-.54	-.51	1.19	.24

† $p<.10$, * $p<.05$

少年犯罪に対する知識が犯罪不安及び少年犯罪者の受容に与える影響

○川崎医療福祉大学・布野 聖馬；山根 嵩史

キーワード：少年犯罪，主観的知識，客観的知識，犯罪不安，受容的態度

問題・目的

近年，日本の少年犯罪の件数は年々減少しており令和4年の犯罪白書においては，令和三年の時点で戦後最少を記録している（法務省2023）重大な少年犯罪が起こった際に，一般に加害者は少年院などの更生施設入所し，所定の収容期間を経た後に出所となる。しかし，出所と社会復帰は同義ではなく，出所後に就職や社会適応が困難になるケースも多い。少年院出所後の社会復帰の指標の1つとなるのが再犯率・再入所率である。本国では，2023年（令和4年）の犯罪白書では28.6%と約3人に1人が再犯行っている現状であり決して低いとは言えない（法務省2023）。少年院出所者の再犯率を高めている要因の一つに就労が挙げられる。出所後の社会復帰において，就労が重要になることについて服部（2020）によると出所後に適切に就労につけたかどうか再犯に陥るかどうかの分かれ目になっていると説明している。また，就労を妨げる要因として社会的孤立を説明している。この社会的孤立をどのように避けるかが今後の課題と言える。

社会的孤立が発生する要因の1つに出所後にその地域に受け入れられるかどうかといった地域住民の出所者に対する肯定的なイメージ，すなわち受容的態度が重要であると考えられる。したがって再犯を防ぐためには少年犯罪者に対する受容的態度への影響要因を明らかにし，社会的孤立につながる偏見を解消していく必要がある。先行研究では少年犯罪を含む犯罪加害者へのイメージには，犯罪不安や被害リスク知覚が関係すること，犯罪に関する知識を主観的，客観的知識に分けた際のリスク知覚との関連（松木・向井2020）などが示されているが，これらの変数がどのように少年犯罪者への受容的態度に影響するのかについては，未だ十分に明らかにされていない。したがって本研究では，少年犯罪に対する知識が犯罪不安および少年犯罪者の受容に与える影響を検討することを目的とした。仮説は「主観的知識得点が高い場合，少年犯罪者に対して非需要的であり，犯罪不安が高くなり，また客観的知識が高い場合，少年犯罪者に対して受容的であり犯罪不安が低い」の2つを設定した。

方法

参加者 大学生1年生と3年生計95名に調査し不同意2名を除く93名を調査対象とした（男性26名，女性67名，平均年齢19.33歳，SD=1.19）。

調査内容 少年犯罪についての主観的知識，客観的知識，犯罪不安，受容的態度の4つの変数を測定した。客観的知識および主観的知識は，松木・向井（2020）を参考に本研究では対象が少年犯罪者になるように一部改変し同様の形式で使用した。主観的知識は「以下の項目について，あなたが持っている知識はどれくらいだと思いますか？」という教示を行い，「日本の少年犯罪者の状況」等の項目から構成され，それぞれ5件法（1,少ない～5,多い）で求めた。客観的知識は「ここ5年間の少年犯罪の件数は増え続けている」等の項目から構成され，それぞれ3件法で求めた（1,正しい 2,正しくない 3,わからない）。質問に対して正答だった場合1点，不正解・わからないであった場合0点とした。

犯罪不安の尺度には，社会的水準での犯罪不安（以下，社会的犯罪不安）と個人的水準での犯罪不安（以下，個人的犯罪不安）に関する項目が含まれていた。また，下位尺度として社会的犯罪不安（世の中で起こる少年犯罪），社会的被害リスク知覚（今後，社会一般の人が少年犯罪の被害に会う可能性は高まる），個人的犯罪不安（自分が少年犯罪の被害に会うのではないかと不安に感じる），個人的被害リスク知覚（自分のいつか少年犯罪に会いそうな気がする）がある。本研究では先行研究と同様に4件法で回答を求めた。

受容的態度は，一般的受刑者に対する態度尺度である上瀬（2017）を，少年院出所者が対象となるように一部改変して用いた（例：「刑務所に入るような人は，一般の人とは全く異なる特殊な人だ」→「少年院に入るような人は，一般の人とは全く異なる特殊な人だ」など）。本研究では先行研究と同様に4件法で回答を求めた。

手続き 義中に質問紙調査を行い，配布する前に倫理的配慮，回答方法についての説明を行った。質問紙の回答が終了次第回収を行った。

結果

まず、主観的、客観的知識、犯罪不安、受容的態度についてそれぞれ得られた合計得点を分析に用いて、信頼性分析を行った(図1)。犯罪不安については、下位尺度があったため下位尺度ごとに分析を行った。その結果、主観的知識と犯罪不安については十分に信頼性が高かったが、客観的知識、受容的態度については問題ない水準だと判定した。犯罪不安の下位尺度である「個人的被害リスク知覚」の信頼性係数の値が低かったものの、この下位尺度は2項目のみから構成されるため、項目の削除は行わなかった。

図1 各尺度間の信頼性分析の結果

	平均	SD	α
主観的知識	9.136	3.601	.870
客観的知識	4.068	2.253	.755
受容的態度	45.432	6.498	.792
犯罪不安	44.477	6.867	.899
社会的犯罪不安	9.011	2.327	.931
社会的被害リスク知覚	7.830	2.167	.725
個人的犯罪不安	4.648	1.912	.966
個人的被害リスク知覚	3.920	1.358	.539

本研究で建てた、主観的知識得点が高い場合、犯罪不安は高く、少年犯罪者に対して非受容的である。また客観的知識得点が高い場合、犯罪不安が低く、少年犯罪者に対して受容的であるという仮説を検討するため、相関分析を行った(図2)。

相関分析の結果、主観的知識と受容的態度には有意な負の相関が確認された。これは、主観的知識の得点が高い場合、犯罪不安が高く、少年犯罪者に対して非受容的であるという仮説を一部支持する結果であった。また客観的知識と個人的犯罪不安についても有意な負の相関が確認された。これも本研究で建てた客観的知識得点が高い場合、犯罪不安が低く、少年犯罪者に対して受容的であるという仮説を一部支持する結果であった。

図2 各尺度間の相関分析の結果

変数	1	2	3	4	5	6	7
1.主観的知識	—	.200	-.253*	-.047	-.043	-.036	.096
2.客観的知識		—	-.008	-.005	-.177	-.226*	-.160
3.受容的態度			—	.105	.120	.162	-.025
4.社会的犯罪不安				—	.671**	.523**	.328**
5.社会的被害リスク知覚					—	.657**	.402**
6.個人的犯罪不安						—	.680**
7.個人的被害リスク知覚							—

** $p < .01$, * $p < .05$

考察

本研究の目的は、大学生を対象に少年犯罪者に対する受容的態度の関連要因を検討することであった。分

析の結果、主観的知識と受容的態度、客観的知識と個人的犯罪不安には有意な負の相関が、犯罪不安の下位尺度間には有意な正の相関が確認できたが、その他の尺度には相関は確認されなかった。したがって本研究の仮説は一部支持される結果であった。

今回の結果で仮説が支持されなかった部分として主観的知識と犯罪不安、客観的知識と受容的態度の関係があげられる。主観的知識と犯罪不安について、相関が確認されなかった要因として、先行研究では犯罪全般について主観的知識と犯罪不安の関係が示されていたが、少年犯罪ではこれらの関係が薄いと考えられる。

また、客観的知識は犯罪不安とは一部関連を示したが、受容的態度とは関連しなかった。松木・向井(2020)における客観的知識の正答率は31.8%であり、本研究の客観的知識の平均値(11点満点中4点)と比較して特段高いわけではない。したがって、本研究の参加者が少年犯罪についての知識を持っていないわけではないにも関わらず、客観的知識が受容的態度と関連しなかった理由として、少年犯罪においては受容的態度の形成プロセスが一般犯罪と異なる可能性が考えられる。「問題」部分で述べたように、少年犯罪は過度に強調して報道される傾向があり、それらを目にする視聴者は、例え正確な知識を持っていても、少年犯罪に対して受容的態度を持ちにくくなっている可能性がある一方で、主観的知識が受容的態度を形成する上での阻害要因となることも、本研究の結果から示されている。

以上のことから、少年犯罪者に対する受容的態度を育成するためには、主観的知識ではなく客観的知識を高め、かつ客観的知識の獲得が受容的態度と結びつくようなアプローチを行う必要があるといえる。

引用文献

- 服部(2020)少年院出院後の「居場所の確保」のための支援の在り方についての一考察：少年院と関係機関の連携の在り方と現状の分析を中心として社会安全・警察学 7,103-113,
- 法務省 法務総合研究所(2022)令和4年版犯罪白書 法務省
- 上瀬由美子(2017)官民協働(PFI)刑務所に関する知識獲得と刑務所に対する態度の変容—出所者の社会的包摂に有効な情報とは何か—立正大学心理学研究所紀要 15,47—58
- 松木祐馬・向井智哉(2020)犯罪に関するリスク知覚と知識量の関連法と心理, 20, 1, 159-164

気象条件が女性の抑うつに与える影響

— ストレス・環境要因との関連から —

○橋本 穂乃香 ・ 山根 嵩史

(川崎医療福祉大学) (川崎医療福祉大学)

キーワード：抑うつ，気象，ストレス，ライフイベント

問題・目的

近年、記録的な大雨や猛暑日が続くなど、異常気象が話題になることが多い。異常気象について気象庁(2021)は「ある場所(地域)・ある時期(週, 月, 季節)において30年に1回以下で発生する現象」のこととしている。これらの異常な気象の変化は地球温暖化などの環境問題からの視点で注目されることがあるが、環境破壊だけでなく健康被害も引き起こす要因となっている。

気象と身体の関係について渡辺他(1993)は、前線通過がメニエール病発症の一つの大きな誘因であることを明らかにしている。このような先行研究より、気象は身体の症状の発症や変化に影響を与える要因であると考えられる。また、藤森・志村(1987)は気温の変化は精神障害の病勢増悪あるいは病態像の変化に対する重要な因子であると推測していることから気象は精神障害や、うつ病などの気分障害に影響を与える因子であることが考えられる。

一方で、藤森・志村(1987)は精神障害の病態増悪あるいは病態像の変化には気象因子のみではなく、社会的あるいは環境状況因的なものが関係している可能性があるかと推測している。また、宮本他(1985)は気象要因の影響の受け方が患者ごとに異なっているのは解剖学的個体差のほか生活環境、職種、生活歴など様々な要因が関与していると推測している。

これらの先行研究から、気象は心身ともに症状の発症・変化に影響を及ぼす要因であることが考えられる一方で、生活環境のような気象以外の外因に加え、ストレスのような個人の内因も心身の症状の発症・変化に影響していると考えられる。そのため、気分や身体への症状の変化に影響を及ぼす要因を統制することで、気象条件との関連がより詳細に検討できると考えられる。

そこで本研究では、うつ病の特徴である抑うつに着目し、影響を与える要因と考えられる気象(気圧, 気温, 湿度), ストレス, 環境(ライフイベント)の3つを挙げ、気象がストレスや環境要因と比べてどの程度抑うつを予測するのかを検討すること、加えて、気象条件の中で抑うつと有意な関係性がある条件を検討することを目的とした。

方法

調査対象者

中国地方および近畿地方にある大学に通う女子大学生12名(平均年齢20.25歳, $SD=0.92$)を分析対象とした。

調査内容

本調査はGoogleフォームを用いて実施した。

フェイスシート 本研究の概要および調査目的、調査への回答方法、回答は任意であり、いつでも中断が可能であること、個人情報への守秘に関する参加者への説明を明記し、これらに同意の得られた参加者に学年、年齢、性別、メールアドレスもしくは特定のニックネームについて入力を求めた。

抑うつ尺度 抑うつ状態を測るため、村松(2014)のPHQ-9を使用した。この尺度は9項目から構成され、回答は「0:全くない」から「3:ほとんど毎日」までの4件法であった。

ストレス尺度 ストレス状態を測るため、鈴木他(1997)のSRS-18を使用した。この尺度は抑うつ・不安尺度6項目、不機嫌・怒り尺度6項目、無気力尺度6項目の計18項目からなり、回答は「0:全くちがう」から「3:その通りだ」の4件法であった。

環境要因 高比良(1998)の作成した対人・達成領域別ライフイベント尺度(大学生用)を参考に、NLE-対人, NLE-達成, PLE-対人, PLE-達成の4つの下位尺度からそれぞれ経験率の高い3項目ずつを抜粋し、計12項目を使用した。回答は「0:経験ない」と「1:経験ある」の2件法であった。

調査手続き

週に1回、毎週火曜日にアンケートフォームを対象者に送信した。回答期限は1週間とし、毎週同じ内容のアンケートフォームを送信した。調査は計10回(10週)実施した。

気象データの測定

国土交通省気象庁より調査対象者が住む地域の10分ごとの気象データを用いた。用いたデータは、気圧, 気温, 湿度の3つである。なお、気象データは調査対象者がアンケートフォームを送信した時間のデータを用いた。

結果

1 回目の 12 人分のデータの集計を 1 時点とし、各尺度について時点ごとに分析した。

線形混合モデルによる分析

気象条件が抑うつに与える影響について、個人差や測定時点による差を加味したうえで、その他の変数との比較検討を行うため、PHQ の合計得点を目的変数とし、参加者および測定時点を変数効果として投入した線形混合モデルによる分析を行った。分析に際して、説明変数はすべて集団平均による中心化を行った。まず、気象条件単独での抑うつへの影響を検討するため、気圧、気温、湿度の 3 変数を説明変数として投入したところ、いずれの変数も抑うつを予測しなかった (AIC = 603.4 ; 気圧 : $\beta = 0.07$, $p = .43$; 気温 : $\beta = -0.08$, $p = .12$; 湿度 : $\beta = -0.00$, $p = .84$)。次に気象条件に加えてストレス (SRS の合計得点) を説明変数として投入したところ、SRS の合計得点のみが有意に抑うつを予測した (AIC = 563.6 ; SRS : $\beta = 0.20$, $p < .001$)。また、気象条件に加えてライフイベントを説明変数として投入したところ、PLE と気温に有意傾向が見られた (AIC = 603.1 ; PLE : $\beta = -0.60$, $p = .07$; 気温 : $\beta = -0.10$, $p = .06$) (Table1)。さらに、気象条件に加えてライフイベントの下位尺度を説明変数として投入したところ、PLE-対人が有意に抑うつを予測し、気温に有意傾向が見られた (AIC = 604.5 ; PLE-対人 : $\beta = -1.13$, $p = .05$; 気温 : $\beta = -0.10$, $p = .06$) (Table2)。

Table 1

抑うつと気象条件およびライフイベントの標準化偏回帰係数

	β
PLE	-0.60+
NLE	0.32
気圧	0.08
気温	-0.10+
湿度	0.00
AIC	603.1

Table 2

抑うつと気象条件およびライフイベント (下位尺度) の標準化偏回帰係数

	β
PLE-対人	-1.13*
PLE-達成	-0.19
NLE-対人	0.02
NLE-達成	0.59
気圧	0.08
気温	-0.10+
湿度	0.00
AIC	604.5

考察

気象条件単独での抑うつへの影響を検討した結果、気象条件単独では抑うつを予測しなかった。この結果から、抑うつを予測が気象条件単独では左右されないということが示唆された。これは、抑うつに対して気象条件よりも強く影響を与える要因があるからであると考えられる。また、ストレスやライフイベントの変数においても同様に、線形混合モデルによる分析を行った結果、抑うつに影響を与える気象条件は気温であることが示唆された。藤森・志村 (1987) より、気温の変化は精神障害の病態増悪あるいは病態像の変化に対する重要な因子であることが推測されている。また、宮本他 (1985) は、リウマチ患者について朝のこわばり時間、関節痛、関節腫脹のうちの少なくとも 1 つが気象要素の変化に伴った変動を示すこと、気象要因のうちでは気温がもっとも影響が強いということを明らかにしている。本研究の結果についても、抑うつを予測に対して気象条件のうち、気温に有意な関係が見られたことは先行研究と同様の結果であると考えられる。

これらのことから、気象条件が抑うつに与える影響については、全く無いとは言えないが、ストレスや環境要因などと比べると、相対的に影響は小さいことが明らかになった。

引用文献

- 藤森 英之・志村 正子(1987). 気象条件と精神障害——精神科救急の事例から 日生気誌, 24(2), 67-73.
- 気象庁(2021). 気候・異常気象について 気象庁 Retrieved October 19, 2023 from <https://www.jma.go.jp/jma/kishou/known/faq/faq19.html>
- 宮本 昭正・鈴木 修二・行山 康・田所 憲治・竹内 二士夫・鎌倉 稔成(1985). 気候と疾患 日温気物医誌, 49(1), 11-19.
- 村松 公美子(2014). Patient Health Questionnaire(PHQ-9, PHQ-15) 日本語版および Generalized Anxiety Disorder-7 日本語版——up to date—— 新潟青陵大学大学院臨床心理学研究, 7, 35-39.
- 鈴木 伸一・嶋田 洋徳・三浦 正江・片柳 弘司・右馬 埜力也・坂野 雄二(1997). 新しい心理的ストレス反応尺度 (SRS-18) の開発と信頼性・妥当性の検討 行動医学研究, 4(1), 22-29.
- 高比良 美詠子(1998). 対人・達成領域別ライフイベント尺度 (大学生用) の作成と妥当性の検討 社会心理学研究, 14(1), 12-24.
- 渡辺 行雄・将積 日出夫・伊東 宗治・石川 美幸・水越 鉄理(1993). 気象 (とくに寒冷前線通過) とメニエール病発作との関連性について Equilibrium Research, 52, 21-24.

完全主義がワーカホリズムを介してプレゼンティーズム に与える影響

○加賀千瑛実 ・ 谷原弘之 ・ 山根嵩史

(川崎医療福祉大学大学院) (川崎医療福祉大学) (川崎医療福祉大学)

キーワード：プレゼンティーズム，完全主義，ワーカホリズム

問題

労働者が体調不良，病気，ストレス反応といった健康問題を持ちながら出勤している状態をプレゼンティーズムという。近年，がん，糖尿病，虚血性心疾患やうつ病などのメンタルヘルス不調を有する労働者が増加しつつあり，さらにストレスを感じている労働者も増えており，これらの不調を抱えながら出勤してしまうプレゼンティーズムは益々深刻な問題となっている。職場でのプレゼンティーズムは広く研究されているが，プレゼンティーズムの影響を受けるのは労働者だけではない。大学生におけるプレゼンティーズムに着目した研究もある。大学生のプレゼンティーズムは体調不良や精神的な健康問題を持ちながら通学している状態として捉えられる。Matsushita et al.

(2011)では学生版プレゼンティーズム・スケールを開発している。プレゼンティーズムの概念を大学生に拡張することで，大学生の精神的健康について新しい視点を提供可能である。Komp,R et al. (2022)は，過去 12 ヶ月間で約 6 割の学生が非常に気分が悪いにも関わらず，勉強を続けており，プレゼンティーズムが健康，幸福，および勉強能力に悪影響を及ぼしていることを明らかにした。

プレゼンティーズムに陥りやすい性格として，完全主義が挙げられる。過度に完全性を求めることを完全主義 (perfectionism) という。

完全主義とプレゼンティーズムの関係において，ワーカホリズムが媒介することが指摘されている。ワーカホリズムとは，仕事に過度にのめり込み，一生懸命働く傾向のことである。Girardi et al.(2015)は，ワーカホリズムは完全主義とプレゼンティーズムの関係を完全に媒介することを示した。

上記のように，完全主義とプレゼンティーズムを媒介するものとしてワーカホリズムがある。ワーカホリズムの傾向を持つ労働者は，仕事に没頭しているため，高い成果が得られる可能性はあるが，必要以上に仕事にのめり込んでしまうため，このような状態を長く続けていると，結果として自分の心身の健康を害することにつながりやすい。Schaufeli et al. (2009)は，

ワーカホリズムには「働きすぎ」という行動的側面と，「強迫的な働き方」という認知的側面が存在すると指摘している。Schaufeli et al. (2009)は，ワーカホリズムを測定するオランダ・ワークアディクション尺度 (Dutch Work Addiction Scale:DUWAS) を作成した。本尺度は，「強迫的な働き方」(項目例：私にとって重要なのは，やっていることが面白くないときでも一生懸命に働くことだ)と，「働きすぎ」(項目例：急いでいて，時間と競争しているようだと感じる)の 2 因子，各 5 項目で構成されている。本研究では，大学生を対象とするため，DUWAS の項目について，大学生に当てはまるよう「仕事」を「勉強」に変更している。

文部科学省 (2022)によると日本の大学学部のある学生数は，262 万 6 千人で，前年度より 2 千人増加し，過去最多を更新している。増加傾向にある大学生の健康を考えることは必要不可欠である。完全主義という考え方や傾向が強迫的な勉強の仕方，勉強のやり過ぎといった大学生の学業に対するワーカホリズムを介してプレゼンティーズムに与える影響について検討することは，大学生の健康を考える際に必要であると考え

目的

本研究の目的は，大学生を対象に，完全主義がワーカホリズムを介して大学生のプレゼンティーズムに対してどのような影響を及ぼすか明らかにすることである。

方法

調査の手続き

調査対象は大学生 141 名で質問紙調査を行なった。回答の不備を除いた有効回答者は 110 名で 78.0%であった (男性：33 名，女性：77 名)。平均年齢は 19.30 歳，標準偏差は 0.46 であった。

質問項目

フェイスシート 性別，年齢などの基本属性についての回答を求めた。

完全主義 Burns(1980)の完全主義尺度の日本語版 (桜井・大谷，1994)を使用した。

プレゼンティーズム Matsushita et al. (2011) の学生版プレゼンティーズム尺度 (PSS) を使用した。

ワーカホリズム Schaufeli et al. (2009) の Dutch Work Addiction Scale (DUWAS) を使用した。

倫理的配慮

川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を受けて実施した (承認番号 22-091)。

結果

尺度の信頼性分析・記述統計量

各尺度の信頼性分析, 平均値, 標準偏差を (SD) を Table 1 に示した。

Table 1 各尺度の α 係数, 平均値, 標準偏差

	α	平均値	SD
完全主義	.65	29.98	6.23
ワーカホリズム	.75	17.18	4.85
働きすぎ	.44	8.15	2.27
強迫的な働き方	.72	9.03	3.19
プレゼンティーズム	.81	26.00	9.38
Completing work	.91	11.69	6.11
Avoiding distraction	.73	14.58	7.00

相関分析・媒介分析

完全主義, ワーカホリズム, プレゼンティーズム間の関連について, 検討するため相関分析を行い, Pearson の積率相関係数を求めた。完全主義とワーカホリズムとの間に弱い正の相関 ($r=.33, p<.05$), 完全主義とワーカホリズム (強迫的な働き方) との間に弱い正の相関 ($r=.37, p<.05$), 完全主義とプレゼンティーズム (Avoiding distraction) との間に弱い負の相関 ($r=-.19, p<.10$) があつた。

完全主義がプレゼンティーズムに与える影響についてワーカホリズムが媒介するかどうかを確かめるため, 媒介分析を行った。まず, プレゼンティーズムを目的変数, 完全主義を説明変数とする回帰分析を行なったところ, 完全主義は有意にプレゼンティーズムを予測しなかった ($\beta=-.05, ns$)。次に, ワーカホリズムを説明変数に追加したところ, ワーカホリズムはプレゼンティーズムを有意に予測しなかった ($\beta=-.03, ns$)。完全主義の効果は非有意となった ($\beta=-.04, ns$)。最後に間接効果の検定 (Sobel 検定) を行なったところ, 間接効果は非有意であった ($Z=-.26, ns$)。完全主義がプレゼンティーズム (Completing work) に与える影響, 完全主義がプレゼンティーズム (Avoiding distraction) に与える影響についてそれぞれワーカホリズムが媒介するかどうかを確かめるため, 媒介分析を行った。まず, プレゼンティーズム (Completing work) を目的変数, 完全主義を説明変数とする回帰分析を行ったところ, 完全主義は有意傾向にプレゼンティーズム (Completing work) を予測した ($\beta=.18, p<.10$)。次に, ワーカホリズムを説明変数

に追加したところ, ワーカホリズムはプレゼンティーズム (Completing work) を有意に予測しなかった ($\beta=-.04, ns$)。完全主義の効果は有意傾向となった ($\beta=.20, p<.10$)。最後に, 間接効果の検定 (Sobel 検定) を行ったところ, 有意な間接効果は認められなかった ($Z=-.34, ns$)。プレゼンティーズム (Avoiding distraction) を目的変数, 完全主義を説明変数とする回帰分析を行ったところ, 完全主義は有意にプレゼンティーズム (Avoiding distraction) を予測した ($\beta=-.21, p<.05$)。次に, ワーカホリズムを説明変数に追加したところ, ワーカホリズムはプレゼンティーズム (Avoiding distraction) を有意に予測しなかった ($\beta=-.05, ns$)。完全主義の効果は有意傾向となった ($\beta=-.20, p<.10$)。最後に, 間接効果の検定 (Sobel 検定) を行ったところ, 有意な間接効果は認められなかった ($Z=-.48, ns$)。

考察

完全主義とプレゼンティーズムの関係においてワーカホリズムの媒介効果は見られなかった。そのことから, 大学生において, 完全主義という性格傾向が, 強迫的な勉強の仕方, 勉強のやりすぎといった学業に対するワーカホリズムを介して, プレゼンティーズムに影響を与えていないことが言える。社会人では完全主義とプレゼンティーズムの関係をワーカホリズムが媒介するが大学生では媒介しない。社会人における仕事と学生における学業の枠組みに違いがあるのではないだろうか。枠組みの違いとして, 仕事は金銭的な報酬があるのに対し, 学業は金銭的な報酬が生じないこと, 仕事は社会貢献する面があるが学業は自分自身ために行っていることが挙げられる。

主な引用文献

- Girardi, D., Falco, A., Piccirelli, A., DalCorso, L., Bortolato, S., & De Carlo, A. (2015). Perfectionism and presenteeism among managers of a service organization: The mediating role of workaholism. *TPM Testing, Psychometrics, Methodology in Applied Psychology*, 22-4, 507-521
- Matsushita, M., Adachi, H., Arakida, M., Namura, I., Takahashi, Y., Miyata, M., Kumanogo, T., Yamamura, S., Shigedo, Y., Suganuma, N., Mikami, A., Moriyama, T., & Sugita, Y. (2011). Presenteeism in college students: reliability and validity of the Presenteeism Scale for Students. *Quality of Life Research* 20, 439-446
- 桜井茂男・大谷佳子 (1994). 完全主義と抑うつ傾向の関係についての研究—Burns による完全主義尺度を用いて— *奈良教育大学紀要 人文・社会科学*, 43 (1), 213-223

青年の対人関係における過敏性が自己表現を介して本来感に及ぼす影響

○中川 紗耶加 ・ 福岡 欣治

(川崎医療福祉大学大学院) (川崎医療福祉大学)

キーワード：青年，対人関係の過敏性，自己表現，本来感

問題・目的

現代青年の特徴

近年、インターネットを通じたコミュニケーションが増え、対人関係が多様化している。SNS を通じて自己表現の場が増えたり、「多様性」という言葉が頻繁に使われその人らしさがより尊重されるようになってきている。しかし、現代青年について、関係の傷つけを慎重に回避する「優しい関係」(土井, 2009) や、周囲に自己を合わせ状況に応じて切り替える「多元的自己」(高木・廣瀬, 2021) 等が指摘されている。以上のことから、現代青年は対人関係に過敏で、悪影響が及ぶことを避けるため、本来の自己を抑えて行動することも少なくないと考えられる。

対人関係における過敏性

他者に対する過敏さの概念として、「対人関係過敏性」がある。Boyce & Parker (1989) は「他者の行動や感情に対する過度で極端な意識と感受性」と定義し、これを測定する Interpersonal Sensitivity Measure (IPSM) を開発した。ほぼ同義の概念に、「他者から拒絶されることを心配・予期し、すぐに知覚し、過度に反応する傾向」(Downey & Feldman, 1996 ; 巢山他, 2014) を示す「拒絶に対する過敏性」がある。巢山他 (2014) は、拒絶に対する過敏性を対人関係過敏性と統一して扱い、青年期の一般的な行動傾向として拒絶に対する過敏性を測定する、IPSM 日本語版の J-IPSM を作成した。本研究では、対人関係の過敏性を表す概念として、巢山他 (2014) の拒絶に対する過敏性を扱うこととする。

自己表現

良好な対人関係を築く上で、自分も相手も尊重する関わりは重要である。平木 (1993) は他者との関わりとしての自己表現を3つに分類した。まず、「アサーティブ」は、自分の意見も相手の意見も大切にし、より望ましい表現として人間関係を円滑にする。「非主張的」は、他者を優先し自分の気持ちを十分に表現しない。欲求不満となり人付き合いが億劫になり、うつなどの心身症状を呈することがある。「攻撃的」は、他者を軽視して自己表現をするため、交友関係に悪影響が及びやすい。また、自分の主張を嘘やまわりくどい言い方で伝える「間接的表現」がある(安藤, 2009)。内山 (2020) は、日常場面でよく使用される表現として、間接的表

現と3つの表現からなる自己表現尺度を作成した。

自己表現に関連することとして、対人恐怖心性と拒否回避欲求がアサーティブ行動を阻害することや(三田村・横田, 2006)、現代の大学生の対人関係の特徴として、他者に嫌われることを恐れて非主張的表現を行うという指摘がある(堀川・柴山, 2006)。

本来感

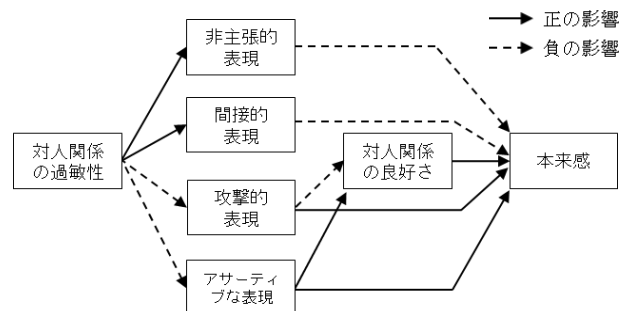
自己確立していく青年期に重要といえる自分らしさの感覚として、伊藤・小玉 (2005) は「本来感」を「自分自身に感じる自分の中核的な本当らしさの感覚の程度」と定義した。大学生対象の研究では、本来感が精神的健康へ促進的に影響することが確認されている(伊藤・小玉, 2005)。また、本来感と、他者からよく思われようとする欲求や自分を抑制することは負の関連がある(益子, 2010; 伊藤・小玉, 2007)。石原 (2013) では、他者からの被受容感が本来感の形成に関係していることが示された。良好な対人関係がある感覚と本来感が関連することから、ある表現が対人関係に影響する場合、本来感も影響を受け得ると考える。

目的と意義

以上より、対人関係に過敏であると自分を抑える表現をし、その結果本来感を低減させる一方、過敏にならず率直な自己表現ができれば、本来感が促進されると考える。そこで、本研究は青年にあたる大学生を対象とし、対人関係の過敏性が自己表現を介して本来感に及ぼす影響を検討することを目的とする。本来感をもたらす要因の実証的な検討は不足しており(伊藤・小玉, 2006)、本研究は自己確立していく青年について、本来感を促進する方法の示唆を得るものとする。本研究の仮説として構想するモデルを Figure 1 に示す。

Figure 1

本研究の仮説モデル



方法

調査対象者

大学生を対象に調査票を配布し、408名分を回収した。不同意や記入不備を除いた378名(男120,女258;年齢 $M=19.44$, $SD=1.18$)を分析対象とした。

主な測定内容

対人関係の過敏性 巢山他(2014)のJ-IPSMを用いた(5因子計27項目,4件法)。分析では合計点を用いた。

自己表現 内山(2020)の自己表現尺度を用いた(「非主張的」「間接的」「攻撃的」「アサーティブ」の4因子計25項目,5件法)。

対人関係の良好さ 日本の青年の対人関係に関する尺度を参考にした,加藤(2001)の友人関係満足感尺度を用いた(計6項目,4件法)。

本来感 伊藤・小玉(2005)の本来感尺度を用いた(計7項目,5件法)。

実施手続き

講義担当教員の許可を得て,授業に支障がない範囲で質問紙を配布した。調査対象者には,文書及び口頭での説明により同意を得た。実施に先立ち,川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得た(承認番号:22-061)。

結果

尺度の信頼性と記述統計量

各尺度の信頼性はいずれも高かった($\alpha = .70-.93$)。その後,対応のない t 検定を行った結果,「対人関係の良好さ」を除く全ての変数に男女差が見られたため,以降の分析でも男女差を検討することとした。

変数間の関連性

変数間の相関係数を確認した(Table 1)。その結果,男女ともに,対人関係の過敏性とアサーティブな表現との間に有意な相関は見られなかった。

Table 1

変数間の相関係数

変数・下位尺度	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
対人関係の過敏性	①	.61**	.52**	-.36**	.04	-.25**	-.62**
自己表現							
非主張的表現	②	.52**	.54**	-.38**	.15*	-.19**	-.40**
間接的表現	③	.42**	.53**	-.45**	-.09	-.26**	-.52**
攻撃的表現	④	-.16	-.14**	-.19*	-.04	.18**	.42**
アサーティブな表現	⑤	.09	.17	-.10	-.03	.22**	.14*
対人関係の良好さ	⑥	-.26**	-.10	-.02	.08	.47**	.48**
本来感	⑦	-.55**	-.35**	-.30**	.19*	.28**	.46**

注)相関係数は左下が男性,右上が女性を示す。

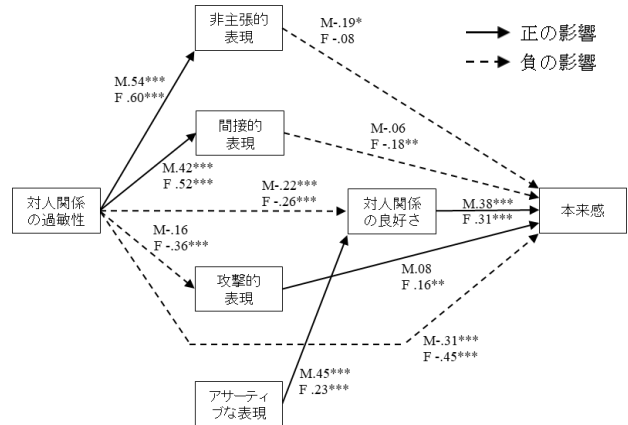
** $p < .01$, * $p < .05$

次に,仮説モデル(Figure 1)と相関分析の結果をもとに,性別でグループを分け多母集団同時分析による共分散構造分析を行った。最終的なモデルの適合度指標は, $GFI=.980$, $AGFI=.921$, $RMSEA=.050$, $CFI=.982$ であった(Figure 2)。男女ともに,対人関係の過敏性からアサーティブな表現,アサーティブな表現から本来感へのパスが有意ではなかった。対人関係の過敏性

が高い場合,男女ともに非主張的及び間接的表現を好み,男性は前者,女性は後者を介して本来感へ負の影響を与えていた。また,女性のみ,過敏性が低い場合に攻撃的表現を介し本来感へ正の影響を与えていた。

Figure 2

多母集団同時分析の結果



注)誤差項および誤差項同士の相関は煩雑さを避けるため省略。

考察

男女ともに,対人関係の過敏性がアサーティブな表現に影響を与えていなかった点は予測と異なっていた。対人関係の過敏さと,アサーティブな表現をしているかどうかは別の問題といえる。アサーティブな表現は,本来感へ直接影響せず,その点も予測と異なっていたが,対人関係の良好さを通じて間接的に本来感を高める可能性が示された。本来感を高めるには,自己表明だけでなく,良好な関係がある感覚も重要といえる。また,過敏性が高い青年は非主張的及び間接的表現を好みやすく,男性は前者,女性は後者が本来感を下げることが確認された。さらに,女性のみ,過敏性が低い場合に攻撃的表現を介して本来感が高まることが示された。以上から,自分の意思を率直に表現することは,本来感を促進させる重要な要素と考えられる。

主な引用文献

- 伊藤 正哉・小玉 正博 (2005) . 自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53, 74-85. https://doi.org/10.5926/jjep1953.53.1_74
- 巢山 晴菜・貝谷 久宣・小川 祐子・小関 俊祐・小関 真実・兼子 唯・伊藤 理紗・横山 仁史・伊藤 大輔・鈴木 伸一 (2014) . 本邦における拒絶に対する過敏性の特徴の検討——非定型うつ病における所見—— 心身医学, 54, 422-430. https://doi.org/10.15064/jjpm.54.5_422
- 内山 有美 (2020) . 自己表現尺度の作成および信頼性と妥当性の検討 パーソナリティ研究, 28, 247-249. <https://doi.org/10.2132/personality.28.3.3>

自己受容をもたらす適切な自己側面への注目

——背景要因としての被受容感・被拒絶感を含めた検討——

○照下 未夕 ・ 福岡 欣治

(川崎医療福祉大学 臨床心理学科)

キーワード：自己受容，注目する自己側面，被受容感，被拒絶感

問題と目的

ありのままの自分を受け入れることを意味する「自己受容」(沢崎, 1984)は、心の健康や適応をもたらす自己の要因として、極めて重要であると考えられる。Rogers (1942 末武他訳, 2005)は、カウンセリングにおける重要な局面の一つとして自己受容を挙げている。また先行研究では、例えば自己受容と抑うつとの間に負の相関(沢崎, 1993)、主観的幸福感との間に正の相関(牧野・田上, 1988)が報告されている。

本研究では、この自己受容を左右する要因として、「自己に対する注意の向け方」と「他者との関係性」の2つの観点を取り上げる。

1 点目の自己に対する注意の向け方に関して、自分に注目している状態や自らに注意を向けやすい特徴としての「自己注目」がある(坂本, 1997)。中でも「反芻」は自己への脅威や喪失、不正によって生じる不適応的な自己注目、「省察」は自己への探求心や知的好奇心から生じる適応的な自己注目とされ(Trapnell & Campbell, 1999)、反芻は自己受容と負の、省察は正の関連をもつことが報告されている(高野他, 2012)。

ただし、田淵・及川(2018)も指摘しているように、反芻や省察は「どのような動機から自己注目しやすいか」の傾向を表す特性である。そのため直接的に左右することは容易ではなく、より変容可能性の高い観点から捉えることが有効であると考えられる。そこで本研究では「注目する自己側面」、すなわち、自己注目時に自己のどのような側面に注目するのか(熊田・及川, 2015)という観点を採用する。

2 点目の「他者との関係性」について自己受容の関連が検討されている概念に「被受容感」がある。山田・岡本(2006)は「他者を通しての自己受容」という視点を提案し、受容してくれる他者の存在が両方の自己受容と正の関連を持つことを報告している。直接の先行研究はないが、被受容感は個人に安心感をもたらすことから(板津, 2013)、自己の肯定的側面への注目を促すと考えられる。また、被受容感は自己の否定的側面への受け止め方にも関与していると考えられる。たとえば古木・森田(2009)は、挫折からの回復に際し、他者の受容的存在に支えられることで、自分のネガティブな側面に対しても前向きな姿勢を獲得する可能性を報

告している。

なお、被受容感と併せて検討されている概念に「被拒絶感」がある(杉山・坂本, 2006)。被受容感と被拒絶感はともに抑うつと関連するが、両者は別次元として扱うべきであるとされる(杉山・坂本, 2006)。杉山・坂本(2006)の知見に依拠すれば、抑うつにつながるような自己への注目に対しては、被受容感よりも被拒絶感の方がいっそう強く関与する。従って、被拒絶感は、否定的な自己への注目を強め、肯定的な自己への注目を妨げるように作用することが考えられる。ただし、自己受容に対して被拒絶感が直接に関与するかどうかは明らかではない。相対的には被拒絶感よりも被受容感の方が直接的に自己受容を左右することが想定される。

本研究では、肯定的および否定的な自己側面への注目が自己受容を左右するか、また被受容感・被拒絶感と自己受容との関連を自己側面への注目が媒介するかどうかを検討する。仮説は、以下のとおりである。

仮説1：肯定的自己への注目は自己受容に対して正の、否定的自己への注目は負の影響を及ぼす。

仮説2：被受容感は肯定的自己への注目に対して正の、否定的自己への注目に対して負の影響を及ぼす。

仮説3：被拒絶感は否定的自己への注目に対して正の、肯定的自己への注目に対して負の影響を及ぼす。

仮説4：被受容感では自己側面への注目を介した間接的な自己受容への影響と直接的な影響の両方がみられる一方、被拒絶感から自己受容への影響は、自己側面への注目を介した間接的なもののみがみられる。

方法

参加者

4年制大学の学生107名を対象に調査を実施し、記入不備のあったものを除く98名のデータを分析対象とした(男性35名、女性61名、その他・不明2名)。

主な調査内容

被受容感・被拒絶感 杉山・坂本(2006)にもとづき、「被受容感」「被拒絶感」各8項目・4件法を使用した。

注目する自己側面 熊田・及川(2015)による20項目を用いた。因子分析の結果、所属不明瞭な1項目(項目18)を除いた「肯定的自己への注目」10項目、「否定的自己への注目」9項目を使用した。

自己受容 櫻井 (2013) より 19 項目を使用した。「全体としての自己の受容」「望ましい自己の受容」「現状満足」の 3 因子からなるが、本研究では因子構造が不明瞭であったため全 19 項目での合計点を使用した。

実施手続き

2023 年 7 月に 3 科目の教室にてそれぞれ授業に先立って実施した。無記名であること、回答しないことによる不利益はないこと、結果は研究目的でのみ使用すること等を文書と口頭で説明した。調査票内には協力への同意欄を設けた。調査は総じて、発表者の所属学科において定められた倫理指針に沿って実施された。

結果

尺度の信頼性と記述統計量

Table 1 に示すとおり、いずれも一定水準以上の信頼性係数が得られた。なお、男女差の有無を対応のない *t* 検定で確認したところ、いずれの変数にも有意差は認められなかった (*ts* < 1.0)。

Table 1 尺度の信頼性と記述統計量。

変数と下位尺度	項目数	α 係数	平均値	標準偏差
被受容感・被拒絶感				
被受容感	8	.86	28.57	5.40
被拒絶感	8	.90	17.16	6.29
注目する自己側面				
肯定的自己への注目	10	.86	30.79	7.19
否定的自己への注目	9	.86	34.40	6.41
自己受容				
(19項目計)	19	.91	59.85	13.43

変数間の相関関係

ピアソンの積率相関係数を算出した (Table 2)。自己受容はすべての変数と有意に関連していた。被受容感と肯定的自己への注目、被拒絶感と否定的自己への注目の間に、それぞれ有意な正の相関が認められた。被受容感と否定的自己への注目、被拒絶感と肯定的自己への注目との間には、有意な相関が認められなかった。

Table 2 変数間の相関関係 (ピアソンの積率相関係数)

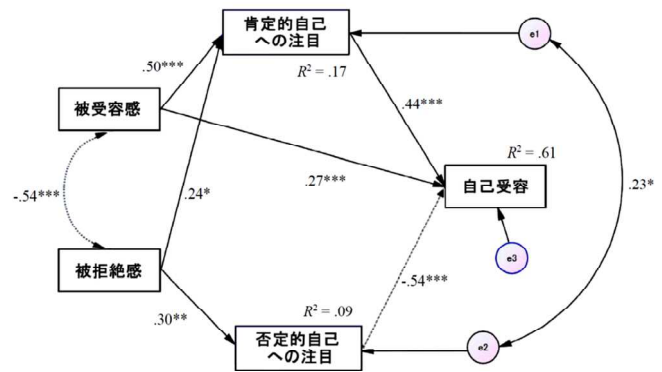
変数と下位尺度	①	②	③	④
被受容感・被拒絶感				
被受容感	①	—		
被拒絶感	②	-.55***	—	
注目する自己側面				
肯定的自己への注目	③	.37***	-.04	—
否定的自己への注目	④	-.14	.30**	.20*
自己受容				
(19項目計)	⑤	.52***	-.40***	.43***

*** *p* < .001, ** *p* < .01, * *p* < .05

共分散構造分析による検討

被受容感・被拒絶感が注目する自己側面に影響し、さらにこれらが自己受容に影響を与えることを想定した共分散構造分析を行った。最終的に採択されたモデル ($\chi^2(2) = 2.040, p = .361, GFI = .992, AGFI = .939, RMSEA = .014, AIC = 28.040$) を Figure 1 に示す。

Figure 1 被受容感・被拒絶感が注目する自己側面を介して自己受容に及ぼす影響



注：実線は正、点線は負の関係を示す。

まず、肯定的自己への注目から自己受容への正の影響と否定的自己への注目から自己受容への負の影響が有意であり、仮説 1 は支持された。次に、被受容感から肯定的自己への注目への正の影響が有意である一方、否定的自己への注目への影響は有意でなく、仮説 2 は一部相違がみられた。また、被拒絶感からは否定的自己への注目への正の影響が有意であるだけでなく、肯定的自己への注目への正の影響も有意であり、仮説と一部異なっていた。最後に、被拒絶感から自己受容への影響は否定的側面への注目によって完全に媒介される一方、被受容感は自己受容に対して直接に、また肯定的側面への注目を介して間接的に影響しており、仮説 4 は支持された。

考察

本研究の結果は、仮説と部分的に異なる点はあるものの、総じて被受容感と被拒絶感という他者との関係性が、自己側面への注目を媒介しつつ自己受容を左右することを示した。肯定的ないし否定的自己への注目は「省察」「反芻」に比べてより変容可能性の高い変数であり、他者との関わりから自己に対する注意の向け方を変容させ、自己受容を高めるアプローチを検討できる可能性を示唆する。ただし、本研究は小規模な横断研究であり、また複数の自己側面への注目による交互作用的な影響は考慮していない。また、被拒絶感が肯定的自己への注目に正の影響を及ぼすという結果は、直接には被受容感と被拒絶感の高い相関に起因するが、その意味については今後慎重な検討が必要であろう。

アルバイトを中心とした他世代との関わりと 大学生のコミュニケーションスキルとの関連

○原田 侑佳 ・ 福岡 欣治

(川崎医療福祉大学 臨床心理学科)

キーワード：アルバイト，大学生，コミュニケーションスキル，他世代との関わり

問題と目的

厚生労働省 (2022) によると、大学卒業後の進路として「就職」は96.0%を占める。他方、採用時に重視する能力について、85.7%の企業がコミュニケーション能力と回答している。しかし、大学生は必ずしも高いコミュニケーションスキルを持っているわけではない。

スキルは獲得すべきものであり、実践とそれに対するフィードバックの機会によってその向上が期待される。では、そのような機会は大学生にとってどこに求めることができるのか。これが本研究の出発点である。

大学生のアルバイト経験

大学生にとって、アルバイトはごく身近なものである。日本学生支援機構 (2022) による学生生活実態調査 (令和2年版) において、4年制大学学生のアルバイト経験率は8割を超えていた。

アルバイトは従事する大学生に様々な影響を与える。小平・西田 (2004) はアルバイト経験を通じた学習を、「人間関係における成長」「仕事に対する認識の高まり」を含む5つに整理している。山本他 (2018) は適度な労働時間を保つことで健康面・学習面への悪影響を抑え、社会性に関連する意識変容を促し、働くための基礎を築くきっかけとなることを示唆している。

アルバイトは具体的なスキルを身につける場でもある。関口 (2010) は、業務で必要とされるスキルが多いほど、社会人として必要な具体的な知識やスキルを身につける機会が増えると述べている。また、澁谷 (2019) は、異なる世代の人たちと働き、コミュニケーションをとる必要性から学ぶことが多いと述べている。

コミュニケーションスキル向上への視点

コミュニケーションスキルの定義や内容に関する議論は多岐にわたるが、スキルの階層構造を仮定する藤本・大坊 (2007) は、自己統制を基盤に表現力と解読力を「基本スキル」とし、その先にある「対人スキル」(自己主張、他者受容、関係調整) と合わせてコミュニケーションスキルとした。そもそも、コミュニケーションはメッセージ (情報) の交換過程であり、送り手による記号化と受け手による解読が繰り返される。畑野 (2010) は Bluner (1969) をふまえてコミュニケーションの根底に意図の伝達と理解があるとし、意図抑制を含めてそれぞれへの自信の程度を測定する尺度を開発している。

コミュニケーションスキルの向上と関連する要因についても様々な知見があるが、基盤となるのは他者との交流である。たとえば白岩他 (2021) は高齢者との出会いの頻度が高い群は「言葉に出せない気持ちを聞くスキル」が有意に高かったと述べている。また、権他 (2018) では世代間交流活動に参加した学生の84.4%が「色々な人との接し方やコミュニケーション力が高まった」と回答したことを報告している。なお、倉元・大坊 (2012) は藤本・大坊 (2007) のスキル尺度 ENDCOREs の因子構造の検討をふまえて、就職活動で社会と触れ合うようになることやクラブやアルバイト先で責任ある立場を任されるなどの経験を通じてスキルを獲得していくのではないかと述べている。

本研究の視点と目的

以上を踏まえ、本研究ではアルバイトにおいて他世代や価値観の異なる他者と関わる機会がどの程度あるかによって、コミュニケーションスキルが左右されると考える。大学生を対象とした質問紙調査により、アルバイト経験とそこでの他世代を含む交流がコミュニケーションスキルに与える影響について検討する。

方法

参加者

大学生90名を対象とし、回答に同意した86名から回答不備12名等を除外し、71名を分析対象とした (男子18・女子52・その他1; 2年35・3年34・4年2)。

主な測定内容

コミュニケーションスキル (入学前、現在) 畑野 (2010) による「コミュニケーションに関する自信尺度」の意図伝達と意図抑制、意図理解の3下位尺度から各5項目を抜粋した。入学前の測定用には文末を過去形とし、いずれも7件法でたずねた。

アルバイト経験の有無 「現在アルバイトをしている」「現在はしていないが大学入学後アルバイトをしたことがある」「一度もアルバイトをしたことがない」の3つの選択肢からいずれか1つを選択してもらった。

最も長期間行ったアルバイト アルバイト経験のある人に、最も長期間行ったアルバイトの継続期間、週当たりの勤務時間、職種を尋ねた。

アルバイトの目的 西・柳澤 (2010) を参考に4項

目(「生活費や学費を稼ぐため」「娯楽・交際費を稼ぐため」「社会勉強をするため」「友人や異性など人との出会いのため」)を作成し、6段階で評定を求めた。

アルバイト先で指導的立場に立った経験 独自に3項目(「リーダーなど他のスタッフに指示することが求められる立場」「他の複数のスタッフのまとめ役」「自分よりも経験の浅いスタッフに仕事を教える立場」)を作成し、頻度を5段階で回答してもらった。

アルバイト先での他者との関わり 世代別の人たちと関わる機会を尋ねる5項目(「自分よりも年齢が下」「自分と同じ、またはごく近い年齢」「自分よりも少し上(おおよそ20~30代)」「自分よりもかなり上(おおよそ40~50代)」「自分よりもずっと上(おおよそ60代以上)」)を独自に作成し、「客・利用者」「スタッフ」の別に、各々の頻度について5件法で回答を求めた。

アルバイト先以外での他者との関わり サークルやボランティア、地域の人との交流などアルバイト先以外での他世代とのかかわりの程度について、アルバイト先での関わりと同じ5項目に回答してもらった。

手続き

2023年10月、心理学関係科目の開講教室において、授業に先立って実施した。無記名であること、回答しないことによる不利益はないこと、結果は研究目的のみ使用すること等を説明した。調査は総じて、著者の所属学科の定める倫理指針に沿って実施された。

結果

アルバイト経験

回答者71名中のアルバイト経験者は63名(うち現在就業中55名)であった。最も長期間行ったアルバイトは、継続期間2年以内・勤務時間週15時間以内が全体の76.2%であり、職種は「店員」(飲食店44.4%、その他25.4%)が多数であった。

コミュニケーションスキルとアルバイト経験の関連

入学前および現在のコミュニケーションスキルについて下位尺度および全体での信頼性が十分高い($\alpha > .80$)ことを確認のうえ、アルバイト経験との関連を検討した。アルバイト経験の有無(t検定)、職種(飲食店店員・飲食店以外店員・その他;1要因分散分析)とも有意な関連はなかった。継続期間と週あたり勤務時間との相関係数は、入学前意図理解で有意傾向の正の相関($r = .22, p < .10$)がみられたのみであった。

コミュニケーションスキルと他者との関わりとの関連

他者との関わりについての5項目に一貫した関連性がなく集約が困難であることを確認のうえ、項目毎に、コミュニケーションスキルとの相関係数を算出した(Table 1; スペースの都合上スキルの合計点のみ)。有意な相関は一部であったが、総じて、アルバイト先で

のスタッフとの関わりは入学前と現在のスキルの両方、アルバイト先での客・利用者との関わりは相対的に入学前のスキルと有意な正の関連がみられた。これに対してアルバイト先以外での他者との関わりはコミュニケーションスキルと関連していなかった。

Table 1 スキルと他者との関わりとの関連

スキル \ 関わり	年下	同い年	少し上	かなり上	ずっと上
スタッフとの関わり (N=63)					
入学前スキル全体	.13	.17	.26 *	.09	-.06
現在スキル全体	-.06	.06	.32 **	-.03	-.06
客・利用者との関わり (N=63)					
入学前スキル全体	.13	.46 ***	.34 ***	.35 **	.25 *
現在スキル全体	.24 †	.30 *	.10	.14	.07
アルバイト先以外での関わり (N=71)					
入学前スキル全体	.03	.04	.01	.19	.09
現在スキル全体	.13	.00	-.05	.16	.16

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

コミュニケーションスキルとアルバイトの目的および指導的立場との関連

アルバイトの目的(各項目)、アルバイト先で指導的立場に立った経験(3項目計; $\alpha = .82$)とコミュニケーションスキルの相関係数を算出した(Table 2; スペースの都合上スキルの合計点のみ)。生活費や学費を目的とする人では入学前および現在の、社会勉強を目的とする人では現在のスキルが高い傾向が認められた。

Table 2 スキルとアルバイト目的、指導的立場の関連

変数	アルバイトの目的				指導的立場(合計)
	生活費や学費	娯楽・交際費	社会勉強	出会い	
入学前スキル全体	.25 *	.11	.19	.09	.07
現在スキル全体	.23 †	-.06	.26 *	.06	.12

* $p < .05$, † $p < .10$

考察

小規模な横断研究とはいえ、本研究ではコミュニケーションスキルとアルバイト経験の質との関連がいくつか見いだされた。顕著な関連性とは言えないが、入学前のコミュニケーションスキルが高い人はアルバイトを長期間・長時間行い、客・利用者との関わりが多い傾向にある。ただし現在のコミュニケーションスキルもアルバイト先のスタッフとの関わりと関連しており、また社会勉強を目的とする場合にスキルが高い傾向が認められた。これらはコミュニケーションスキルの向上にアルバイト経験が寄与する可能性を示唆する。ただし、本研究の結果は「他世代」との関わりによる意義を明瞭に示すものではない。コミュニケーションへの「自信」が指標であり実際のスキルの発揮や向上を確認できていない点も含め、種々の検討課題がある。

大学生における進路選択自己効力感とキャリア成熟の関連

○藤原 顕慈 ・ 福岡 欣治

(川崎医療福祉大学 臨床心理学科)

キーワード：大学生，進路選択自己効力感，職業キャリアレディネス，人生キャリアレディネス

問題と目的

青年期はキャリア発達における重要な時期である。キャリアとは、「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見だしていき連なりや積み重ね」（中央教育審議会、2011）であるとされる。Super（1957）は生涯にわたりキャリアを通して自己実現していくと考え、青年期は試行錯誤を伴いつつ職業が選択されていく「探索」の段階であるとしている。

しかし、大学生にとって卒業後の進路を定め、それを実現することは容易ではない。卒業後の進路を決めていない状態は「進路未決定」と呼ばれる（若松、2001）。大学卒業生の進路未決定は大きな社会問題である。文部科学省（2022）の学校基本調査によると、令和4年度3月時点での大学卒業生における就職率は74.5%である。なお、最終的に進路を定め卒業する学生であっても、その過程では一時的にせよ未決定状態を経験することになるため、進路未決定は多くの大学生にとって身近な現象である（渡辺、2018）。

進路ないし職業未決定に対する理論的アプローチにはいくつかあるが、代表的なものに進路選択自己効力感とキャリア成熟がある。進路選択自己効力感とは、自己効力感（Bandura, 1977）の概念を進路選択に適用したものである。Taylor & Betz（1983）は、進路を選択・決定する過程で必要な行動に対する遂行可能感を指す概念として「進路選択に対する自己効力感」の概念を提唱し、測定尺度（Career Decision-Making Self-Efficacy Scale : CDMSE）を開発した。この尺度を用いた研究は多く、職業未決定・進路不決断の抑制に関与するという指摘がなされている（三宅、2005）。なお、CDMSEはCrites（1978）の挙げる進路選択能力の5領域をカバーするように作成されているが、因子分析ではこれに対応する構造はしばしば抽出されず、進路選択行動全般についての自己効力感を測定するとの見解がある。

キャリア成熟（career maturity）は、Super（1957）が仕事の世界に入る前段階における内的成熟をあらわす概念として提唱された。Crites（1965）はSuperの概念を体系化し、進路選択の「一貫性」「現実性」「遂行能力」「態度」の4因子モデルを提示した。キャリア成熟はキャリアガイダンス・カウンセリング（キャリア教

育・進路指導）における重要概念として位置づけられ（坂柳、2019）、その実践との関連から測定のアプローチに焦点が当てられてきた（坂柳、2019）。日本では坂柳（1996）による「関心性」「自律性」「計画性」からなる尺度がよく使われている。なお、坂柳（1991）はキャリア概念の拡がりに対応して「職業」だけでなく「人生・生涯」を含めた測定法が要請されているとし、坂柳（1996）では両者を視野に入れた尺度を作成している。

進路選択自己効力感とキャリア成熟は、概念の出自は異なるが、ともに具体的な進路選択の前提ないし基盤になり得るものとして提案され、研究が展開されてきた。そこで、両者の関連性を検討した研究もいくつかおこなわれている。たとえば浦上（1993）は進路選択自己効力感が具体的な選択への取り組みを通してキャリア成熟に影響を与えると仮定し、高校2年生を対象に両者の変化と相互関係を検討している。長岡・松井（1999）は大学1～4年生の横断調査で学年毎に両者の関係を分析している。また、長岡他（2001）は教育実習前後の質問紙調査から、実習前の進路選択自己効力感がキャリア成熟を介して実習後のキャリア成熟を高めるとしている。そして清水・牛尾（2018）や北村（2020）は短大生を対象に両者の密接な関係を報告している。

ただし、大学生の進路選択自己効力感とキャリア成熟との関連という問題意識からこれらの先行研究をみた場合、男性回答者が極端に少ないこと、高校生や短大生が調査対象あるいは測定尺度が大学生用に開発されたものでないこと等の限界を有している。短期大学と4年制大学では修学年限に違いがあり学修の深度や専門性も同じではない。そこで本研究では、キャリア成熟について職業面と人生面の両方を視野に入れつつ、男性回答者の比率を相対的により大きくし、大学生用に開発された尺度を用いて進路選択自己効力感とキャリア成熟との関連性について検討することとした。

方法

参加者

4年制X大学（医療福祉系）の2年生以上の学生84名（30歳未満、職業経験なし）を対象に調査を実施し、75名の有効回答を得た（男性24・女性51、2年生47・3年生27・4年生1、平均20.01歳、SD=0.99）。

主な測定内容

キャリア成熟 坂柳 (2019) の短縮版尺度を用いた。職業キャリアレディネスと人生キャリアレディネス、それぞれ「関心性」「自律性」「計画性」各 3 項目、総計 18 項目からなる。回答は 5 件法とした。

進路選択自己効力感 北村 (2020) の尺度から項目を抜粋して用いた。CDMSE の多次元性をふまえ、「適職選択」「就職準備」「困難克服」の 3 下位尺度からなる。本研究では各 5 項目を抜粋し、5 件法で調査した。

卒業後の希望進路 「就職」「進学」「決められない」「その他」から 1 つを選択するよう求めた。

手続き

2023 年 9 月末～10 月初旬、心理学関係 2 科目の開講教室において、それぞれ授業に先立って実施した。無記名であること、回答しないことによる不利益はないこと、結果は研究目的でのみ使用すること等を説明し、調査票内には回答への同意欄を設けた。調査は総じて著者所属学科の定める倫理指針に沿って実施された。

結果

尺度の信頼性と記述統計

職業および人生キャリアレディネスの 3 下位尺度（関心性、自律性、計画性）、進路選択自己効力感の 3 下位尺度（適職選択、就職準備、困難克服）のそれぞれについて Cronbach の α 係数を算出した。その結果、進路選択自己効力の「困難克服」のみ 0.6 であり、他はいずれも 0.7 以上の値が得られた。一部やや低いものの基本的な信頼性が確保されていると判断し、それぞれ項目の単純加算により得点化した。

尺度得点の男女差・学年差・希望進路による差異

各変数における下位尺度の得点が個人属性によって異なっていないかどうかを検討するため、回答者の性・学年・卒業後の予定進路による差異の有無を検討した。性別および学年（2 年生／3・4 年生）の t 検定で有意なものはない。他方、卒業後の希望進路について「進学」「就職」「決められない（未決断）」の 3 水準による 1 要因分散分析をおこなったところ、職業選択自己効力感の 3 下位尺度すべてと職業キャリアレディネスの「関心性」で有意な、また後者の「計画性」「自律性」で 10%水準の有意傾向による要因の効果がみられた。Tukey の HSD 法による多重比較によれば、「未決断」群が他 2 群よりも有意に低い得点であった。なお、人生キャリアレディネスでは、いずれの下位尺度も要因の効果は有意ではなかった（以上 Table 1）。

進路選択自己効力感とキャリア成熟の相関関係

尺度間の関連性をピアソンの積率相関係数により検討した。その結果、すべての変数間に有意な正の相関が認められ、かつそのほとんどの値は 0.50 を上回って

いた (Table 2)。

Table 1 卒業後の希望進路別に見た尺度得点

変数	就職 (N=33)		進学 (N=32)		未決断 (N=10)		F	p	η^2
	平均	SD	平均	SD	平均	SD			
職業キャリアレディネス									
関心性	10.73	2.38	11.47	2.27	8.60	2.50	5.69	.005	0.14
自律性	10.64	2.53	11.50	2.31	9.30	3.30	2.99	.057	0.08
計画性	9.03	2.86	10.34	2.82	8.10	2.92	3.05	.053	0.08
人生キャリアレディネス									
関心性	10.79	2.91	11.13	2.55	9.90	3.67	0.70	.502	0.02
自律性	11.30	2.66	11.44	2.34	10.00	2.94	1.25	.291	0.03
計画性	9.45	3.00	10.13	2.96	9.50	2.88	0.45	.637	0.01
進路選択自己効力感									
職業選択	16.06	4.40	18.00	3.55	13.80	4.24	4.63	.013	0.11
就職準備	17.36	3.94	19.66	2.74	15.70	4.72	5.92	.004	0.14
困難克服	18.36	2.70	18.91	2.90	15.80	3.99	4.19	.019	0.10

Table 2 変数間の相関関係（ピアソンの積率相関係数）

変数	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	
職業キャリアレディネス									
関心性	①	—							
自律性	②	.70	—						
計画性	③	.73	.76	—					
人生キャリアレディネス									
関心性	④	.73	.67	.56	—				
自律性	⑤	.62	.76	.58	.84	—			
計画性	⑥	.65	.76	.81	.76	.81	—		
進路選択自己効力感									
職業選択	⑦	.59	.73	.70	.61	.64	.69	—	
就職準備	⑧	.65	.65	.69	.54	.52	.70	.70	
困難克服	⑨	.60	.52	.56	.47	.46	.55	.50	.61

いずれも $p < .01$

考察

進路選択自己効力感とキャリア成熟の間には、総じて強い正の相関が認められた。先行研究に沿って考えれば、これは高い進路選択自己効力感をもつことによってキャリア成熟が促されることを示唆する。本研究は 4 年制大学の男女を対象とし、また職業だけでなく人生キャリアレディネスにも従来の知見を拡張するものである。なお、本研究で見いだされた相関は、北村 (2020) をはじめとする先行研究よりも高い。卒業後の希望進路により職業キャリアレディネスと人生キャリアレディネスで異なる結果が得られていることから、指標としての一定の弁別性は確保されていると思われるが、本研究はごく小規模な横断研究であるとともに、医療福祉系大学の学生を対象としており進学希望者も多い。本研究の結果が就学年数の長さや学修の専門性の高さによるのかサンプルの特徴によるのか等、知見の一般性を高めるための検討の継続が必要である。

青年期における過去の挫折の捉え方と自己肯定感の関連

○馬越 亮弥 ・ 福岡 欣治

(川崎医療福祉大学 臨床心理学科)

キーワード：挫折体験，自己肯定感，ポジティブな捉え方

問題と目的

部活で思うような結果を残すことができなかつたり、必死に勉強したが志望校に合格できなかったというような経験は、一般に「挫折」と呼ばれる。挫折は目指してきた重要な結果が得られないというつらい経験であり、大きなストレス経験でもある。挫折は青年期においてしばしば経験されるものであるが、アイデンティティ形成や自己発見の時期でもある青年期にとって、発達的にも大きな意味を持つと思われる。

青年期の挫折とその影響に関する先行研究

青年期における挫折の捉え方について、大学生を対象にこれまでいくつかの研究が行われている。

たとえば神原 (2009) は、記述式の調査から、挫折が失敗よりも成長へとつながるポジティブな意味づけを含むものとして捉えられることを指摘している。また量的調査から、挫折を回復しうる事柄、人生の転機あるいは成長の機会として捉える挫折観をもつ人ほど自己成長感も高いことを報告している。

宅 (2010) は、ストレス体験への主観的な意味づけがその後の自己成長感を導くと考え、「ポジティブな側面への焦点づけ」の下位尺度を含む「ストレスに対する意味の付与」尺度を作成した。宅 (2010) はこれを体験から現在に至るまでの期間を通じてどの程度おこなっているか尋ね、意味づけがストレスに起因する自己成長感と関連することを報告している。

姜・清沢 (2017) は、「挫折経験の捉え方」と「挫折経験の影響」に関する尺度をそれぞれ作成した。そして、挫折経験を「ダメージ」あるいは「意欲喪失」をもたらすものと捉える人は「自己脆弱感」をもちやすく、「自己成長」をもたらすと捉える人は、「対人配慮」とともに「苦境耐性」を感じやすいことを報告している。

自己肯定感とその重要性

挫折体験に関する先行研究からは、その体験をポジティブに捉えることができるかどうかによって、その後の成長感が左右され、結果としてその人の自己に対する捉え方も影響を受けることが示唆される。

自己に対する捉え方としてよく知られている概念に、自尊感情 (self-esteem) がある。Rosenberg (1965) は自己を評価する際のあり方として「とても良い (very good)」と「これでよい (good enough)」の側面を区別

し、後者にもとづくものが自尊感情であるとした。しかし、この尺度は他者に対する優越性や完全性の側面が排除されているわけではない (中間, 2016)。

田中 (2005) は自尊感情と区別される肯定的意識として「自己肯定感」を位置づけている。田中によれば自己肯定感とは、「自己に対して肯定的で、好ましく思うような態度や感情」であり、他者との比較による優越性や自己の尊厳・尊敬といった側面を前提としない。姜・清沢 (2017) の挫折経験の影響に関する尺度における「自己脆弱感」と対極にあると考えられる概念である。なお、古木・森田 (2009) は、挫折を経験した大学生に半構造化面接を実施し、直後には<<自分を信じられない状態>>になるものの、その後<<楽観的態度>>または<<問題の切り離し>>に移行し、いくつかの段階を経て最終的に受容の段階に至るとしている。これらは自己肯定に向かうプロセスとして考えることができる。

本研究の視点と目的

本研究の目的は、過去の挫折体験をポジティブに捉えることが、現在の自己肯定感と関連するかどうかを検討することである。ただし、神原 (2009) によれば挫折を経験したことがないとする回答者が一定程度みられることから、堀田 (2016) に準じて「もっともつらかった出来事」を回答の対象に含める。また、ポジティブに捉えることができるかどうかは時系列に沿って変化する可能性があると考え、出来事の体験当時の捉え方と現在の捉え方を区別して測定する。その他、神原 (2009) の挫折観尺度も併せて使用し、先行研究との対比による考察も試みる。

方法

参加者

大学生 109 名を対象とし、同意の得られた 97 名のうち不備のなかった計 87 名を分析対象とした (男 21・女 66)。平均年齢は 19.63 歳、SD = 0.93 であった。

主な測定内容

挫折観 神原 (2009) と同じく、「頻度」(よくある)、「回復」(回復はすぐにできる)、「成長」(経験することで、精神的に成長したり強くなったりする)、「転機」(今後の自分の人生を左右する)の各々について自分に当てはまるかを尋ねた。神原 (2009) は 4 件法である

が、本研究では情報をより多く得るため5件法とした。

過去の挫折体験またはつらかった出来事 堀田 (2016) に基づき、中学校に入学してから現在までの間に経験した一番大きな挫折体験を、「学業」「人間関係」「継続してきたこと」「その他」のいずれかで回答してもらった。挫折の経験がないという場合は、「最もつらかったと思う出来事」について同様に選択させた。またこの体験（出来事）について、体験当時に感じた「重要性」「つらさ」をそれぞれ5段階で回答させた。

体験／出来事のポジティブな捉え方 宅 (2010) の「ストレス体験に対する意味の付与」尺度から、「ポジティブな側面への焦点づけ」の5項目を抜粋し、挫折体験ないしもっともつらかった出来事の当時と現在について、自分に当てはまる程度を回答してもらった。回答方法は、当時と現在いずれも4件法とした。

自己肯定感 田中 (2017) の自己肯定感尺度 ver.2 を使用し、現在の自分の状態にあてはまるかどうかを尋ねた。「私は、自分のことを大切に感じる」などの8項目、4件法の尺度である。

手続き

2023年10月下旬、心理学関係2科目の開講教室において、授業に先立って実施した。無記名であること、回答しないことによる不利益はないこと、結果は研究目的でのみ使用すること等を説明した。調査は著者の所属学科の定める倫理指針に沿って実施され、特に、「現在の年齢が30歳超」「約1ヶ月以内にとってもつらい体験をした」「精神的な不調で通院や服薬をしている」「つらい体験を思い出すことで、一時的にせよ心身が不調になることを懸念する」のいずれかに該当する場合は回答を控え、協力に不同意とするよう依頼した。

結果

回答された体験／出来事の種類

挫折体験ないしもっともつらかった出来事を回答した人数とその内容を Table 1 に示す。挫折体験があると回答した人とそうでない人はほぼ同数であり、体験の内容はいずれも学業・人間関係・継続してきたことに分かれていた。

Table 1 挫折体験ないし最もつらかった出来事

体験の種類 (領域)	挫折		つらかったこと	
	人数	%	人数	%
学業 (受験や学校のテストなど)	11	26.8	13	28.3
人間関係 (恋愛や友人関係など)	18	43.9	18	39.1
継続してきたこと (スポーツ、部活動、習い事など)	11	26.8	15	32.6
その他	1	2.4	0	0.0
	41	100	46	100

挫折体験またはつらかった出来事と自己肯定感の相関

当時および現在でのポジティブな捉え方、ならびに自己肯定感の信頼性が十分に高い ($\alpha > .80$) ことを確認した上で、体験／出来事の「重要性」「つらさ」を含めた変数間の相関係数を算出した (Table 2)。なお、挫折体験について回答したか最もつらかった出来事について回答したかを統制した偏相関も検討したが、結果は同様であったためここでは単相関係数を示す。当時と現在のポジティブな捉え方がいずれも現在の自己肯定感と関連していた。なお、体験／出来事的重要性やつらさは当時のポジティブな捉え方と負の関連をもつ一方、現在の捉え方や自己肯定感とは関連がなかった。

Table 1 体験／出来事の捉え方と自己肯定感の相関

変数 (尺度)	①	②	③	④	
重要性	①	1			
つらさ	②	.697 ***	1		
ポジティブな捉え方 (当時)	③	-.186 †	-.327 **	1	
ポジティブな捉え方 (現在)	④	.115	-.027	.595 ***	1
自己肯定感	⑤	-.082	-.133	.307 **	.310 **

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

挫折観と自己肯定感の関連

挫折観4項目への回答と自己肯定感の相関関係を検討した。挫折を「成長の機会」とみなしている人は、回復が容易であると考えている人とともに、自己肯定感が高いことが示された。

Table 2 挫折観と自己肯定感の相関

種類	内容	自己肯定感
頻度	挫折とはよくあることだ	-.098
回復	挫折からの回復は、すぐにできる	.214 *
成長	挫折を経験することで、精神的に成長したり強くなったりする	.282 **
転機	挫折とは、今後の人生を左右するものだ	-.119

** $p < .01$, * $p < .05$

考察

本研究の分析結果は、挫折体験であれ（本人が挫折とはみなさない）最もつらかった出来事であれ、その体験／出来事をポジティブに捉えることができるかどうか現在の自己肯定感に寄与することを示唆する。従来、挫折体験はその後の成長と関連づけられ、本研究でも挫折を成長の機会と捉える人は自己肯定感が高かった。本研究はそこに自己肯定感との関連という新たな知見を付け加えるものである。ただし、本研究は小規模であり、体験の種類による違いは検討していない。また、ポジティブな捉え方と自己肯定感の因果的関係について明確な主張はできないという限界がある。

不安の高い大学生は占いを信じやすいのか？

○宗平 涼平 ・ 福岡 欣治

(川崎医療福祉大学 臨床心理学科)

キーワード：占い、占いの主観的な信憑性、占いの機能認知、特性不安

問題と目的

はじめに——日常生活と占い

現代の日本では、占い情報を容易に取得できる。テレビの情報番組では、しばしば“今日の運勢”といったものが紹介される。書店にはしばしば占いコーナーが設けられ、インターネット上にも占い情報はあふれている。手相やおみくじなど昔からある占いでなく、星座占いや血液型占いや心理占いなど、身近な占いは事欠かない。占いは世間一般に広く知られ、私たちの生活に「占い」は入り込んでいる。いわば占いと共存していると言っても過言ではない。

占いの心理的機能

心理学ないし科学の文脈では、占いは疑似科学として扱われる。しかし、客観的真実であるか否かとは別に、人は占いを受容している。占いが維持されるメカニズムとして、福田(2007)は、占いを信用する者は、占い情報を取得した後、実生活に起こりうることを予期し、起こったことを占い情報に当てはまるように解釈するという。これによって、占いが外れたという認識は抑制され、占いの信用度は高まる。

また、占い情報の取得は、占いを信じていない場合でも起こりうる(福田,2007)。上田(2016)は、占い情報への関心や占いへの需要は、占い自体の信憑性や信頼度とは密接に関連していないとしている。またNHK放送文化研究所(2015)を引用し「占いは信じないが占い情報は受容する」という傾向の進行を指摘している。

占いには客観的な信憑性とは異なる心理的機能がある。福田(2007)は男女6名への半構造化面接の結果をふまえて、占いの役割期待と機能として、「娯楽性」「コミュニケーション・ツール」「性格把握」「精神安定」「行動指針」「気休め」を挙げている。

占い情報の取得と「不安」

先に述べた福田(2007)の指摘する占いの機能は、占い情報を取得する要因の多様性を表す。特に中心的と考えられるのは、日常生活や人間関係に関するものに答えを導くための「自己に対する不確定性の低減」である。福田(2007)は、自身に何らかの不安対象がある際に占いは利用され、未来に対する不安を低減すると述べている。この考え方からすれば、不安な人は占いを求め、それを受け入れようとする。

不安と占い利用ないし関連する現象との関係を扱っ

た先行研究に、田丸・今井(1989)や松井(2001)がある。田丸・今井(1989)では、高校生334名を対象に質問紙調査を行い、占い指向の因子と不安の因子の間で比較的多くの相関が見られたことを報告している。そして、占いをエンターテイメントとして楽しむ人がいる一方で、進学、就職や自身の将来について不安に思う者が未来を予言する占いに惹き付けられるのではないかと述べている。また、松井(2001)は1026人の回答データを分析し、性格・欲求と不思議現象信奉度の偏相関を算出している。そして、20代～30代の若い人々が占いを含む不思議現象を信じるのは自身の不安を解消する欲求に基づいていると述べている。

本研究の視点と目的——特性不安への注目

福田(2007)や田丸・今井(1989)によれば、占いは自身の不安を払拭するために利用されるという側面がある。しかし、これらの研究では、標準的な尺度で不安を測定しているわけではない。不思議現象の信奉に関する尺度とBig Fiveの相関を算出している小城他(2013)も、前者の低位尺度である「占い・呪術嗜好性」と不安を感じやすいパーソナリティ特性である神経症傾向との間に正の相関を報告しているが、不安を直接には測定しておらず、占いに特化した研究でもない。

他方、不安についての標準的な尺度としてよく知られているものに「状態・特性不安尺度(State-Trait Anxiety Inventory: STAI)」がある。このうち、特性不安は比較的安定した個人差である(古賀,2005)。特性不安と占いと関連を検討している日本国内の研究は多くないが(例外として丹野,2012)、海外ではparanormal beliefとの有意な正の関連が報告されている(例えばRoe & Bell, 2016)。本研究では、STAIの中の特性不安尺度を用いて、特性不安の高低と占いの主観的な信憑性および占いの機能認知、占いの認知度との関連を検討する。

方法

参加者

大学生86名を対象に調査を実施し、一部の項目に記入不備のあった回答を除き73名の有効回答を得た(男性17名・女性56名、1年生21名・2年生50名・3年生2名、平均年齢19.88歳(SD=5.06))。

主な測定内容

占いの認知 深田・落合(2018)と同じ6種類の占

い(1.星座, 2.血液型, 3.誕生月, 4.手相, 5.タロットカード, 6.おみくじ)を提示し, またこれら以外に知っているものがあれば「その他」として, 知っている度合いを5件法でたずねた。

最もよく利用する占いの種類と利用頻度 前項で使用したのと同じ占いから最もよく利用するものを1つ選び, またその利用頻度を7件法で回答してもらった。

占い全般の主観的な信憑性 「信憑性」の類語や「信じる度合い」を反映すると考えられる日常用語から独自に作成した5項目(「占いは当たると思う」「占いは頼りになる」等)を用い, 7件法で回答を求めた。

占い全般の機能認知 福田(2007)を参考に深田・落合(2018)が開発した尺度を元に, 「娯楽」「コミュニケーション活性化」「性格把握」「精神安定」「行動指標」の5機能に各3項目を作成し, 7件法で回答を求めた。

特性不安 岸本・寺崎(1986)による日本語版 STAI の特性不安尺度を使用した(20項目, 4件法)。

実施手続き

2023年10月, 心理学関係科目の開講教室において, 授業に先立って実施した。無記名であること, 回答しないことによる不利益はないこと, 結果は研究目的でのみ使用すること等を説明した。調査は総じて, 著者の所属学科の定める倫理指針に沿って実施された。

結果

占いの利用状況

占いの認知について, 最も認知度が低かったタロットカード占いを除く5つは2.90~3.19の範囲内であり, 「3.ある程度は知っている」に近いレベルであった。なお, 占いをまったく知らないという人は皆無であった。最もよく利用する占いとして選択されたのは「星座占い」であり, 以下「おみくじ」「誕生月」「血液型」と続いていた。最もよく利用する場合の利用頻度は占いの種類によってばらつきがみられた(以上 Table 1)。

Table 1 占いの認知度, 最もよく利用する占いとその利用頻度に関する記述統計

占いの種類	認知度		最も利用		利用頻度	
	平均	SD	人数	%	平均	SD
1) 星座占い	3.00	0.78	33	45.2	2.88	1.54
2) 血液型占い	3.05	0.78	9	12.3	3.33	1.50
3) 誕生月占い	2.97	0.82	10	13.7	1.80	1.23
4) 手相占い	2.90	0.87	3	4.1	1.67	0.58
5) タロットカード占い	2.41	1.04	2	2.7	3.50	0.71
6) おみくじによる占い	3.19	0.83	15	20.5	3.00	1.13

注1. 最もよく利用する占いで「その他」を選んだ人が1名あった(利用頻度4.0)。

注2. 右端の「利用頻度」は, 最もよく利用するとした人における数値。

占いの主観的な信憑性, 機能認知と特性不安の関係

独自に作成した占いの主観的な信憑性と占いの機能

認知について, それぞれ一定以上の信頼性があることを確認した上で($\alpha > .80$), 特性不安を含む変数間の相関関係を検討した(Table 2)。その結果, 特性不安は占いの主観的な信憑性との間に有意な相関を示さなかった。なお, 占いの主観的な信憑性は, もっともよく利用する占いの利用頻度, および占いの機能認知における「性格把握」「精神安定」「行動指標」機能と有意な正の相関が見いだされた。

Table 2 占いの信憑性, 機能認知と特性不安の相関

変数	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
最もよく利用する占いの利用頻度	①						
占いの主観的な信憑性	②	.34 **					
占い全般の機能認知							
娯楽	③	-.09	.08				
コミュニケーション	④	-.02	.16	.67 ***			
性格把握	⑤	.21	.59 ***	.23	.37 **		
精神安定	⑥	.09	.42 ***	.36 **	.56 ***	.27 *	
行動指標	⑦	.25 *	.71 ***	.14	.32 **	.65 ***	.52 ***
特性不安	⑧	.20	-.15	.25 *	.16	-.07	.17

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

占いの認知度と特性不安の関係

6つの占いの認知度と特性不安との相関関係を検討した(Table 3)。特性不安は多くの占いの認知度と有意ないし有意傾向の正の相関を示した。

Table 3 占いの認知度と特性不安の相関

変数	①	②	③	④	⑤	⑥
星座占い	①					
血液型占い	②	.82 ***				
誕生月占い	③	.89 ***	.81 ***			
手相占い	④	.76 ***	.64 ***	.76 ***		
タロットカード占い	⑤	.48 ***	.44 ***	.49 ***	.58 ***	
おみくじによる占い	⑥	.45 ***	.48 ***	.46 ***	.41 ***	.28 *
特性不安	⑦	.37 **	.42 ***	.32 **	.21 †	.21 †

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

考察

分析の結果, 特性不安は占いの主観的な信憑性との間に有意な相関が見いだされなかった。本研究で用いた主観的な信憑性の指標は独自に作成した項目からなり妥当性があらかじめ確認されていたわけではなく, 解釈には一定の慎重さが必要である。しかし, 機能認知との相関は, これが「自己に対する不確定性の低減」と関連することを示唆する。他方, 特性不安は占いの認知度とは有意に関連していた。そのため, 不安の高い人は占いに興味を持ち, その情報に敏感であって相対的により多くの情報を取得することが考えられる。しかし, そのことによって特性不安自体が低減されるわけではないため, 占いを信じるという意味での主観的な信憑性の高さと結びつきづらいのかもしれない。

自己制御と文化的自己観が炎上の当事者及び当事者周辺に 対する意識に及ぼす影響

○中村 真由 ・ 高尾 堅司

(川崎医療福祉大学大学院) (川崎医療福祉大学医療福祉学部)

キーワード：BAS, BIS, 相互協調的自己観, 相互独立的自己観, バイトテロ

問題・目的

近年、「バイトテロ」がニュースやネットで頻繁に話題に挙がっている。バイトテロは SNS やインターネット上で拡散されることによって炎上を招くことがある。炎上とは、「インターネット上で、常軌を逸した非難・批判・誹謗・中傷などネガティブなコメントの投稿が短期間に集中して繰り返されること… (三浦, 2018, p.184)」と定義されている。炎上はときとして当事者ほか、当事者を取り巻く人々にまで何らかの影響が及ぶことがある。炎上の原因は多様であるがバイトテロはその原因の一つであり、該当企業のイメージの悪化や売り上げの低迷にもつながりうる。

炎上と SNS には密接な繋がりがある。SNS は、コミュニケーションを円滑化するなどのメリットがある一方でデメリットも存在する。たとえば、SNS 上でのトラブルなどはその一例である (総務省, 2018)。SNS 上のトラブルの一つが、バイトテロと言えよう。いわゆる悪ふざけが悪ふざけに留まらず、拡散される結果として過剰な炎上が起こるのである。

炎上は、誹謗中傷する閲覧者がその背景に存在する。SNS の閲覧者側の内的要因のいずれが、SNS 上の過激な発言を減少させるのだろうか。本研究では、その内的要因として自己制御と文化的自己観に焦点を当てる。自己制御には、闘争・逃走系 (BAS) と行動抑制系 (BIS) が挙げられる。自己制御は、自発的に自己の行動を制御しており、動物が苦痛を伴う電気ショック (無条件嫌悪刺激) に反応する際、近くにある適当な目標物を攻撃するといった典型的な運動活性の増大を示すことを「闘争・逃走系」(BAS)、反対にショックと連合した刺激 (条件づけられた嫌悪刺激) にはフリーズ (すくみ) 行動を示すことを「行動抑制系」(BIS) と表す (Gray, 1987 八木訳 1991)。

相互協調的自己観は、自己を周囲の文脈と相互依存して解釈することを表している (Markus & Kitayama, 1991)。また、反対に相互独立的自己観がある。相互独立的自己観は、自己と他者を切り離されたものとみなし、自分独自の属性を高揚させることにより自己評価や精神的健康を高める (黒田・有年・桜井, 2004)。

上記の議論に基づくと、自己制御と相互協調的自己

観が炎上並びに炎上の当事者を取り巻く状況に対する評価を規定することが予想されるが、それぞれの下位尺度はどのような影響を与えるのであろうか。自己制御は、BIS が強いほど炎上の当事者並びに炎上の当事者を取り巻く状況に対する質問項目に負の関連を示すことが考えられる。他方、行動接近系である BAS が強い場合は、炎上の当事者並びに炎上の当事者を取り巻く状況に対して正の関連を示すことが予想される。

一方、相互独立的自己観の下位尺度である個の認識・主張が強いほど、炎上の当事者並びに炎上の当事者を取り巻く状況に対してより批判的に評価することが考えられる。また、相互協調的自己観の下位尺度である評価懸念が強いほど、炎上の当事者並びに炎上の当事者を取り巻く状況に対して過剰に批判的な評価をしないことが予測される。さらに相互独立的自己観の下位尺度である独断性が強いほど、炎上の当事者並びに炎上の当事者を取り巻く状況に対してより批判的に評価するであろう。加えて、相互協調的自己観の下位尺度である他者への親和・順応が強いほど、炎上の当事者並びに炎上の当事者を取り巻く状況に対して過剰に批判的な評価をしないことが考えられる。

本研究では、自己制御と相互協調的自己観、相互独立的自己観の各下位尺度が炎上並びに炎上の当事者を取り巻く状況に対する評価に及ぼす影響について探索的に確認することを目的とした。

方法

実施手続き及び調査対象者

調査対象者は、中国地方に所在するある大学に通う学生で心理学関連科目の受講生であった。有効回答票数は 117 (男: 34, 女: 82, 性別不明: 1) であった。調査者は口頭及び紙面に記載することにより、本調査の趣旨ならびに調査協力に対する同意は自由意思に基づくこと、一旦同意しても途中で回答を中止できること、不同意の場合は何も記入せずに提出するよう指示した。また、調査は無記名で行い、調査結果は研究目的以外で使用しないことを併せて説明した。

質問項目

質問項目の構成は、属性項目、自己制御、文化的自己

観、炎上並びに当事者を取り巻く状況に対する評価であった。属性項目は、年齢と性別（男・女）の項目欄を用意した。自己制御は、安田・佐藤（2002）のBIS/BAS尺度を使用し、「欲しいものがあると、後先考えずに入れようとする」などの計30項目を使用した。文化的自己観は、高田・大本・清家（1996）の相互独立的-相互協調的自己観尺度（改訂版）を使用し、「人から好かれることは自分にとって大切である。」などの計20項目を使用した。

結果と考察

説明変数に相互協調的自己観、相互独立的自己観、BAS、BISを説明変数、炎上並びに当事者を取り巻く状況に対する評価の下位尺度である情緒的反応と認知的反応を目的変数とした重回帰分析を行った。しかし、ほとんどの重回帰モデルは成立せず、相互独立的自己観及び相互協調的自己観、さらに自己制御の2つの下位尺度が目的変数に関連しないことを示唆する結果となった。この結果を受けて、相互協調的自己観と相互独立的自己観の下位尺度が目的変数への効果を相殺した可能性を考慮し、炎上に係る諸変数を目的変数に設定し、両変数の各下位尺度を説明変数に投入した重回帰分析を実施した。

以下、主要な分析結果を示す。相互独立的自己観を構成する個の認識・主張、独断性と相互協調的自己観を構成する他者への親和・順応、評価懸念、さらにBAS、BISを説明変数、「直接の関係者にとって迷惑だ。」を目的変数として投入した重回帰分析を行った（Table 1）。その結果、重決定係数は統計的に有意であり（ $R^2 = .122$, $p < .05$ ）、評価懸念が目的変数を予測していた（評価懸念: $\beta = -.445$, $p < .01$ ）。また、BASについては統計的に有意な傾向が認められた（BAS: $\beta = -.180$, $p < .10$ ）。

相互独立的自己観と相互協調的自己観の各合成変数と自己制御を説明変数とする分析の結果、ほとんどの場合において重決定係数は統計的に有意ではなく、統計的にモデルが成立しなかった。この結果から、文化的自己観は炎上に対する諸変数を予測しないことが考

えられる。ただ、相互独立的自己観と相互協調的自己観を構成する下位尺度を説明変数として投入し探索的に分析を行った結果、評価懸念や独断性など、一部の下位尺度が特定の目的変数を予測することが確認された。この結果は、評価懸念の傾向が強い人ほど周囲の人間からの評価を重視するため、直接の関係者に対する迷惑性の評価が高いことを示唆していること、BASの傾向が強い人ほど直接の関係者が迷惑してしようが自分の快不快によって行動するため、直接の関係者に対して何も感じないのではないかと考え、直接の関係者にかかる迷惑性の評価が低いことを示唆している。

今後は、相互協調的自己観の主たる背景である社会的関係のネットワークが逸脱行動に対する判断を左右する可能性の観点から、一個人としての独自の特徴や成果を軽視することにより炎上に加担しやすいという点に視点を向ける必要もある。

引用文献

- Gray, J. A. (1987). *The psychology of fear and stress* (2nd ed.). London/Cambridge University Press.
 (グレイ, J.A. 八木 欽治 (訳) (1991). ストレスと脳 朝倉書店)
- 黒田 祐二・有年 恵一・桜井 茂男 (2004). 大学生の親友関係における関係性高揚と精神的健康との関係 —— 相互協調的-相互独立的自己観を踏まえた検討 —— 教育心理学研究, 52 (1), 24-32.
- Markus, H. R. & Kitayama, S. (1991). Culture and the Self: Implications for Cognition, Emotion, and Motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 高田 利武・大本 美知恵・清家 美紀 (1996). 相互独立的 —— 相互協調的自己観尺度（改訂版）の作成 —— 奈良大学紀要, (24), 157-173.

謝辞

本調査にご協力下さった回答者の皆さまに、心より感謝申し上げます。

Table 1
「直接の関係者に対する迷惑性」に対する重回帰分析（強制投入法）の結果

説明変数	β	t
個の認識・主張	-.121	-0.916
評価懸念	-.445 **	-3.395
独断性	.044	0.365
他者への親和・順応	.111	0.983
BAS	-.180 †	-1.755
BIS	-.097	-0.787
R^2	.122 *	

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

相談行動の利益とコストの予期が 援助要請行動に及ぼす影響

○篠村 美緒, 進藤 貴子

(川崎医療福祉大学大学院), (川崎医療福祉大学)

キーワード: 援助要請行動, 学生相談機関, 利益とコスト

問題と目的

他者に悩みを相談する選択肢の1つとしてカウンセリングを受けることが挙げられる。内閣府男女共同参画局(2010)は、悩みに対する解決行動の評価について調査した。親きょうだい、親族に相談した、助けを求めたことを「役に立った」と回答した割合は33.7%、友人、知人に相談した、助けを求めたことを「役に立った」と回答した割合は32.0%であった。一方でカウンセラーなど資格をもった専門家に相談したことが「役に立った」と回答した割合は47.9%であり、家族や友人など身近な人より専門家に相談した場合には有益であったと感じる人が多いと言える。

相談行動は、悩みや問題があることを他者に伝え助けを求める援助要請行動の一つである。木村ら(2014)は、大学生の援助要請行動のプロセスとその関連因子について検討している。その中で、援助要請行動を起こす前段階に、援助要請意図はあるものの行動しないという場合が存在する。家族・友人に相談することを考える人は、援助要請意図はあるが行動しない人より、援助要請意図があって行動もする人の方が約2倍多いが、学生相談機関に相談する人は、援助要請意図はあっても、行動する人と行動しない人の割合は同程度であることが明らかになっている。

では、援助要請意図がありながらも援助要請行動を起こさない人と、実際に援助要請行動を起こす人とは、何が違うのであろうか。

援助要請意図がありながらも援助要請行動を起こさない人と、実際に援助要請行動を起こす人との違いについて、木村ら(2014)はカウンセリング利用に対する態度(利用意欲、信頼性、スティグマ耐性)から検討している。一方永井・新井(2007)は、援助要請者は事前に援助要請行動に伴う利益とコストを予測し、援助要請を実行するか、回避するかを決定すると述べている。ここから、援助要請意図があり、援助要請行動を実行に移すかどうかについても、利益とコストの予期から見ていく必要がある。

永井・鈴木(2018)は、大学生の援助要請意図に対する利益とコストの予期の影響について検討している。つ

まり援助要請者は、援助要請行動を実行する(相談に行く)か回避する(相談に行かない)か、両方の場合を想定して、それぞれで得られる利益とかかるコストを予測しているという。そして、援助要請実行の利益と、援助要請回避のコストの予期は「援助に対する欲求と態度」との間に正の相関を示していた。また、援助要請実行のコストと、援助要請回避の利益の予期は、「援助に対する抵抗感の低さ」との間に負の相関関係があることを明らかにしている。援助要請実行の利益や、援助要請回避のコストの予期が高いと援助要請を実行しやすく、援助要請実行のコストや、援助要請回避の利益の予期が高くなることが、援助要請意図はあるものの実行には至らない要因になっていると考えられる。

加えて、永井・新井(2007)は、心理・社会的問題において、ある程度の悩みを抱えており、相談実行の「ポジティブな効果」が予期された場合や、悩みを相談しないことによる「問題の維持」が予期された場合に、相談行動は促進され、一方で「自助努力」のように、自分で何とかしたいという思いがある場合、相談行動は減じることを明らかにしており、利益・コストの予期は相談行動に関与していると言える。

さらに伊藤(2006)は、学生相談機関のイメージと来談意思の関係について検討しており、「役に立つところ」といった有益なイメージは来談意思を高め、一方で、「精神的に弱い人が行くところ」といった不利益イメージ及び不気味イメージは来談意思を低下させていると明らかにしている。この先行研究では、来談意思を検討しているものであり、実際に援助要請行動を起こすかどうかという点については検討していないが、肯定的、否定的イメージといった相談前の予測が、援助要請意図はあるが行動しない人と、援助要請意図があって行動もする人とは異なるのではないかと考えられる。また、後藤・廣岡(2005)は、親は、友人や相談員より、相談することで自分のイメージが悪化すると考えずに相談できる相手であることを明らかにしている。家族や友人に関しても肯定的・否定的な予測が実際に

援助要請行動を起こすかどうかに影響するものであると考えられる。

高野ら(2007)は、実際に学生相談機関を訪れた学生を対象として、学生相談機関への来談の促進要因、阻害要因について自由記述による調査を行っている。学生相談機関への来談の促進要因について、「①問題が深刻になったのでなんとかしたい、②具体的な解決を目指す、③第三者の専門家に相談したい、④他者からの影響、⑤相談機関への親近感、⑥切迫感はないがなんとなく来た」の6つの大カテゴリー、来談の阻害要因としては、「①相談機関に対する不慣れな感じ、②プライバシー保護についての心配、③相談員の対応についての不安、④相談することを否定的にとらえる、⑤相談を利用する際の不便さ」の5つの大カテゴリーを挙げており、実際に学生相談機関を利用した人に対する調査でも利益とコストの内容と近い回答が得られており、援助要請行動の決定に関わることが考えられる。

本研究では、「家族」、「友人」と、「学生相談機関」の3つの援助要請対象を取り上げ、どのような意図で援助要請を実行するのかを相談行動の利益とコストの予測から検討する。悩み事がある時、身の回りの複数のサポート資源をうまく選択し利用することが、大学生のメンタルヘルスの向上に不可欠だからである。仮説は以下の通りである。相談行動によって利益が多く見込まれる場合や、相談行動に関するコストが低い場合の相談相手に対して援助要請を求めやすい。

高野ら(2007)は、学生相談機関の来談の促進要因、阻害要因以外にも学生相談機関利用のいきさつについてもKJ法により分析しており、「①自分が抱えている問題の把握、②問題解決への努力とその難しさ、③専門家からの支援が必要になった、④他者からの勧め・紹介」の4つの大カテゴリーを抽出している。高野ら(2007)の研究は実際に来談している人に対する調査であるため、実際に学生相談機関に繋がる事が出来ていない人の状況は不明である。そこで本研究では、学生相談機関への相談意図のある人を対象として来談のいきさつがどのようなものであれば来談に至るかについて探索的に明らかにすることも目的とする。

方法

参加者

大学生110名(男性45名,女性63名,無回答2名)を分析対象とした。平均年齢は19.61歳(SD=0.69)であった。

質問紙の構成

援助要請行動 大島・久田(2010)の研究で用いられた方法を参考にした。6つの悩みを提示し、もしこのことで悩み、一人で解決できないとしたら、どのくらい相談してみたいか(援助要請意図)、行動するか(援

助要請行動)を(「1: 相談したいと思わない」～「5: 相談したいと思い、相談すると思う」)5件法で友人、家族、学生相談機関それぞれで尋ねた。

利益とコスト 利益とコストの測定には、永井・鈴木(2018)の相談行動の利益・コスト尺度を使用した。相談行動に伴うコストである「秘密漏洩」、「相手への迷惑」、「否定的応答」、相談行動の利益である「関係の深化」、「ポジティブな結果」、相談行動を回避した時のコストである「問題の維持」、相談行動を回避した時の利益である「自助努力による充実感」からなる、7下位尺度28項目であり、5件法で尋ねた。利益とコスト尺度のうち、「問題の維持」と「自助努力による充実感」以外は、相談相手によって利益とコストの予期が異なる項目であるため、相談相手ごとに質問した。

学生相談機関への相談のいきさつ 高野ら(2007)を参考に「学生相談機関に行こう」という思いになる経緯について、全員に自由記述で回答を求めた。

結果

相談相手ごとに、相談行動の利益とコスト7下位尺度得点を説明変数とし、援助要請行動を目的変数として重回帰分析を行なった。この結果、友人、家族、専門家の全ての相談相手において、関係の深化の予測が相談行動に正の影響を与えていた(友人 $R^2=.26, b=0.09, SE=0.17, \beta=.24, t(98)=2.31, p=.023$ 。家族 $R^2=.24, b=0.43, SE=0.16, \beta=.28, t(96)=2.70, p=.008$ 。専門家 $R^2=.26, b=0.49, SE=0.14, \beta=.37, t(88)=3.42, p=.001$)。また、友人が相談相手である時のみ、相談しない場合の問題の維持の予測がと相談行動に正の影響を与えていた($R^2=.26, b=0.47, SE=0.20, \beta=.24, t(98)=2.31, p=.023$)。

学生相談機関を利用するいきさつについての自由記述の有効回答は79件であった。得られた回答は、臨床心理士2名を含む計7名でKJ法により分析した。分析により、解決困難、内容、心理的苦痛の3つの大カテゴリーが得られ、それらが学生相談機関の利用を促す要因になっていることが明らかとなった。

主な引用文献

- 木村 真人・梅垣 佑介・水野 治久(2014). 学生相談機関に対する大学生の援助要請行動のプロセスとその関連因子—抑うつと自殺念慮の問題に焦点をあてて— 教育心理学研究, 62, 173-186.
- 高野 明・吉武 清實・池田 忠義・佐藤 静香・関谷 佳代(2007). 学生相談機関への援助要請行動のプロセスに関する探索的研究, 東北大学高等教育開発推進センター紀要 2, 157-164.

小学生及び中学生のストレスやソーシャルサポートの 状況が登校状態に及ぼす影響

○假谷 奈々美 ・ 齊藤 由美 ・ 澤原 光彦

(川崎医療福祉大学大学院) (川崎医療福祉大学) (川崎医療福祉大学)

キーワード：ストレス、ソーシャルサポート、登校状態

問題・目的

日本財団(2018)の「不登校傾向にある子どもの実態調査」は、約10人に1人が不登校傾向であることを示しており、不登校傾向の児童生徒に対する支援も必要であると考えられる。不登校による影響として佐々木(2009)は、「前段階の発達課題が十分に解決されていないと、本当に先の段階へは進めない」と述べている。つまり、小中学生時代に不登校・不登校傾向を経験することにより、その時期の発達課題が達成できないという問題が生じる可能性が考えられる。渡部(2007)は、思春期の不登校は、外界環境との接触を満足に行うことができない状況をもたらすことによって心理的発達を阻害する可能性が高いことを論じている。文部科学省(2019)の「教育支援センター(適応指導教室)に関する実態調査」によると適応指導教室は、約63%の自治体で設置されており、文部科学省(2022)の「不登校特例校の設置者一覧」によると令和4年現在の不登校特例校は、21校となっている。しかし、様々な取組が行われているにもかかわらず不登校児童生徒数は増え続けている。その理由として、不登校児童生徒が望む支援と実際に行われている支援との間に差異があるのではないかと考えた。望む支援と実際の支援と差異がある場合、支援が児童生徒を傷つけ、状態悪化を招く可能性もあるため、児童生徒視点で個人に合った適切な支援が必要であり、不登校児童生徒が望む支援を明らかにする必要があると考える。そのためには不登校状態の児童生徒が抱えるストレスやサポートの状況を知る必要があると考えた。

本研究では、どのようなストレスやソーシャルサポートが登校状態に影響を与えているのかということ、小中学生はどのようなストレスを抱えており、どのようなソーシャルサポートがあると感じているのかについて明らかにすることを目的とする。菊島(1999)に基づき、登校状態に影響を与えるストレスとしては、小中学生時代共に友人関係が最も高く、小中学生時代共に様々なストレスがあったとしてもソーシャルサポートが高ければ登校状態への影響は少ないという仮説を設定した。

方法

19歳から26歳の大学生93名に質問紙を配布し、有効回答数69名(男性20名、女性48名、無回答1名)を分析対象とした。

調査内容 フェイスシート(年齢、学年、性別)、小中学校時代に抱えていたストレスの発生頻度およびソーシャルサポートの受容の程度について尋ねた。

ストレス尺度 小中学生時代に抱えていたストレスの内容に関し、各4項目、計24項目で尋ねた。山口・石川(2006)の高校生用ストレス尺度、佐藤・矢島(2017)の尺度を用いた。「友人に関するストレス」、「親に関するストレス」、「学業に関するストレス」、「教師に関するストレス」、「部活・集団生活に関するストレス」、「SNSに関するストレス」であり、4件法(1.全然なかった、2.たまにあった、3.時々あった、4.よくあった)で回答を求めた。

ソーシャルサポート尺度 小中学生時代に「父親」、「母親」、「兄弟・姉妹」、「友人」、「学校の先生」、「SNS」からのくらい支えられていると感じていたかを「評価的サポート」、「道具的サポート」、「情緒的サポート」の3つの尺度について、各尺度つき3項目、計9項目で尋ねた。尺度は、片受・大貫(2014)の大学生用ソーシャルサポート尺度を抜粋したものをを用い、4件法(1.絶対違う、2.多分違う、3.多分そうだ、4.きっとそうだ)で回答を求めた。

登校状態 病気や経済的理由を除く各時代の年間欠席日数を6件法(1:0日、2:1日以上3日未満、3:3日以上7日未満、4:7日以上14日未満、5:14日以上、6:30日以上)で回答を求めた。

倫理的配慮 過去のことであるが、ストレスの経験頻度や周囲との関係性について尋ねるため、精神的な苦痛が生じる恐れがある。そのため、回答は任意であること、回答を始めても途中で辞めることができること、回答内容については、個人のデータが特定されないようにし、研究のみに用いることを口頭で伝えるとともに、書面にて同意を得た。

結果

ストレッサー・ソーシャルサポート・登校状態の相関
ソーシャルサポートを高群低群別、小学生、中学生別に Pearson の相関分析を行った。その結果、小学生時代のソーシャルサポートと登校状態には相関がみられた。

ストレッサー尺度項目得点の比較 小学生時代では、準不登校群は、24 名（男性 6 名、女性 17 名、無回答 1 名）、一般群は、45 名（男性 14 名、女性 31 名）であった。これら 2 群と小学生ストレッサー尺度の経験頻度について t 検定を行った結果、教師に関するストレッサーでは、「先生がえこひいきした」という項目 ($t(35)=-2.06, p<05$)、部活・集団生活に関するストレッサーでは、「勉強と部活の両立が厳しかった」($t(66)=2.06, p<05$) という項目で有意差が見られた。中学生時代では、準不登校群は、21 名（男性 6 名、女性 15 名）、一般群は、48 名（男性 14 名、女性 33 名、無回答 1 名）であった。これら 2 群と中学生ストレッサー尺度の経験頻度について t 検定を行った。学業に関するストレッサーでは、「試験や成績のことが気になった」($t(49)=2.33, p<05$)、SNS に関するストレッサーでは、「SNS で鬱（うつ）っぽい投稿や、病んでいるという投稿をみた」で有意差が見られた($t(28)=-2.06, p<05$)。

ソーシャルサポート尺度項目得点の比較 ソーシャルサポート尺度の各項目の比較を各時代別に行った。小学生時代では、評価的サポートの「あなたの努力や心がけを評価してくれる」という項目のうち 父親の評価的サポート ($t(67)=3.15, p<01$) と兄弟・姉妹の評価的サポート ($t(67)=2.68, p<01$) で有意差が見られた。道具的サポートでは、「問題解決方法についてアドバイスしてくれる」という項目のうち父親のサポート ($t(67)=2.95, p<01$) 兄弟・姉妹のサポート ($t(67)=2.04, p<05$)、「どうしたらよいかを助言してくれる」という項目のうち、父親のサポート ($t(67)=2.55, p<05$) で有意差が見られた。情緒的サポートでは、「あなたが元気がないと、すぐ気づかってくれる」という項目のうち、父親のサポート($t(67)=2.32, p<05$)、「ふだんから、あなたの気持ちをよく理解してくれる」という項目のうち、父親のサポート ($t(67)=3.27, p<05$) で有意差が見られた。中学生時代では評価的サポートの「あなたの努力や心がけを評価してくれる」という項目のうち、兄弟・姉妹のサポート ($t(67)=2.05, p<05$)「あなたを信頼してくれる」という項目のうち、父親のサポート ($t(67)=2.32, p<05$)、兄弟・姉妹によるサポート ($t(67)=2.95, p<01$)、友人によるサポート ($t(67)=2.54, p<05$) で有意差が見られた。情緒的サポートでは、「ふだんから、あなたの気持ちをよく理解してくれる」という項目のうち、父親のサポート ($t(67)=2.55, p<01$) で有意差が見られた。

考察

ストレッサー・ソーシャルサポート・登校状態の相関
小学生時代に様々なストレッサーがあったとしても、ソーシャルサポートが高ければ登校状態への影響は少ないという仮説は支持されなかった。これは、ソーシャルサポートの必要性がなかった人が多いということではないかと推察した。中学生時代に様々なストレッサーがあったとしても、ソーシャルサポートが高ければ登校状態への影響は少ないという仮説は支持されなかった。菊島 (1999) でも、青年期に入ることから、反抗期的中心性が前面に現れてくることから、ストレス体験をして不登校傾向に陥った生徒でもサポートの提供を望まないのではないかと推察しており、反発心から援助要請を行わないのではないかと推察した。

ストレッサー尺度項目得点の比較 小学生時代の登校状態に影響を与えるストレッサーとして最も高かったのは、教師関係ストレッサーであり、登校状態に影響を与えるストレッサーとして友人関係が最も高いという仮説は立証されなかった。教師に認めてほしいという気持ちを抱く反面、本人が望む認め方がなされていない可能性があり、ストレスを感じているのではないかと推察される。中学生時代の登校状態に影響を与えるストレッサーとして最も高かったのは、学業に関するストレッサーであり、登校状態に影響を与えるストレッサーとして友人関係が最も高いという仮説は立証されなかった。中学生では勉強難易度が上がり、高校受験もあるため、学力の比重が大きく、成績伸びないことにストレスを感じるのではないかと推察した。

ソーシャルサポート尺度項目得点の比較 小学生時代では、評価的、道具的、情緒的なサポートの 3 点の一部に共通して父親のサポートが登校状態に影響を与えているということがわかった。近年、共働きや父子・母子家庭等多様な家庭が増えているため、家族内役割の変化が影響していると考えられる。中学生時代は、評価的・情緒的サポートの一部に共通して父親のサポートが登校状態に影響を与えていることがわかった。対象者は、女性が多く、女性は、思春期に父親と距離をとろうとする者も少なくはないと考えられ、対象者も道具的サポートは臨んでいない可能性があることと表れであり、父親と距離は取りつつも認め、気にかけてほしいという思いはあるために、評価的及び情緒的サポートに有意差があったのではないかと考えられる。

今後の課題 ストレッサー、ソーシャルサポートに関し、性差が考えられ、今後その検討が必要である。

引用文献

菊島 勝也 (1999). ストレッサーとソーシャルサポートが中学時の不登校傾向に及ぼす影響 性格心理学研究 7, 2, 66-76

自閉症スペクトラム障害児の食行動の問題に対する 養育者の困り感の変化及び支援者に求められる支援

○平 優希 ・ 武井 祐子 ・ 齊藤 由美 ・ 寺崎 正治

(川崎医療福祉大学大学院) (川崎医療福祉大学) (川崎医療福祉大学) (川崎医療福祉大学)

キーワード：自閉症スペクトラム障害，困り感，食事，食事支援

問題・目的

食行動は障害特性によって影響を受けることがある。特に自閉症スペクトラム障害(以下ASD)においては、こだわりや感覚刺激に対する過敏さや鈍感さといった特性から食行動に問題が生じやすく、ASD児及びその養育者には、より適切な食事に関する支援が必要であると考えられる。

そこで、本研究ではASD児の養育者を対象として、乳児期から学童期(前半・後半)までの子どもの食事場面において、養育者が感じていた困り感の変化、その具体的な内容や背景を明らかにすることを第一の目的とする。また、第一の目的で明らかになった内容をもとに、支援者に求められる支援を明らかにすることを、第二の目的とする。本研究で明らかとなる内容により、ASD児を育てる養育者の子どもの食行動に関する悩みや困り感を軽減するための支援に繋がると考えられる。

方法

調査対象者 18歳まで在宅で過ごし、A施設に入所中の18歳以上のASD者の養育者4名を対象とした。

調査内容及び手続き 質問紙調査をインタビュー調査の前に実施し、質問紙調査の内容をもとにインタビュー調査を実施した。

事前の質問紙調査 乳児期、幼児期、児童期(前半・後半)の4つの時期に分けて困り感の点数や食行動の内容、また、Table 1の項目について記入を求めた。

インタビュー調査 食行動の詳細な内容や頻度、食事支援の有無や求めていた食事支援など、質問紙調査の内容と佐久間他(2013)や篠崎他(2007)の先行研究を参考にインタビューガイドを作成し、90分~180分の半構造化面接を1回実施した。

倫理的配慮 川崎医療福祉大学倫理委員会による承認を経て実施した(承認番号22-080)。

データの整理 インタビュー調査で得られた内容は逐語録を作成後、語られた対象者の思いに留意しながら、心理学・精神保健を専門としている教員2名と共に整理し、項目ごとにまとめ、Tableを作成した。本報告では、最初にインタビュー調査を実施したCさんの結果を示した(Table 2)。

Table 1

対象者のフェイスシート

Cさん	
①お子さんとの関係	母親
②お子さんの年齢	40代
③お子さんの性別	男性
④診断を受けた年齢	3歳
⑤具体的な診断名	自閉症を伴う知的障害
⑥受診や診断のきっかけ	・声をかけても振り向かない ・言葉が出ない ・動き回る
⑦ASD以外の障害や病気	誤嚥性肺炎(18・19歳ころに施設に入所してから複数回)・髄膜炎(40歳)
⑧食事支援を受けたことのある施設・病院・相談機関	H入所施設

結果・考察

乳児期 牛乳以外は何でも食べたり飲んだりすることができており、母親が食行動に困り感を感じていないようであった。「モグモグしない」ことや「飲み込む」といった行動に「困っていた」と語られるが、しっかり食べてくれるなら問題としていない様子もあった。乳幼児栄養調査(2015)においては、「食べる量が少ない」(21.8%)が離乳食を進める上での困り事の3番目に挙げられているが、Cさんの場合は「しっかりと量を食べてくれる」ため、多くの養育者が感じている悩みであっても、支援者に相談することはなく、支援者の具体的な支援に繋がらなかったのではないかと考えられる。

幼児期 多動のエピソードが語られることが多く、日常生活に障害の特性が顕著に影響し、その対応に一番の困り感を養育者は感じている様子が見えられた。食行動に困り感があっても、それを上回る困り感の内容が日常生活の中にあると、食行動の問題に取り組むことはないのではないかと推察される。この時期の食行動の問題として、乳児期と同様に、「早食いや噛まずに食べる」があり、幼児期以降もCさんの語りの中で頻出する食行動の問題である。乳幼児栄養調査(2015)によると、「早食い、よく噛まない」ことで困っている0~2歳の養育者は28.9%、5歳以上の養育者は7.6%であった。このことから、「早食い、よく噛まない」という食行動の問題は年齢が上がると共に、減っていくこ

とが推察されるが、Cさんにおいては食行動の困り事として残り続けている。健常児においては年齢とともに解消してく食行動の問題が、障害のある子どもには残る可能性があることに支援者が配慮して支援を行うことが後の誤嚥性肺炎などの食行動の問題を防ぐことに繋がるのではないかと考えられる。

学童期(前半)「痲癩が起きた際には、食事をさらに与える」といった対応がされており、日常生活でみられる問題行動に対応するために、食事に関する内容で対応していたことが語られていた。痲癩を収めるための他の効果的で具体的な手立てや支援がなかったため、養育者が可能な痲癩を鎮めるための対応として食事を与えてしまっていたのではないだろうか。このことから、問題行動や食行動のみに着目するのではなく、問題行動と食行動の問題には関連がある可能性を考慮し、生活全体のアセスメントを行うことで日常生活のなかでの連続性のある支援につながっていくのではないかと考えられる。

学童期(後半) 学校の懇談などで、教員とは問題行動のみに焦点化されたやりとりとなっており、学校での食事の様子は養育者には伝えられていなかった。また、早食いや噛まずに飲み込むといった食行動の問題に養育者は困り感を感じていたが、食事がとれていることから、他の問題行動への対応が優先され、教員に相談しなかったのではないかと推察される。

現在 Cさんの子どもは施設に入所しており、嚥下体操や柔らかい食に変更されるなどの食事支援を受けている。しかし、早食いや噛まずに食べるという食行動

の問題に改善はなく、その結果、誤嚥性肺炎となり入院となっている。ASDの特性をもつ場合、過去の習慣を変えることは容易ではなく、幼い頃からの食事支援や介入が重要であると考えられる。

まとめ Cさんの困り感の点数は2→3→3→4と変化し、年齢が上がるにつれて、困り感の点数があがっていた。困り感の変化の背景には、成長と共に解決されるはずの食行動の問題が、残り続けていたことが考えられる。Cさんが語った「噛まずに、飲み込む」という食行動の問題は乳児期からあり、年齢が上がっても顕著に問題として残り続け、現在も誤嚥性肺炎を引き起こすまでの問題となっていた。噛まずに飲み込むといった食行動の問題への支援がなく、養育者の対応のみでは改善することが困難であったため、現在も問題として残っていることが、本研究より明らかとなった。養育者から食事に関する相談がない場合においても問題がないと考えるのではなく、養育者や子どもとかわる支援者が適切なタイミングで食事の状況の確認を行い、状況に応じた支援を行う必要があると考えられる。また、発達時期ごとの食行動の問題を理解した上で、その問題が継続している場合は積極的に支援につなげていく必要があると考えられる。

引用文献

厚生労働省(2015).乳幼児栄養調査(2022/5/12)

<https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/83-1.html>

Table 2

インタビュー調査の内容

		乳児期	幼児期	学童期(前半)	学童期(後半)	現在
困り感の点数		2 (あまり困っていなかった)	3 (少し困っていた)	3 (少し困っていた)	4 (とても困っていた)	
点数の理由 (困っていた事)		「モグモグしない」こと。牛乳を飲まないことだった。	早食いで口の中のため込む。成長するにつれ、口の中に入れる量が多くなり、飲み込みができなくなった。	箸がうまく使えない。ゆっくり食べる事ができない。周囲の子との差が開いてきた。		
点数が変化した理由			2→3 成長するとで周りができるようになっていること(食べ方や箸の持ち方)ができないから。	同点だが、大変さが強くなった。	3→4周囲の子との差がより大きくなり、問題だと意識するようになった。	
食行動の内容と対応	内容	①早食い②噛まずに飲み込む③出したものは全量摂取	①早食い②噛まずに飲み込む	①早食い②口いっぱいに入れる③ある物は全て食べる。量が少ないと騒ぐ。④痲癩が起きると食べ物で落ち着く	①早食い②噛まずに飲み込む。③箸が使えない。④食事量が多い。	
	対応	①～③特に対応なし	①～②対応なし	①～③特に対応なし、④痲癩が起きると食べ物を与える。	①、②特に対応なし ③割りばしの使用 ④食事量のコントロール	
食行動以外での問題行動		特に語られず	目を離すといなくなる。家・幼稚園から脱走する。	危ないという認識がなく、危険な行動がある。	特に語られず	誤嚥性肺炎になり何度も入院
食事支援の有無とその理由	支援の有無	無	無	無	無	有
	理由	困り感なし。健診での指摘もなし。	幼稚園、健診での指摘なし。食行動以外での問題行動が多く、早食いも重大な問題だと認識なし。	学校からの指摘なし。食事は食べているので問題視せず。	学校からの指摘なし。	嚥下体操、柔らかい食
求めていた支援		無。	無。食べる事に関しては重点を置いてなかった。	有。食事時の見守り	無。	

大学生の親準備性が子どもの反抗的行動に対する認知と対応に及ぼす影響

○笠石 愛莉 ・ 武井 祐子 ・ 池内 由子 ・ 寺崎 正治
(川崎医療福祉大学大学院) (川崎医療福祉大学) (川崎医療福祉大学) (川崎医療福祉大学)
キーワード：親準備性，不適切な養育，子どもの反抗的行動，青年期

問題・目的

近年、虐待件数や不適切な養育の増加が社会問題となっており、不適切な養育の発生予防に向けた取り組みが求められている。不適切な養育に至る要因の一つに、養育者の要求に従わない子どもの行動に対して、養育者が子どもに対して否定的または、意図的であると被害的に認知したりすることが挙げられている（中谷他，2007）。そして、このような認知が怒りや嫌悪の感情を引き起こし、結果として不適切な養育につながる（中谷，2016）が報告されている。

虐待や不適切な養育の予防に関連する概念の一つとして、子どもを養育する以前の親準備性の発達が注目されるようになってきている。親準備性とは、将来親になるために求められる役割や資質に対する準備状態を表す概念であり（滝山・斎藤，1997）、親準備性の発達の程度により、子どもに対する肯定的な感情表出、ネガティブな感情表出に違いが生じる可能性が示唆されている（宮良・神徳，2013；佐々木他，2011）。本研究では、不適切な養育の予防に関連すると考えられる親準備性の発達状態と、不適切な養育に至る要因の一つである子どもの行動に対する認知と対応の関連に着目し、大学生の親準備性が子どもの反抗的行動に対する認知と子どもの反抗的行動に対する対応に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。本研究の仮説は次の通りである。仮説1：子どもの反抗的行動を否定的・被害的に認知するほど共感的応答は減少し、不適切な対応が増加する。仮説2：親準備性が発達するほど、共感的応答が増加し、不適切な対応が減少するが、親準備性の発達が不十分だと、共感的応答は減少し、不適切な対応が増加する。仮説3：子どもの反抗的行動に対する否定的・被害的認知は子どもへの不適切な対応を増加させる。仮説4：親準備性が発達していることは、不適切な対応を減少させる。仮説5：親準備性が発達していると、子どもの反抗的行動に対して、否定的・被害的に認知しても、不適切な対応は減少する。

方法

調査対象者

私立大学に通う大学生を対象に質問紙調査を行った。170名分を回収し、不同意や記入不備のあったものを除き、158名（男性47名、女性109名、その他2

名）を分析対象とした。回答者の平均年齢は19.45歳（ $SD=1.03$ ）であった。

質問項目

(1) フェイスシート 年齢，性別をたずねた。

(2) 子どもの反抗的行動に対する大学生の認知
藤田（2017）が中谷・中谷（2006）を参考に作成した場面を使用し、その場面をどのように認知するかを尋ねた。場面は、子どもがなかなかおもちゃを片づけず口ええをする片付け場面（場面1）と買い物の途中で、大人の言う事を聞かずにおもちゃを買ってほしいと駄々をこねる買い物場面（場面2）であった。各場面の子どもの反抗的行動に対する認知を尋ねる質問項目は、中谷・中谷（2006）が作成した「被害的認知」10項目、「否定的認知」7項目、「肯定的認知」7項目、計24項目のうち、藤田（2017）が大学生用に用いた20項目を使用した（5件法）。

(3) 子どもの反抗的行動に対する大学生の対応
一般家庭の親にも経験される軽度の不適切な養育行動を尋ねる7項目（中谷，2016）と伊藤他（2010）、伊藤他（2014）を参考に作成した共感的応答行動を尋ねる7項目、計14項目を用いた（5件法）。

(4) 親準備性

滝山・斎藤（1997）の親性準備性尺度の「対子ども感情」6項目、「対子育て感情」11項目、「知識・経験」2項目、「対学習感情」4項目、「身体的・精神的自立」2項目、計25項目を用いた（5件法）。

倫理的配慮

川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得て調査を実施した（承認番号22-090）。

結果

統計処理にはHAD（清水，2016）を用いた。

大学生の親準備性の発達状態については、滝山・斎藤（1997）を参考に、親準備性尺度の各5下位尺度それぞれの得点率を算出した。「身体的・精神的自立」は90%、「対子ども感情」は84%、「対学習感情」は87%、「知識・経験」は76%であり、「対子育て感情」は65%であった。

各変数間の関連を検討するために相関係数を算出した（Table 1）。「不適切な対応」は、「親準備性」、「肯定的認知」と有意な負の相関を示し、「否定的認知」、「被害的認知」と有意な正の相関を示した。「共感的

応答は「親準備性」、「肯定的認知」と有意な正の相関、「被害的認知」と有意な負の相関を示した。

Table 1
各変数の相関係数

	①	②	③	④	⑤
①親準備性	—				
②被害的認知	-.314**	—			
③否定的認知	-.304**	.421**	—		
④肯定的認知	.462**	-.346**	-.167*	—	
⑤不適切な対応	-.454**	.607**	.368**	-.334**	—
⑥共感的応答	.489**	-.403**	-.077	.597**	-.514**

** $p < .01$, * $p < .05$

「親準備性」と「否定的認知」、「親準備性」と「被害的認知」が「不適切な対応」に及ぼす影響を明らかにするために、階層的重回帰分析を行った (Table 2)。Step1で「否定的認知」と「親準備性」、「被害的認知」と「親準備性」を説明変数、「不適切な対応」を目的変数とする重回帰分析の結果、「否定的認知」と「被害的認知」、「親準備性」の効果が有意であった ($R^2 = .26$, 否定的認知: $b = 0.17$, $SE = 0.04$, $\beta = .25$, $t(158) = 3.4$, $p < .001$; 親準備性: $b = -0.21$, $SE = 0.04$, $\beta = -.38$, $t(158) = -5.23$, $p < .001$), ($R^2 = .44$; 被害的認知: $b = 0.33$, $SE = 0.04$, $\beta = .51$, $t(158) = 8.10$, $p < .001$; 親準備性: $b = -0.16$, $SE = 0.04$, $\beta = -.29$, $t(158) = -4.64$, $p < .001$)。次に、「親準備性」が「否定的認知」及び「被害的認知」と「不適切な対応」との関係に及ぼす影響を明らかにするために、Step2で、交互作用項を説明変数に加えて重回帰分析を行った結果、有意な結果は得られなかった (親準備性×否定的認知: $adjR^2 = .25$, $b = -0.20$, $SE = 0.04$, $\beta = -.08$, $t(158) = -1.12$, $p = .250$; 親準備性×被害的認知: $adjR^2 = .44$, $b = -0.00$, $SE = 0.00$, $\beta = -.10$, $t(158) = -1.58$, $p = .116$)。

考察

子どもの反抗的行動に対する否定的な認知は不適切な対応と関連しており、被害的認知は、不適切な対応と共感的応答に関連していた。更に、親準備性の発達状態も不適切な対応、共感的応答に関連することが明らかになった。よって仮説1と2は支持された。さらに、否定的・被害的認知は不適切な対応を増加させることが明らかになった。また、親準備性が発達して

いることは、不適切な対応を減少させることが明らかになった。よって、仮説3, 4は支持された。中谷(2006)は、子どもの反抗的行動に対する養育者の歪んだ認知が虐待的行為と関連しやすいことを報告している。本研究の結果から、大学生においても同様の傾向が明らかとなり、不適切な養育の予防には、子どもの行動を正しく理解することが重要であると考えられる。また、諸井・氏原(2009)は、将来の虐待行為懸念の減少には、子どもへの関心の高さや将来の子育て像を含む、大学生の親準備性の発達が関係していると述べている。さらに、伊藤(2010)は、親準備性の下位尺度のなかでも発達に関する知識を身につけることで共感的な応答を高めると述べている。以上のことから、不適切な養育の予防には、早期から親準備性を育むことが重要であると考えられる。

親準備性の重要性は示唆されるものの、本研究の仮説5は支持されなかった。この結果から、実際に養育をする前段階の大学生も、子どもの行動に対する認知とその後の不適切な対応とのつながりの強さが、虐待ハイリスクの要因の一つとなると考えられる。一方で、親準備性の発達によって不適切な対応の減少につながることを示されたことに関しては、不適切な養育の予防の要因の一つとして注目できる。藤田(2017)は、大学生の被害的認知と虐待傾向の結びつきを報告しており、子どもに関する知識や経験を養うことの重要性を報告している。また、滝山・斎藤(1997)は、親準備性における「知識・経験」は、家庭科の授業等での保育に関する学習の影響により、学年を問わず発達する可能性を示唆している。以上のことから、不適切な養育の予防においては、早期から親準備性を育むことはもちろん、子どもの発達に関する正しい知識を早期から身につけることで、子どもを適切に理解する力を育むようなアプローチが重要であると考えられる。

本研究では、子どもの反抗的行動に対する認知と対応との関連が明らかとなったものの、親準備性が子どもの反抗的行動に対する認知に及ぼす影響は明らかになっていない。今後、親準備性がどのように認知に対して影響を明らかにすることで、虐待に繋がるリスクを親準備性の発達によって、早期に予防するためのアプローチの発展に繋がるのではないかと考えた。

Table 2
親準備性が子どもの行動に対する否定的・被害的認知と不適切な対応に及ぼす影響

変数名	否定的認知						被害的認知					
	Step 1			Step 2			Step 1			Step 2		
	<i>b</i>	<i>SE</i>	β	<i>b</i>	<i>SE</i>	β	<i>b</i>	<i>SE</i>	β	<i>b</i>	<i>SE</i>	β
切片	21.37	0.51	—	21.19	0.50	—	21.37	0.41	—	21.23	0.42	—
親準備性	-0.21	0.04	-.38**	-0.20	0.04	-.37**	-0.16	0.04	-.29**	-0.15	0.04	-.27**
認知	0.17	0.04	.25**	0.19	0.05	.27**	0.33	0.04	.51**	0.31	0.04	.49**
認知×親準備性				-0.01	0.00	-.08				0.00	0.00	-.10
R^2	.26**			.27**			.44**			.45**		
ΔR^2				.01						.01		

** $p < .01$

未来展望の曖昧と気分の関連における制御焦点の調整効果

白石 奈津栄¹・堀内 孝²

(¹岡山大学社会文化科学研究科・²岡山大学学術研究院社会文化科学学域)

キーワード：未来展望・曖昧性・制御焦点・気分

不確実性の高い時代において、未来展望 (Future Time Perspective) に関する研究の必要性が高まっている。未来に関する時間的展望については、古くは1930年代にIsraeliが行った一連の研究やWallace (1956)による精緻な定義、Lewin (1942)の場の理論などによって検討されている(都築, 1982)。近年の研究において未来展望は、「個人が自分の将来に関して抱く知覚と期待」(Carstensen, Isaacowitz, & Charles, 1999)と定義され「開放」と「制限」の次元が主に検討されてきた。その後、Brothers et al. (2014)は新たな3つめの次元である「曖昧」の検討を行い、曖昧性は人生満足度 (SWLS) と負の相関、うつと正の相関を示す事を明らかにした。ところで、心理学における幸福度研究の系譜は2つに大別されている(Ryan & Deci, 2001)。1つは快楽主義 (hedonism) のアプローチ「主観的幸福感」であり、人生満足度尺度 (SWLS) などで測定される幸福感や、ポジティブ・ネガティブ感情 (気分) を測定するPANAS 尺度などで測定される幸福感である。もう1つは幸福主義 (eudaimonism) を重視する心理的ウェルビーイング尺度 (PWBS) で測定される「心理的幸福感」である。Brothers et al. (2014)では、「曖昧」と「主観的幸福感」の人生満足度 (SWLS) の関係が検討されているが、もう一つの要素であるポジティブ・ネガティブ感情 (気分) との関係は未だ検討されていない。

また、白井 (1997) は時間的展望の機能として、①動機づけ機能、②パーソナリティ (人格的) 機能、③共同化機能をあげている。未来展望においてもパーソナリティの個人差により、人々が未来を「曖昧」あるいは不確実なものとして知覚した際、「曖昧」な未来を重荷として経験しがちな個人がいる一方、未来の「曖昧」を中立的に、または大したことの無いものとして経験する個人もいることが指摘されている(後藤他, 2021)、これまでの研究でも曖昧性耐性の低さ(増田, 1998)は曖昧さへの否定的態度や不安と関連することが示されている(西村, 2017)。また、白石・堀内 (2022a) では自尊心と自己概念の明確性といった特性に着目し曖昧への影響が検討されている。そこで、本研究では制御焦点という動機づけに関するパーソナリティ特性に着目し、相互作用論(若林, 1993)の観点から「曖昧」な状況における制御焦点(Higgins, 1997, 1998)の調整効果を検討する。これまで未来展望と制御焦点の関係に関する議論や、制御焦点を調整変数にした議

論はおこなわれているが、未来展望と気分の関係における制御焦点の調整効果の役割についての検討はされていない。未来が「曖昧」な状況の場合、パーソナリティである制御焦点が、調整変数として機能し、個人差が生じることが考えられる。大学生の時間展望は過去から未来の関係を統合する中で将来目標が設定され、それに動機づけられる未来志向であることが示されている(都築, 1993)、本研究では大学生に着目し検討を行う。

方法

調査対象者および手続き

2022年6月、18~23歳の大学昼間部に通う学生男女400名を対象にした質問調査を、アイブリッジ株式会社のセルフ型アンケートツール Freeasy を利用して実施した。納品データには、個人が特定できないように処理された属性情報(年齢、性別、結婚、職業、世帯年収、子供有無など)が含まれる。

質問フォームの構成

多次元未来展望尺度 Multidimensional Future Time Perspective scale (Brothers et al., 2014) の邦訳版(白石・堀内, 2022b)「開放 (Open)」4項目、「制限 (Limited)」4項目、「曖昧 (Ambiguous)」4項目を使用。「1.全くそう思わない」から「5.非常にそう思う」の5件法。

促進予防焦点尺度 Promotion/prevention focus scale (PPFS 尺度) (Lockwood, Jordan, & Kunda, 2002) の邦訳版(尾崎・唐沢, 2011)の「促進焦点 (接近)」因子を測定する「利得接近志向尺度」8項目、「予防焦点 (回避)」因子を測定する「損失回避志向尺度」8項目を使用。7件法。

気分尺度 小川・門地・菊谷・鈴木 (2000) が作成した一般感情尺度 (General Affect Scale) の下位因子「Positive Affect : PA (肯定的感情状態)」と「Calmness : CA (安静状態)」のそれぞれについて、因子負荷量の高い上位3項目 (PA: 「活気のある」「楽しい」「充実した」、CA: 「ゆっくりした」「ゆったりした」「平穏な」) を使用。また、福井 (1997) が作成した Depression and Anxiety Mood Scale (DAMS 尺度) の下位因子「抑うつ気分」3項目(「沈んだ」「暗い」「嫌な」)、「不安気分」3項目(「不安な」「心配な」「気がかりな」)を使用。「1.全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」7件法。各尺度の項目の最後には不良回答チェック項目を配置した。

結果

分析対象者

271名(男性127名:M=19.98歳(SD=1.65),女性144名:M=20.06歳(SD=1.39))を分析対象とした。分析にはSPSS 27, Amos 28, HAD_on_16_202を用いた。

尺度得点の算出と相関

次に、多次元的未来展望の「開放」「制限」「曖昧」、PPFSの「促進」「予防」、気分「肯定感情」「安静」「抑うつ」「不安」について、それぞれ尺度得点化し、相互相関を求めた(Table 1)。

Table 1 各下位尺度の記述統計量および相関係数 (n=271)

	M (SD)	α	1	2	3
1 開放	3.15 (0.87)	.820	—		
2 制限	3.34 (0.87)	.791	-.362 **	—	
3 曖昧	3.54 (0.84)	.825	-.540 **	.536 **	—
4 促進	4.56 (1.00)	.848	.555 **	-.007	-.330 **
5 予防	4.73 (0.99)	.841	-.349 **	.416 **	.465 **
6 肯定感情	4.46 (1.21)	.828	.595 **	-.216 **	-.372 **
7 安静状態	4.51 (1.12)	.697	.167 **	-.027	.018
8 抑うつ	3.62 (1.36)	.771	-.578 **	.322 **	.456 **
9 不安	4.47 (1.38)	.820	-.439 **	.382 **	.477 **
10 年齢	20.02	.820	.055	-.166 **	-.097
11 性別(男1)	0.47	.820	-.007	.064	.088

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

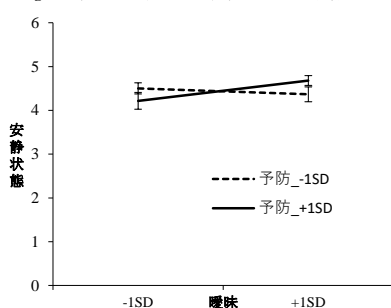
制御焦点による調整効果の分析

重回帰分析に際して以下の方針を立てた。①従属変数は、気分(「肯定感情」「安静」「抑うつ」「不安」)から1変数を設定した。②独立変数の主効果に関しては、多次元未来展望(「開放」「制限」「曖昧」)から1変数とPPFS(「促進」「予防」)の2変数を項として設定した。交互作用は、多次元未来展望の当該変数と「促進」の交互作用項、および、多次元未来展望の当該変数と「予防」の交互作用項を設定した。③気分4と多次元未来展望3の組み合わせにより、重回帰分析を12回行った。単純傾斜検定では、調整変数である情動焦点(促進あるいは予防)の「平均+1SD」を高群、「平均-1SD」を低群とした。

曖昧・促進予防・安静状態 未来展望の「曖昧」と制御焦点の「促進」「予防」と交互作用項を説明変数、「安静状態」を従属変数とした重回帰分析を行った。「促進」「曖昧」「予防」は有意ではなかった($R^2=.037$;「曖昧」 $\beta=.073, SE=.100, t(265)=.962, ns$;「促進」 $\beta=.111, SE=.076, t(265)=1.619, ns$;「予防」 $\beta=.007, SE=.079, t$

(265)=.100, ns)。「曖昧」と「予防」の交互作用は有意であった($\beta=.148, SE=.079, t(265)=2.268,$

Figure 1 曖昧と制御焦点が安静状態に及ぼす影響



$p < .05$)。そこで、単純傾斜の検定を行ったところ、「予防」の高い場合(+1SD)では「曖昧」の効果がみられたが($\beta=.206, p < .05$),「予防」の低い場合(-1SD)では「曖昧」の効果は見られなかった($\beta=-.061, ns$)。この結果から、「予防」の高い場合、未来展望が「曖昧」な状況がより「安静状態」を高めていたといえる(Figure 1)。

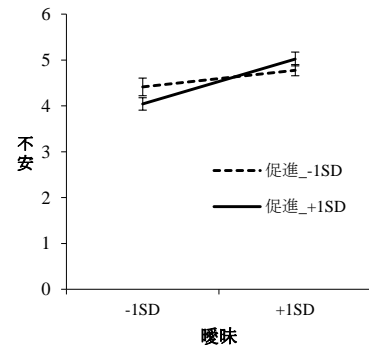
曖昧・促進予防・不安未来展望の「曖昧」と制御焦点の「促進・予防」と交互作用項を説明変数、「不安」を従属変数

とした重回帰分析を行った。その結果、「曖昧」と「予防」は有意に「不安」を予測していた($R^2=.373$;「曖昧」 $\beta=.244, SE=.101, t(265)=4.000, p < .01$;「予防」 $\beta=.400, SE=.079, t(265)=7.121, p < .01$)。「促進」は有意ではなかった($\beta=-.023, SE=.076, t(265)=-.416, ns$)。また、「曖昧」と「促進」の交互作用が有意傾向であった($\beta=.122, SE=.082, t(265)=2.226, p < .05$)。そこで、単純傾斜の検定を行ったところ、「促進」の高い場合(+1SD)では「曖昧」の効果がみられたが($\beta=.206, p < .05$),「促進」の低い場合(-1SD)では「曖昧」の効果は見られなかった($\beta=-.061, ns$)。この結果から、「促進」の高い場合、未来展望が「曖昧」な状況がより「不安」を高めていたといえる(Figure 2)。

考察

本研究の結果からは、先行研究から予測された、状況要因と特性要因の調整効果(相互作用)が示されたといえる。特に未来展望の「曖昧」のみで調整効果がみられた結果からは、制御焦点というパーソナリティ特性から個人差が生じる知見(後藤他, 2021)を支持するものであった。相互作用論(若林, 1993)によると、人間の行動は、状況要因と個人特性要因によって規定される。そして、状況要因が強い場合個人特性は十分に機能しないが、状況要因が弱い場合は個人特性の効果が顕在化するとされる。未来展望を個人が置かれた状況と考え、未来展望が「曖昧」であるということは弱い状況とみなすことができる。それ故、本研究においては、個人特性としての促進焦点あるいは制御焦点が未来展望の「曖昧」においてのみ調整変数として機能したものと解釈される。

Figure 2 曖昧と制御焦点が不安に及ぼす影響



児童生徒の援助要請行動を高める養護教諭の役割

○長町 朋香 ・ 武井 祐子 ・ 岡野 維新 ・ 寺崎 正治

(川崎医療福祉大学大学院) (川崎医療福祉大学) (川崎医療福祉大学) (川崎医療福祉大学)

キーワード：養護教諭，援助要請行動，相談相手，相談内容，性差

問題・目的

近年、いじめや不登校、虐待など児童生徒の心を取り巻く問題が増加し、健康の保持増進における養護教諭の役割は大きくなっている。平成9年の保健体育審議会答申においては、「養護教諭の新たな役割」として、養護教諭の健康相談活動が一層重要な役割を持ってきていることや、児童生徒の様々な訴えに対して心と体の両面への対応が求められることが示されている。

健康相談活動の入り口としては、児童生徒の援助要請行動が挙げられる。援助要請行動は精神的健康の維持に影響する。そのため、一人での解決が難しいと感じた場合には周囲に助けを求め、話を聴いてもらうといった児童生徒の行動も必要である。

平成26年度全国家庭児童調査では、小学5年生から18歳未満を対象として、相談内容と相談相手の関連が調査されており、健康や勉強・進路、いじめに関しては親へ、恋愛や友人に関しては友人へ、勉強・進路やいじめ、性に関しては教員への相談が多いことが明らかとなっている。つまり、相談相手によって相談内容が異なると考えられる。しかし、学校種別及び養護教諭に限定された相談内容は調査されていない。

援助要請行動と相談相手の関連を調査した研究として、上長(2014)では、教師への援助要請に性差は確認されなかった。一方、佐藤・渡邊(2013)によると、養護教諭に対して援助を求めやすいと感じている割合は男児よりも女児の方が多かった。相沢(2017)では、男性養護教諭に対する常駐希望は女児よりも男児の方が多く、相談場面における男性養護教諭の選択も男児の方が多かった。つまり、養護教諭の性別が児童生徒の援助要請行動に関係していると考えられる。しかし、佐藤・渡邊(2013)、相沢(2017)では援助要請行動に対する性別以外の資質・能力の影響が明らかにされていない。また、養護教諭に求める資質・能力について、橋口・坂田(2016)では、女子学生を対象に調査が行われており、男子学生の希望が明らかとなっていない。

これらの結果を踏まえて、本研究では第一に、児童生徒が養護教諭に対して行った相談内容を学校種ごとに明らかにする。第二に、児童生徒が養護教諭に対して求める資質・能力を明らかにし、さらに男女で違いがあるかを検討する。

方法

対象者 大学生135名を対象に調査を行った。有効回答者数は131名(男性57名、女性74名、平均年齢は19.46歳、SD=3.83)であった。

質問紙 フェイスシートで性別、年齢などの基本属性について回答を求めた。平成26年度全国家庭児童調査を参考に、学校種別(小・中・高)の相談相手を親、友人等の10項目、複数回答で求めた。今野(2005)を参考に、学校種別の相談内容を家族、勉強・進路、いじめ等の20項目、複数回答で求めた。橋口・坂田(2016)を参考に養護教諭に求める資質・能力を優しさ、話しやすさ等の24項目4件法で求めた。

手続き 小学生・中学生・高校生時における援助要請行動と養護教諭に求める資質・能力に関する質問紙調査を行った。講義終了後の時間を利用して、調査者が質問紙を配布した。また一部の大学生には調査者が個別に質問紙調査の協力を依頼し、質問紙を配布した。分析にはSPSSを用いた。

倫理的配慮 調査は無記名で行い、個人が特定されないことや、調査結果は研究目的以外で使用しないことなどを文書及び口頭で説明した。

結果

学校種ごとに、養護教諭を対象とした相談内容を明らかにするために、相談相手として養護教諭を選択した人と選択しなかった人に群分けし、クロス集計をした後Fisherの直接確率検定と残差分析を行った。結果をTable1に示した。小学生時に相談相手として養護教諭を選択した人は、“家族”に関する相談の割合が有意に多かった。中学生時では、“友人”に関する相談の割合が有意に多かった。高校生時では、“家族”、“日常生活”、“健康状態”に関する相談の割合が有意に多かった。

児童生徒が養護教諭に求める資質・能力では、各項目の平均得点を比較したところ、男女ともに“話しやすさ”が最も多く、次いで“相談のしやすさ”、“話を聴いてくれる”であった。また、性別によって養護教諭に求める資質・能力に違いがあるのかを明らかにするためにt検定を行った。結果をTable2に示した。その結果、“男性である”、“スキンシップがある”に関して、女性よりも男性の方が有意に高い得点を示していた。さらに、養護教諭に求める資質・能力の構成を明らかにするた

め、主成分分析を行った結果、2つの主成分が抽出された。“公平な態度である”、“話を聴いてくれる”等の第1主成分を「受容感」とした。“怖い”、“体力がある”等の第2主成分を「指導力」とした。

考察

全学校種において、養護教諭は相談相手としてほとんど選択されないことが明らかとなった。一方で、養護教諭により多く行われる相談内容及び、学校種によって異なった相談があることが明らかとなった。

熊谷 (2001) は、養護教諭は成績にこだわらないため、子どもが心を開きやすいことを述べている。五十嵐他 (2013) では、中学生の感じる相談コストに関して、担任よりも養護教諭の方がネガティブな結果を感じにくいことが明らかとなっている。つまり、養護教諭への相談数は少ないものの、相談相手として養護教諭が選択される理由があると考えられる。

学研教育総合研究所 (2022) の小学生白書において、小学生の相談相手は親が多いが、悩みの内容としてもきょうだい・親が多くなっている。相談相手として養護教諭を選択した人は家族に関する相談が多かったことから、親に対して直接的に困難な相談が養護教諭に対して行われていると考えられる。中学生は相談相手、相談内容ともに友人が多い (山口他, 2004; 岩瀧, 2008) が、友人間での解決が困難となった場合、相談相手として養護教諭を選択しているのではないかと推察される。一般社団法人全国高等学校 PTA 連合会・株式会社リクルート (2021) において、高校生の進路相談相手は母親が 85%と最も多くなっていた。高校生時は勉強・進路の相談が多く、進路決定は多くの場合、家族と行われる。そのため、家族と話す中での方向性や意見の不一致から家庭に対する不満や悩みが増加し、養護教諭に対する家族の相談が多いと考えられる。また、青年期は心身の発育・発達が著しいため、健康状態の相談が多いと推察される。これらのことから、養護教諭は身近な相談相手への援助要請が困難な場合に、援助要請の可能な相手として選択されていると考えられる。

養護教諭に求められる資質・能力としては、機敏な処置以上に養護するという母性的で受容的な態度が求められるとともに、教員としての指導力も必要とされ

ることが明らかとなった。このことから、児童生徒の援助要請行動を促すには、このようなニーズを把握し、傾聴的態度や、相談意欲を促進する雰囲気づくりが重要であると考えられる。

性差に関して、相沢 (2017) と同様に、男子は同性である男性養護教諭を求めていることが明らかとなった。三島 (2008) は、男子に特徴的ないじめとして暴力的攻撃を挙げ、文部科学省 (2000) ではいじめの発生件数が女子よりも男子の方が多く、暴力行為の実態として男子が 9 割を占めていることを指摘している。このような現状に対して坂西 (1995) は、他者への援助要請がいじめの解消に関連していることを明らかにした。これらのことから、男性養護教諭の希望を汲むことは男子児童生徒の援助要請行動を高め、いじめや暴力行為の減少にもつながるのではないかと考えられる。

本研究では、養護教諭を相談相手として選んだ人が少なく、養護教諭に行われる相談内容や求められる役割を見出すことが困難であった。今後、養護教諭を対象として実際に受けた相談内容や行った支援を比較・検討することで、援助要請行動に対して養護教諭に求められる対応及び支援がより明確になると考えられる。

Table 2
養護教諭に求める資質・能力における性差

	男性		女性		t 値
	平均値	SD	平均値	SD	
優しさ	3.67	0.55	3.70	0.59	-0.36
話しやすさ	3.81	0.48	3.88	0.44	-0.89
包容力	3.54	0.60	3.73	0.58	-1.85
手当てが上手	3.56	0.63	3.62	0.64	-0.49
知識が豊富	3.47	0.68	3.47	0.76	0.01
怖い	1.49	0.80	1.30	0.66	1.48
相談のしやすさ	3.72	0.53	3.84	0.50	-1.31
頼りがいがある	3.47	0.68	3.66	0.63	-1.64
明るさ	3.39	0.77	3.53	0.65	-1.14
指導力がある	2.74	1.01	3.01	0.91	-1.64
男性である	1.81	0.90	1.53	0.59	2.14 *
常識がある	3.56	0.60	3.71	0.61	-1.41
体力がある	2.37	0.96	2.51	0.94	-0.87
公平な態度である	3.65	0.58	3.82	0.48	-1.84
話を聴いてくれる	3.70	0.50	3.84	0.47	-1.59
女性である	2.70	1.07	2.86	1.00	-0.86
とっさの判断ができる	3.40	0.78	3.51	0.71	-0.79
迅速な対応ができる	3.53	0.68	3.69	0.57	-1.45
教室での様子を見ている	2.74	1.04	2.92	0.93	-1.05
叱ってくれる	2.67	0.95	2.58	0.92	0.52
笑顔	3.67	0.58	3.55	0.64	1.04
いつも保健室にいる	3.12	0.89	3.14	0.82	-0.09
スキンシップがある	2.68	1.02	2.19	0.97	2.82 **
静か	2.25	0.87	2.26	0.89	-0.07

**p < .01 *p < .05

Table 1
学校種における養護教諭を相談相手とする相談内容

	小学生時					中学生時					高校生時				
	養護教諭選択群(6)		養護教諭未選択群(125)		p 値	養護教諭選択群(7)		養護教諭未選択群(124)		p 値	養護教諭選択群(14)		養護教諭未選択群(117)		p 値
	はい	いいえ	はい	いいえ		はい	いいえ	はい	いいえ		はい	いいえ	はい	いいえ	
家族	△ 4	▼ 2	▼ 16	△ 109	.005 **	3	4	25	99	.167	△ 8	▼ 6	▼ 22	△ 95	.004 **
友人	4	2	56	69	.412	△ 6	▼ 1	▼ 51	△ 73	.043 *	9	5	45	72	.085
病気・ケガ等を含む健康状態	1	5	5	120	.249	1	6	11	113	.498	△ 6	▼ 8	▼ 10	△ 106	.002 **
日常生活	2	4	10	115	.094	2	5	10	114	.125	△ 6	▼ 8	▼ 12	△ 105	.004 **

**p < .01 *p < .05

注1) 先生、勉強・進路、部活・習い事、睡眠、食事・ダイエット、生理について、性について、恋愛、タバコ・アルコール・薬物、いじめ、虐待、校内暴力、家庭内暴力、リストカットなどの自傷行為、お金・アルバイト、その他の16項目では有意な結果が得られなかったため、紙面の都合上、記載を省略する。
注2) ()内は人数を示す。

バランスのとれた時間的展望を示すクラスターは存在するのか

○ ¹張 澤 ・¹白石 奈津栄 ・²堀内 孝

(¹岡山大学社会文化科学研究科) (²岡山大学学術研究院社会文化科学学域)

キーワード：時間的展望，バランスのとれた時間的展望，クラスター分析

問題・目的

「ある一定の時点における個人の心理学的未来および過去についての見解の総体」を時間的展望という (Lewin, 1951)。Zimbardo & Boyd (1999) は、時間的展望を測定するものとして Zimbardo Time Perspective Inventory (以下、ZTPI とする) を開発した。ZTPI は、過去に対して温かく、感傷的な態度を反映する「過去肯定」、過去に対して全体的に否定的、回避的な見方を反映する「過去否定」、危険を好む、向う見ずな態度を反映する「現在快樂」、人生に対して宿命的、無力感を伴った態度を反映する「現在運命」、未来に向けての努力や未来の報酬を重んじる、未来の指向性を表す「未来」の 5 因子から構成されている。近年 ZTPI を用いた研究では、「過去肯定」においては得点が高く (上位 90%)、「現在快樂」、「未来」においては得点が適度に高く (上位 80%)、「過去否定」、「現在運命」においては得点が低い (下位 10%) という「バランスのとれた時間的展望 (balanced time perspective, 以下、BTP とする) の重要性が指摘されている (Zimbardo & Boyd, 2012)。先行研究では、BTP を有する個人は主観的幸福感が高く、精神的健康度が高いことが報告されている (Stolarski et al., 2020)。

BTP 研究では、BTP を測定するにあたって ZTPI の 5 因子の得点によるクラスター分析が使用されている。ところで、BTP クラスターの判断基準や命名は個々の研究者に委ねられているため、抽出された「BTP クラスター」は、必ずしも厳密に Zimbardo & Boyd (2012) が指摘した BTP の理想得点と合致しない場合がある。さらに、厳密な BTP 判断基準を採用した McKay et al. (2019) は、オーストラリア、イギリス、アメリカ、スロベニアの 4 カ国の参加者を対象に ZTPI を測定した結果、オーストラリアのみ BTP を示すクラスターが見出されたと報告している。すなわち、BTP の特徴を示すクラスターは必ずしも存在しないことが示めされている。

そこで本研究は、Zimbardo & Boyd (2012) の BTP 基準に従い、日本人大学生においては BTP を示すクラスターは存在するのかを検証することを目的とする。また、抽出されたクラスター間の違いを見るため、先行研究では多用される主観的幸福感と精神的健康という

二つの変数を従属変数として使用する。

方法

調査対象者および手続き 2022 年 10 月、大学生男女 571 名を対象にした質問調査を、アイブリッジ株式会社のセルフ型アンケートツール Freeasy を利用して実施した。納品データには、個人が特定できないように処理された属性 (年齢、性別など) が含まれる。

質問フォームの構成 質問フォームには以下の尺度が含まれた。(a) ZTPI 下島他 (2012) に記載されていた ZTPI の項目の日本語訳 56 項目を使用した。評定は、「1.全くあてはまらない」～「5.非常にあてはまる」の 5 件法である。(b) 人生に対する満足度尺度 Diener et al. (1985) が開発した Satisfaction With Life Scale (以下、SWLS とする) の日本語版 (角野, 1994) を使用した。評定は「1.全くそうではない」から「7.全くそうだ」の 7 件法であり、得点が高いほど主観的幸福感が高いことを意味する。(c) K6 尺度 Kessler et al. (2002) が開発した The Kessler Psychological Distress Scale (以下、K6 とする) の日本語版 (Furukawa et al., 2008) を使用した。評定は「1.全くない」から「5.いつも」の 5 件法であり、得点が高いほど精神的健康度が低いことを意味する。

倫理的配慮 本研究は、岡山大学大学院社会文化科学研究科・法務研究科倫理審査委員会の承認 (社_2022_14) を得て行われた。

結果

分析対象者 分析対象者の選定にあたって、不良回答チェック項目で指定された評定番号にチェックしなかった参加者と、10 項目以上にわたって同一の評定番号を選択し続けた参加者を除いた。最終的な分析対象者は 358 名 (女性 190 名、男性 168 名、平均年齢=20.13 (SD=1.27 歳)) であった。

探索的因子分析 クラスター分析を実行する前に、まず原版 ZTPI (Zimbardo & Boyd, 1999) と同様の 5 因子構造を想定し、ZTPI 全 56 項目に対して 5 因子を指定した探索的因子分析 (最尤法・プロマックス回転) を行った。その結果、原版と異なる下位因子に負荷する項目、また負荷量の低い項目が複数見られたが、原版尺度と概ね同様の特徴を示す 5 因子が再現された。原

版と同一の因子構造が示されなかったが、原版の因子構造が部分的に再現されていること、そして Zimbardo & Boyd (2012) は原版 ZTPI の因子構造に基づいて BTP を規定していることを鑑みて、本研究は Zimbardo & Boyd (1999) と同様の因子構造を採用することとした。下位因子ごとに得点を算出して α 係数を求めたところ、「過去肯定」は $\alpha = .63$ 、「過去否定」は $\alpha = .78$ 、「現在快楽」は $\alpha = .76$ 、「現在運命」は $\alpha = .61$ 、「未来」は $\alpha = .70$ であり、一定の内的信頼性が確認された。

クラスター分析 先行研究に従い、ZTPI の各下位尺度得点を標準化した上、Ward 法による階層的クラスター分析を実行した。クラスター抽出の停止基準として、先行研究に倣って pseudo- F (Caliński & Harabasz, 1974), $Je(2)/Je(1)$ および pseudo T^2 (Duda & Hart, 1973) を求めた。各指標を比較したところ、3 クラスターが比較的適切であることが示唆された。そこでクラスター数を 3 に指定し、再度階層的クラスター分析を実行した (図 1)。

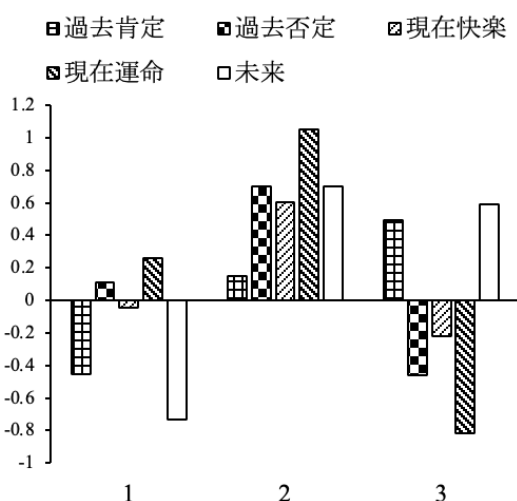


図1 各クラスターの特徴

各クラスターの特徴を見ると、クラスター1 ($N=165$) は、「過去肯定」、「未来」の2因子において得点が特に低かった。クラスター2 ($N=61$) は、「過去肯定」の得点が平均値に近く、「過去肯定」以外の4因子において得点が高かった。クラスター3 ($N=132$) は、「過去肯定」、「未来」因子の得点が高く、「過去否定」、「現在運命」因子の得点が低く、すなわち3クラスターの中で最も BTP の特徴に類似していた。しかしながら、「現在運命」因子の得点は平均値よりも低く、Zimbardo & Boyd (2012) の基準に合致しなかった。

分散分析 各クラスターの違いを検討するため、クラスター (クラスター1, 2, 3) を独立変数とした1要因分散分析を SWLS, K6 の従属変数ごとに行った。

SWLS を従属変数とする分散分析の結果、要因の効果が有意であった ($F(2, 355) = 11.04, p < .01, f = 0.25$)。

5%水準の Holm 法による多重比較の結果 ($Mse=1.44$)、クラスター3 ($M=4.21, SD=1.23$) は、クラスター1 ($M=3.56, SD=1.19$) よりも有意に SWLS の得点が高かった ($\alpha=0.017$)。クラスター1 とクラスター2 ($M=3.94, SD=1.13$)、クラスター2 とクラスター3 とでは有意差は認められなかった (順に $\alpha=0.025, 0.050$)。

K6 を従属変数とする分散分析の結果、要因の効果が有意であった ($F(2, 355) = 30.85, p < .01, f = 0.42$)。5%水準の Holm 法による多重比較の結果 ($Mse=0.80$)、クラスター1 ($M=2.56, SD=0.93$)、クラスター2 ($M=2.79, SD=0.96$) は、クラスター3 ($M=1.87, SD=0.80$) よりも有意に K6 の得点が高かった (順に $\alpha=0.025, 0.017$)。クラスター1 とクラスター2 とでは有意差は認められなかった ($\alpha=0.050$)。

考察

本研究の目的は、Zimbardo & Boyd (2012) が示した BTP クラスターは日本人大学生において存在するのかを検証することであった。階層的クラスター分析の結果、BTP に類似したクラスターは抽出されたが、厳密に BTP に合致したクラスターが見出されなかった。この結果は、同様に厳密な BTP 判断基準を採用した McKay et al. (2019) の結果を追認したものである。すなわち Zimbardo & Boyd (2012) に示された BTP は、具体的なサンプルによっては存在しないことが示唆された。また、分散分析の結果を見ると、BTP と類似したクラスター3 は、総合的に主観的幸福感や精神的健康度が高かった。しかしながら、クラスター3 は「現在快楽」因子の得点が低い点においては BTP の規定得点と異なる。従ってクラスター3 が適応的であったという本研究の結果は、BTP における規定得点が真に理想的であることの支持と結論づけるには慎重になる必要がある。BTP クラスターが出現しなかったこと、そして BTP とは異なるクラスターが適応を示したという本研究の結果から、Zimbardo & Boyd (2012) の BTP 得点は、必ずしも絶対的かつ唯一の理想得点とは限らないことが示唆された。今後の研究は、多世代の参加者に対して、多様な従属変数を取り上げてさらに BTP の妥当性を検討することが期待される。

引用文献

- Zimbardo, P. G., & Boyd, J. N. (1999). Putting time in perspective: A valid, reliable individual-differences metric. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77(6), 1271–1288.
- Zimbardo, P. G., & Boyd, J. N. (2012). *Surveys*. Retrieved November 25, 2023, from <https://www.thetimeparadox.com/surveys/>.

未来展望と就職動機づけとの関連

—交差遅延効果モデルを用いた縦断データの検討—

○ 閻 琳 ・ 張 澤 ・ 白石 奈津栄 ・ 李 媚祺 ・ 鈴木 千晴 ・ 堀内 孝

(東海学院大学) (岡山大学) (岡山大学) (岡山大学) (立命館大学) (岡山大学)

キーワード：未来展望，就職動機づけ，交差遅延効果モデル

問題と目的

近年、景気の悪化などの社会情勢の変化とともに、大学生のキャリア意識の形成や就職活動への無気力化が問題とされており、就職活動における動機づけに関心が寄せられている。吉崎・平岡 (2015) では、自己決定性の高い動機づけ調整である「統合的同一化的調整」がキャリア探索との間に強い正の関連が見られ、キャリア探索における動機づけの重要性が示されている。動機づけの自己決定性に影響を及ぼす要因として未来展望が挙げられている。De Blide, Vansteenkiste, & Lens (2011)では、未来展望と内発的調整、同一化的調整、取り入的調整との間に正の相関が見られ、未来展望が動機づけを介して自己調整学習に影響を及ぼすことが指摘されている。本研究では、大学生の就職活動に着目し、未来展望と就職動機づけとの関連について検討することを目的とした。

未来展望 (Future Time Perspective) とは、個人が自分の将来に関して抱く知覚と期待と定義される (Carstensen, Isaacowitz, & Charles, 1999)。Brothers, Chui, & Diehl (2014)は、従来の「開放」と「制限」という2次元からなる未来展望に「曖昧」を加え、3因子構造からなる多次元未来展望尺度 (Multidimensional Future Time Perspective: MFTP) を開発した。「開放」は、「私は将来について考える時、良い出来事が起こるだろうと思う」や「私は将来が楽しみであり、希望と熱意を抱いている」のように、未来を開けたものと感じることである。「制限」は、「私は将来の時間があまり残されていないと感じる」や「私は将来の時間が限られていると感じ始めている」のように、未来を限られたものと感じることである。「曖昧」は、「私の未来は曖昧として不確かな気がする」や「私の未来は不確実である」のように、未来を曖昧と感じることである。本研究は、就職活動を行う先が見えない時期にある大学生を対象に、多次元未来展望尺度を用いて、未来展望が就職動機づけの自己決定性に及ぼす影響について検討を行う。

方法

調査協力者および手続き 大学1, 2年生の学生に対

して、クアルトリクスを用いて2時点で測定される縦断調査 (Time 1: 2023年5月中旬, Time 2: 2023年7月中旬) を行った。2時点双方で回答が確認された有効回答者80名 (男性18名, 女性62名, 平均年齢は18.45 ($SD=0.59$) 歳) を分析対象とした。

調査内容 (1) 未来展望: Brothers et al. (2014) の多次元未来展望尺度の邦訳版 (白石・堀内, 2022) (12項目) を用いて5件法で回答を求めた。(2) 就職動機づけ: 吉崎・平岡 (2015) の就職動機づけ尺度 (19項目) を用いて6件法で回答を求めた。(3) フェイスシート: 年齢, 性別, 出身地について尋ねた。

なお、本研究は、立命館大学における人を対象とする研究倫理審査委員会の審査と承認を経て実施した。

結果と考察

1. 各変数に関する検討

(1) 多次元未来展望尺度: Time 1 と Time 2 に対してそれぞれ因子分析 (最尤法, プロマックス回転) を行った結果、先行研究と同様の3因子構造が見られた (Time 1: $\alpha=.65\sim.85$, Time 2: $\alpha=.58\sim.86$)。

(2) 就職動機づけ尺度: Time 1 に対して因子分析 (主因子法, プロマックス回転) を行った結果、概ね先行研究と同様の4因子構造が見られたが、複数の項目において多重負荷が認められた。自己決定理論の高次因子の枠組みに従って、因子数を2と指定した因子分析を行ったところ、2因子構造が見られた。多重負荷が認められた2項目を除き、再度同様の因子分析を行った結果、2因子構造と項目の因子負荷パターンに変化はなく、多重負荷も認められなかった。第1因子は、外的調整と取り入的調整に関する項目からなり、「統制的な動機づけ」因子と解釈した。第2因子は、内発的調整と同一化的調整に関する項目からなり、「自律的な動機づけ」因子と解釈した。信頼性係数 α は.84~.88と高い値が示された。Time 2において、Time 1で得られた17項目に対して因子分析を行った結果、Time 1と同様の2因子構造が見られた ($\alpha=.86\sim.89$)。

2. 未来展望と就職動機づけとの関連

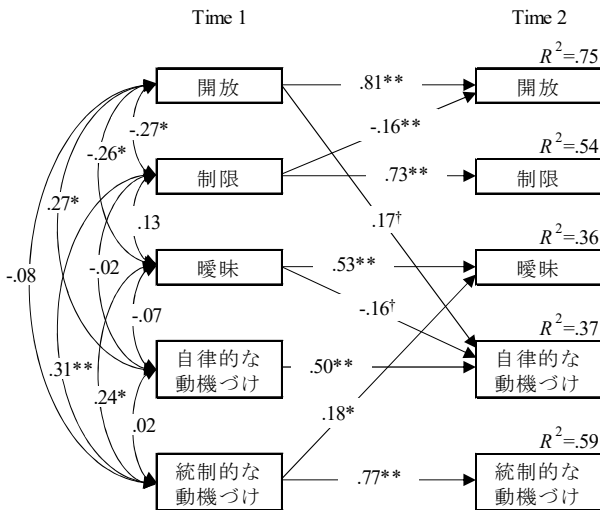
(1) 下位尺度毎に項目の加算平均を下位尺度得点として算出し、各下位尺度の記述統計量および相関係数を

Table 1 に示した。「自律的な動機づけ (Time 2)」に関しては、「開放 (Time 1)」との間に有意な正の相関 ($r=.36, p<.01$), 「曖昧 (Time 1)」との間に有意な負の相関 ($r=-.23, p<.05$) が見られた。「統制的な動機づけ (Time 2)」に関しては、「制限 (Time 1)」との間に有意な正の相関 ($r=.28, p<.05$) が見られた。

(2) 未来展望と就職動機づけとの関連を検討するため、交差遅延効果モデルによる分析を行った (Figure 1)。その結果、まず、Time 1 における各変数は Time 2 の同一変数をそれぞれ .50 以上の標準偏回帰係数 ($p<.01$) で予測することが示された。次に、「開放 (Time 1)」から「自律的な動機づけ (Time 2)」に有意傾向な正のパス ($\beta=.17, p<.10$), 「曖昧 (Time 1)」から「自律的な動機づけ (Time 2)」に有意傾向な負のパス ($\beta=-.16, p<.10$) が得られた。未来に対して夢や希望をもち、未来を開けたものと感じている人であるほど、自律的な動機づけで就職活動に参加することが明らかとなった。一方、未来の出来

Figure 1

未来展望と就職動機づけとの関連



注) 誤差項と誤差相関の図示は省略した。

† $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$

Table 1

各変数の記述統計量および相関係数

	M (SD)	Time 1					Time 2				
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
Time 1											
1. 開放 ($\alpha=.85$)	3.30 (0.88)	—									
2. 制限 ($\alpha=.80$)	3.21 (0.92)	-.27 *	—								
3. 曖昧 ($\alpha=.65$)	3.91 (0.60)	-.26 *	.13	—							
4. 自律的な動機づけ ($\alpha=.84$)	3.57 (0.74)	.27 *	-.02	-.07	—						
5. 統制的な動機づけ ($\alpha=.88$)	3.46 (1.02)	-.08	.31 **	.24 *	.02	—					
Time 2											
6. 開放 ($\alpha=.86$)	3.23 (0.94)	.85 **	-.38 **	-.19	.23 *	-.19	—				
7. 制限 ($\alpha=.82$)	3.50 (0.93)	-.17	.73 **	.10	-.06	.22 *	-.32 **	—			
8. 曖昧 ($\alpha=.58$)	3.95 (0.58)	-.21	.12	.57 **	-.12	.31 **	-.24 *	.25 *	—		
9. 自律的な動機づけ ($\alpha=.86$)	3.34 (0.82)	.36 **	-.15	-.23 *	.55 **	-.02	.32 **	-.05	-.15	—	
10. 統制的な動機づけ ($\alpha=.89$)	3.48 (1.07)	-.05	.28 *	.20	-.01	.77 **	-.15	.23 *	.36 **	.13	—

* $p<.05$, ** $p<.01$

事を予測することができなく、未来を曖昧と感じることが自律的な動機づけを抑制すると考えられる。

「統制的な動機づけ (Time 1)」に関しては、「曖昧 (Time 2)」に有意な負のパス ($\beta=-.18, p<.05$) が得られた。義務感や責任感、罰への回避などの外的要因に統制され、統制的な動機づけで就職活動を行うことによって、より未来を不確実で曖昧に感じるようになることが示された。モデルの適合度は $\chi^2(16)=8.04 (p=.95)$, GFI=.98, AGFI=.93, CFI=1.00, RMSEA=.00 であり、十分な適合度を有することが示された。

引用文献

- Brothers, A., Chui, H., & Diehl, M. (2014). Measuring Future Time Perspective Across Adulthood: Development and Evaluation of a Brief Multidimensional Questionnaire. *The Gerontologist, 54*, 1075-1088.
- Carstensen, L. L., Isaacowitz, D. M., & Charles, S. T. (1999). Taking time seriously: A theory of socioemotional selectivity. *American Psychologist, 54*, 165-181.
- De Blide, J., Vansteenkiste, M., & Lens, W. (2011). Understanding the association between future time perspective and self-regulated learning through the lens of self-determination theory. *Learning and Instruction, 21*, 332-344.
- 白石 奈津栄・堀内 孝 (2022). 多次元未来展望 (Multidimensional Future Time Perspective: MFTP) 尺度日本語版の開発と信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, *31*, 159-162.
- 吉崎 聡子・平岡 恭一 (2015). 自己決定理論に基づく動機づけと自己効力感からみたキャリア探索 心理学研究, *86*, 55-61.

親からの期待と青年期のアイデンティティ形成との関連

—きょうだいの有無に着目して—

○小柳 穂乃実 ・ 門田 昌子 ・ 武井 祐子

(川崎医療福祉大学大学院)(川崎医療福祉大学)(川崎医療福祉大学)

キーワード：親からの期待，アイデンティティ形成，きょうだい

問題・目的

青年期の発達課題の1つとしてアイデンティティの形成がある。アイデンティティ形成とは、自己の視点に気づき、他者の視点を内在化しながら、そこで生じた自己と他者の間の視点の食い違いを相互調整によって解決するプロセスである(池田, 2009)。谷(2001)は、アイデンティティは、「自己斉一性・連続性」「対自的同一性」「対他的同一性」「心理社会的同一性」の4つの次元から捉えることができると指摘している。

「自己斉一性・連続性」は、同一性の感覚における自己の不変性および時間的連続性についての感覚、「対自的同一性」は、自己意識の明確さの感覚、「対他的同一性」は、他者から見られているであろう自分自身が本来の自分自身と一致しているという感覚、「心理社会的同一性」は、現実の社会の中で自分自身を意味づけられるという、自分と社会との適応的な結びつきの感覚を表している(谷, 2001)。

これまでの研究では、青年期の子どもが認知している親からの期待が、青年期のアイデンティティ形成に影響していることが明らかとなっている(池田, 2009)。仲野・桜本(2006)は、親から注がれる期待が子どものアイデンティティ形成に与える影響を検討し、親からの期待を肯定的に受容している人間は、アイデンティティ形成も促進される傾向があると示している。また尾花他(2022)によると、親が子どもの教育や就職に対して強い期待を持つことは、アイデンティティの形成に必ずしもつながらない可能性が示され、受容的な親の養育態度が大学生のアイデンティティに部分的ではあるものの、ポジティブな影響力を有していることが明らかとなっている。

春日・宇都宮(2011)は、今後、少子化が進むことで、子ども一人当たりにかかる期待の変化が予想されることから、きょうだいの有無に着目した研究が必要であると指摘している。きょうだいの有無によって、親からの期待とアイデンティティの形成の程度に違いがある可能性があると考えられるが、これまでの研究ではきょうだいの有無について着目して検討されてきてはいない。そこで本研究では、きょうだいの有無によって、親からの期待とアイデンティティ形成の程度に違いがあるのかを確認した上で、親からの期待

と青年期のアイデンティティ形成との間の関連性を明らかにすることを目的とする。

方法

対象者

A県にある大学に通う大学生93名であり、有効回答数は89名であった(男性:28名, 女性60名, その他:1名, 平均年齢20.9歳)。

調査内容

フェイスシート 年齢, 性別, 出生順位, きょうだいの有無について回答を求めた。

親からの期待 春日・宇都宮(2011)が作成した「親の期待尺度」を用いた。この尺度は、「人間性期待」「教育就職期待」の2つの下位尺度から構成されており、計18項目である。それぞれの項目について7件法で回答を求めた。

アイデンティティ形成 谷(2001)の開発した「多次元自我同一性尺度」を用いた。この尺度は、「自己斉一性・連続性」「対自的同一性」「対他的同一性」「心理社会的同一性」の4つの下位尺度から構成されており、計28項目である。それぞれの項目について7件法で回答を求めた。

手続き

2022年10月下旬に講義の前後の時間を利用して質問紙調査を実施した。

倫理的配慮

本研究への協力に対する同意は自由意思であり、協力を承諾した場合でも回答の途中で中断できることを事前に伝えた。さらに、調査内容はプライバシーに関わるため、調査は無記名で行い、個人が特定されないように配慮して使用することや、調査結果は研究目的以外で使用しないことも併せて教示した。

結果

各変数の平均値と標準偏差

きょうだいがいる人(以下, きょうだい有り群)は78名, きょうだいがいない人(以下, きょうだい無し群)は11名であった。きょうだい有り群ときょうだい無し群の各変数の平均値と標準偏差をTable 1に示した。

きょうだいの有無による親からの期待及びアイデンティティ形成の違い

きょうだいの有無によって親からの期待及びアイデンティティ形成の程度に違いがあるのかを明らかにするために、対応のない *t* 検定を行った (Table 1)。

Table 1
各変数の平均値と標準偏差と *t* 値

	きょうだい有り群 (n=78)		きょうだい無し群 (n=11)		<i>t</i> 値
	平均値	SD	平均値	SD	
親からの期待尺度					
人間性期待	53.53	9.17	58.09	10.61	-1.05
教育就職期待	26.54	9.03	27.45	8.72	-0.46
多次元自我同一性尺度					
自己斉一性	21.36	9.54	20.75	7.54	-1.10
対自的同一性	19.64	8.97	20.14	7.04	-0.37
対他的同一性	19.55	5.05	21.14	6.88	-1.38
心理社会的同一性	20.00	4.27	20.82	3.98	-0.25

親からの期待の下位尺度である「人間性期待」尺度、「教育就職期待」尺度、アイデンティティ形成の下位尺度である「自己斉一性・連続性」尺度、「対自的同一性」尺度、「対他的同一性」尺度、「心理社会的同一性」尺度、全ての下位尺度において、きょうだいの有無によって、下位尺度得点に有意な差は認められなかった。

親からの期待尺度の下位尺度と多次元自我同一性尺度の下位尺度の関連

親からの期待の2つの下位尺度とアイデンティティ形成の4つの下位尺度の間の関連を確認するために、相関分析を実施した (Table 2)。親からの期待の下位尺度である「人間性期待」とアイデンティティ形成の全ての下位尺度との間に有意な正の相関関係が認められた。また、親からの期待の下位尺度である「教育・就職期待」とアイデンティティ形成の全ての下位尺度との間に有意な正の相関関係が認められた。つまり、親からの期待の高さはその期待の内容に関わらず、子どものアイデンティティ形成と関連することが明らかとなった。

考察

きょうだいの有無によって、親からの期待とアイデンティティ形成の程度に違いがあるのかを確認したところ、違いがないことが明らかとなった。苫米地 (2011) は、子どもの属性によって決定されるきょうだ

い構成の影響を受けて、親が特定の子どもに対して選択的に、高い教育期待を抱く可能性があることを報告している。つまり、きょうだいの有無、自身にきょうだいがいるかないかではなく、きょうだいの中でも、自身が長子なのか、次子なのかといった、その属性によって親からの期待が異なるため、きょうだいの有無といった要因では違いがみられなかったのではないかと考えられる。また、苫米地 (2011) は、親が戦略的に教育投資を行っているとは仮定するならば、親がそれぞれの子どもの異なる教育期待を抱いており、その教育期待にもとづいて投資がなされていると考えることができると指摘している。つまり、親はそれぞれの子どもの異なる期待を抱くものであり、きょうだいがいるか、いないかでは差が認められなかったのではないかと考えられる。

親からの期待尺度の下位尺度と多次元自我同一性尺度の下位尺度の関連について、それぞれ有意な正の相関が示された。尾花他 (2022) での研究では「人間性期待」と多次元自我同一性尺度の間に相関は見られず「教育就職期待」と多次元自我同一性尺度の下位尺度である「対自的同一性」との間には負の相関が見られた。本研究の結果と異なったのは親の期待と子ども自身が望んでいることの一致していたため、自己意識の確立につながったためと考えられる。

尾花他 (2022) での研究では「教育就職期待」とアイデンティティ形成の間に相関がみられたと述べられており、本研究結果と一致している。このことについて、親から子どもへかけられる期待が子どもの望む自己と一致しており、そのためアイデンティティ形成が確立されたためではないかと推察される。

今後の課題

本研究ではアイデンティティ形成と親からの期待である人間性期待と教育就職期待が関連していることが明らかとなった。神田 (2012) は、青年期は社会的に自己の役割を選択していくことが大切であり、自己を見つめながら行き方を真剣に考えていく時期であると指摘している。青年期のアイデンティティについてより詳細に明らかにするためには、自己の役割選択など、親からの期待以外の要因を取り上げ、アイデンティティ形成との関連を調査する必要があると考えられる。

Table 2
親からの期待尺度の下位尺度とアイデンティティ形成尺度の下位尺度の関連

親からの期待	多次元自我同一性尺度			
	自己斉一性	対自的同一性	対他的同一性	心理社会的同一性
人間性期待	.344*	.617**	.555**	.649**
教育就職期待	.290*	.459**	.474**	.491**

***p* < .01 **p* < .05

大学生における大学用語に対する理解度と 大学生活への適応感の関連

○廣瀬 結衣*・高橋 功*

(*山陽学園大学総合人間学部ビジネス心理学科)

キーワード：文化的教養，大学用語，適応感

問題と目的

文章というものには、十分な説明のないまま、読み手がその意味を知っていることを期待した語彙が多く用いられている。したがって、特定の文化の読み書きコミュニティに参加するためには、そうした語彙の習得が欠かせない。かつて Hirsch (1987/1989) は、これを文化的教養（あるいは背景知識）と呼んだ。

大学というコミュニティにおいても「シラバス」「単位」など様々な語彙が特有の意味で専門用語として用いられている。しかし、現状では、学生に対しそれらが丁寧に教授されていると言い難い。通常、大学の初年次教育で教えられるのは、学術文献の読み方や論文の書き方などの学問の初歩であり、そうした用語の解説ではない。多くの大学では、入学当初の短いオリエンテーション期間に主要な用語を概説するに留まっているようである。結果、大学や教員からの連絡や指示をよく理解できないまま学生生活を送っている学生も多いと推察される。このことは、大学生活への適応感にネガティブな影響を及ぼしているかもしれない(仮説)。

そこで本調査では、①大学で実際に用いられている大学用語を選定し、②大学生のそれらの用語に対する認知度および大学生活の適応感を調べ、③認知度と大学生活の適応感の相関関係、用語の既知数に基づいて群分けを行った場合の適応感の群間差を検討した。

方法

調査協力者 四年制私立大学の学部 1～4 年生 120 名

(男 28, 女 91, 回収率は .96)。回答に不備のあった者を除く 119 名を分析対象とした。2023 年 9 月に調査。

倫理的配慮 調査紙の表紙に、研究目的、個人情報の適切な取り扱い、統計処理されたデータ公表の断り、データの保管期間と廃棄方法について示し、調査協力が任意であることを明記した。回答は無記名であった。

大学用語の認知度の測定(大学用語認知度尺度) まず、大学でよく使われる用語を解説した web サイト (Benesse マナビジョンなど) 及び Chat GPT-4 を用いて項目の候補を収集した。そのうえで、調査者 2 名で「大学で実際に使われているか」、「大学生活を送るうえで知っておくべき用語であるといえるか」を基準に項目を選定した。選定の際は別々に作業を行い、意見

が不一致だった項目については協議を通して決定した。一致率は web サイトから収集したものについては .81, Chat GPT-4 に挙げさせたものについては .96 であった。

選定されたのは 22 項目であり、「0. 用語自体を知らなかった」とし、知っていた項目については「1. 全く知らなかった(用語自体は知っていた)」～「5. 非常によく知っていた」までの 5 段階でそれぞれ評定させた。

適応感の測定(青年用適応感尺度) 「青年用適応感尺度」(大久保, 2005) を用いた。この尺度は、学校生活で感じることに示した 30 項目を「1. 全く当てはまらない」～「5. 非常によく当てはまる」で 5 段階評定させるものである。4 因子で構成され、「居心地の良さの感覚」に関する 11 項目 (e.g., “周囲に溶け込んでいる”), 「課題・目的の存在」に関する 7 項目 (e.g., “将来役に立つことが学べる”), 「被信頼感・受容感」に関する 6 項目 (e.g., “周りから頼られていると感じる”), 「劣等感のなさ」に関する 6 項目 (e.g., “周りに迷惑をかけていると感じる” (逆転項目)) であった。

調査手続き 大学用語認知度尺度, 青年用適応感尺度の順に質問内容を示した。表紙を含めて 7 頁から成る A4 判冊子を作成した。これを各授業の始め、もしくは終わりに受講者に配布し協力を依頼した。回収は授業終了後、もしくは翌週の授業開始時に行った。

結果

大学用語認知度尺度の因子分析 全 22 項目のうち「用語自体を知らなかった」とした者の多い上位 6 項目を因子分析から除外した (Table 1)。残りの 16 項目に対し、ひとつでも「知らなかった」とした 40 名も除外した。すなわち、16 項目 79 名を因子分析の対象とした。

SPSS を用いて主因子法による因子分析を行ったところ、2 因子の累積寄与率が .60 を超えたため 2 因子構造が妥当であると判断した。そこで再度 2 因子を仮定して主因子法プロマックス回転による因子分析を行った (Table 2)。2 因子の累積寄与率は .63 であった。

第 1 因子は「単位」など履修に関わる用語に高い負荷量を示していたので、「履修制度因子」と命名した ($\alpha = .92$)。第 2 因子は「GPA」など学習成果に関わる用語に高い負荷量を示していたので、「学習成果因子」と命名した ($\alpha = .74$)。因子間相関係数は .71 であった。

大学用語の認知度と適応感の相関 各尺度の各因子の項目得点を参加者ごとに算出し、因子間の相関係数を算出した (Table 3)。大学用語の認知度の各因子 (履修制度, 学習成果) の項目得点と「課題・目的の存在」間のみ弱い正の相関 ($.25 \leq rs \leq .37$) が見られた。

大学用語の既知数による適応感の比較 大学用語の既知数に基づいて回答者を分類した。「用語自体を知らなかった」と回答した項目が 0 項目の者を「高既知群」($n=39$)、6 項目以下の者を「中既知群」($n=66$)、7 項目以上の者を「低既知群」($n=14$) とした。そのうえで適応感の各因子の平均項目得点を群ごとに算出した (Figure 1)。なお、適応感は因子間で項目数が異なるので、項目数で除して項目辺りの平均得点を算出した。因子ごとに一元配置の分散分析を行ったところ、「居心地の良さ」の主効果が中程度の効果量で有意であり ($F(2, 116) = 3.60, p < .05, f = .25$)、高既知群が低既知群よりも得点が高かった。「被信頼・受容感」の主効果も中程度の効果量で有意であり ($F(2, 116) = 6.92, p < .01, f = .34$)、高既知群が中既知群よりも得点が高かった。なお、多重比較の際の有意水準の調整は HSD 法による。

Table 1 「用語自体を知らなかった」回答者の多かった上位 10 項目

項目	n	度数	Rank
SA (スチューデントアシスタント)	119	56	1*
コンソーシアム	118	55	2*
プロジェクトベースの学習 (PBL)	118	44	3*
オフィスアワー	117	31	4*
他学部他学科履修制	118	29	5*
文献レビュー	119	26	6*
ポートフォリオ	118	25	7
レジュメ	117	14	8
キャリアセンター	119	9	9
エントリーシート	119	8	10

*因子分析から除外した項目

Table 2 大学用語認知度尺度の因子分析 (主因子法, Promax 回転)

項目	因子	
	I	II
オリエンテーション	1.002	-.140
キャンパス	.945	-.101
単位	.852	-.026
インターンシップ	.820	-.134
開講	.793	-.176
選択必修	.716	.206
再試験	.680	.204
カリキュラム	.664	.066
シラバス	.653	.306
ゼミ	.642	.151
エントリーシート	.505	.049
共通教育科目	.363	.184
GPA	.019	.865
レジュメ	.007	.769
ポートフォリオ	-.204	.539
キャリアセンター	.232	.487

Table 3 項目得点の因子間の相関 (r)

因子	①	②	③	④	⑤
① 履修制度	—				
② 学習成果	.64	—			
③ 居心地の良さ	.09	.18	—		
④ 課題・目的の存在	.25*	.37**	.73	—	
⑤ 被信頼・受容感	-.09	.16	.68	.62	—
⑥ 劣等感のなさ	.18	.12	.31	.21	.22

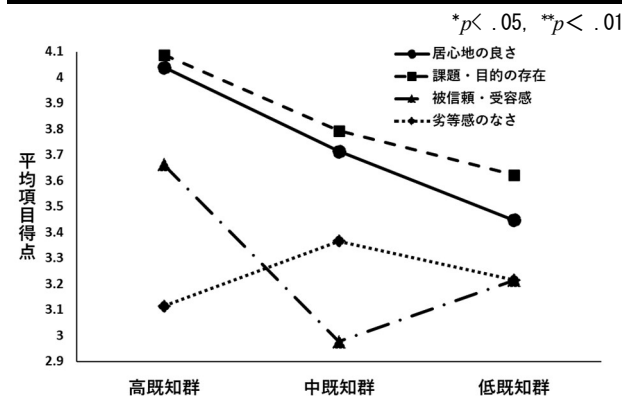


Figure 1 用語の既知数に基づく各平均項目得点の群間比較

考察

実験研究ではないので、因果の方向について注意を要することは承知のうえで、大学用語を知ることが適応感に影響を及ぼすというモデルに基づいて述べる。

大学用語の認知度の両因子の項目得点と「課題・目的の存在」との間のみそれぞれ正の相関が示された。このことは本研究の仮説を部分的に支持したといえるが、相関が弱かったこと、適応感の中でも「課題・目的の存在」は履修制度や学習成果に最も密接に関わる因子であると考えられることから、大学用語の認知度は、大学生の適応を論じる変数としては弱いものといえる。

一方、大学用語の既知数に基づく群間比較では、「居心地の良さ」と「被信頼・受容感」で既知数の多さの正の影響が中程度の効果量で示された。大学用語を知っていれば、学習や生活で不便を感じ難くなり、居心地が良くなったり、受け入れられていると感じたりするのかもしれない。あるいは、聞いたことのある言葉でコミュニケーションを展開されたときに覚える安心感、その逆の場合の疎外感が関わっているのかもしれない。

総じていえば、「大学用語の意味をよく知っている」ことより「その用語自体を知っている」ことが、大学への適応にポジティブな影響を与えることが示唆された。これが正しければ、たとえ簡潔にでも、まずは様々な用語の概説を学生に伝えることが重要といえよう。

引用文献

- Hirsch, E. D. (1987). *Cultural Literacy: What Every American Needs to Know*, Boston, Houghton Mifflin. (ハーシュ, E.D. 中村保夫 (訳) (1989) . 教養が国をつくる TBS ブリタニカ)
- 大久保智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用 適応感尺度の作成と学校別の検討—教育心理学研究, 53, 307-319.

青年期の愛着スタイルがもたらすインターネット上で 出会った相手への信頼感の差異

○森 詩媛 ・ 武井 祐子 ・ 高尾 堅司 ・ 寺崎 正治
(川崎医療福祉大学大学院) (川崎医療福祉大学) (川崎医療福祉大学) (川崎医療福祉大学)

キーワード：居場所，インターネット，愛着スタイル

問題・目的

居場所を獲得するには、時間的要因や空間的要因、さらには構成者数の要因など様々な条件を満たすことが必要である。しかし、スマートフォン等の電子機器を用いてインターネットを使用すれば、自分の都合の良いときにコミュニケーションを取りたい相手と連絡を取り合うことができる。すなわち、インターネット空間は現代社会の居場所を構成するものの一つとして位置づけられると考えられる。居場所について、伊勢・中野(2012)は、「信頼できる人に会うこと、気づくこと(伊勢・中野, 2012, p.74)」の重要性を指摘している。居場所だけでなく、対人交流においても信頼は重要な要素であり、相手への信頼の有無によって関係の継続も左右されかねない。

現実とインターネット空間における他者への信頼について、インターネット空間における他者への信頼の方が、現実より低くなっていることが示されている(総務省, 2018)。この原因として、インターネット上での対人交流においては、実際に会ったことがない相手とインターネット上で知り合うなど、必ずしも相手が特定されているとは限らないことが考えられる。また、信頼と関連が深いとされる愛着スタイルの概念も原因の一つであると推察される。愛着スタイルと現実における信頼の関連について、北村他(2014)は一般的な信頼感が安定型の人は有意に高いことを示している。さらに、恐れ型は他者への不信感が高く、安定型は不信感が低いことを示した知見もある(Bifulco & Thomas, 2013 林他訳 2017)。以上のように愛着スタイルと現実における信頼の関連を示した知見は存在するものの、愛着スタイルとインターネット空間における信頼の関連を示した知見は、管見の限り確認されていない。

そこで本研究では、青年期の愛着スタイルがもたらすインターネット上で出会った相手への信頼感の差異について明らかにすることを目的とする。また、他者という概念は広義であり、実体を伴う例もあれば、インターネット上のようにそうではない例もある。愛着スタイルと他者への信頼感の関連に頑健性が認められるのであれば、インターネット上で出会った他者への信頼においても同様の結果が確認されるのではなかろうか。そのため、本研究ではインターネット空間において安定型は他者への信頼

感が高く、恐れ型は信頼感が低くなるという仮説を設定した。

方法

調査対象者

中国地方に所在するある大学の心理学関連科目の受講生($n=184$)を対象に質問紙調査を実施した。欠損値のあったデータを除外した有効回答数は172(男性:55名, 女性:116名, その他:1名)であった。平均年齢は19.34($SD=0.99$)であった。

主要な質問項目

個人属性は、年齢、性別について回答を求め、ここ1カ月のSNSの利用頻度について4件法で回答を求めた。尺度は、一般他者を想定した愛着スタイルに分類するECR-GO(中尾・加藤, 2004)を用いた。この尺度は、見捨てられ不安因子18項目と親密性の回避因子12項目の計30項目で構成されている(7件法)。さらに、インターネット上で出会った相手に対する信頼感を測定する尺度(以下、インターネット上の相手に対する信頼感尺度)を新たに作成した。この尺度は、インターネット上で出会った相手との交流を描写したシナリオの登場人物である「相手」に対する信頼感を測定する計7項目から構成された(7件法)。また、作成する尺度の構成概念妥当性を確認するために、信頼感尺度(天貝, 1995; 天貝, 1997)の「他人への信頼」因子(計8項目)を用いた(6件法)。

倫理的配慮

本調査は、本学倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号:22-084)。

結果

統計処理は、HAD(version18.0)(清水, 2016)を用いて実施した。まず、インターネット上の相手に対する信頼感尺度の主成分を確認し変数を統制するため、インターネット上の相手に対する信頼感尺度に対して主成分分析を行った。その結果、各項目について一定の負荷量が確認されたため、第1主成分を採用し合成変数化して分析を進めることとした。次に、他者に対する一般的な信頼感とインターネット上の相手への信頼感の相関係数を算出した

結果、他者に対する一般的な信頼感とインターネット上の相手に対する信頼感との間に相関が確認された ($r(170) = .27, p < .01$)。そこで、本研究において作成したインターネット上で出会った他者に対する信頼感尺度は、一定の構成概念妥当性が確認されたものとしてみなし、これ以降の分析に用いることとした。

また、ECR-GO の見捨てられ不安、親密性の回避それぞれの下位尺度得点の平均値に基づいて分けたネガティブ群・ポジティブ群の組み合わせから、安定型、拒絶型、とらわれ型、恐れ型の 4 タイプに分類した。その上で、愛着スタイルがもたらすインターネット上の相手に対する信頼感の差異について検討するため、1 要因 4 水準の分散分析を行った (Table 1)。その結果、水準間に有意な差は認められなかった ($F(3, 168) = 1.58, p = .20, \eta_p^2 = .03$)。

水準間に有意な差が認められなかったことから、ECR-GO の 2 因子を平均値で群分けしたことで連続変数である ECR-GO 本来の情報量が損なわれた可能性が示唆される。そこで、インターネット上の相手に対する信頼感を目的変数、ECR-GO の 2 因子である見捨てられ不安と親密性の回避を説明変数とした重回帰分析を行った。その結果、見捨てられ不安傾向が高いほどインターネット上の相手に対する信頼感が高く、親密性の回避傾向が低いほどインターネット上の相手に対する信頼感が高いことが認められた。(見捨てられ不安: $\beta = .170, t(169) = 2.298, p = .023$; 親密性の回避: $\beta = -.217, t(169) = -2.934, p = .004$)。

考察

本研究の目的は、青年期の愛着スタイルがもたらすインターネット上で出会った相手に対する信頼感の差異について明らかにすることであった。現実空間において安定型は他者への信頼感が高く、恐れ型は信頼感が低くなるとされていたが、インターネット空間においては水準間に統計的に有意な差は認められなかった。安定型と恐れ型の間にインターネット上で出会った相手に対する信頼感に差異は認められなかったことから、本研究の仮説は支持されなかった。仮説が支持されなかった理由として、ICT リテラシーが剰余変数としてインターネット上の相手に対する信頼感に及ぼした影響とインターネット空間で出会った相手と共有する関心事の 2 点が考えられる。

ICT リテラシーの育成については様々な取り組みが行われており、総務省 (2007) は、小学校 5, 6 年生を対象とした育成プログラムを開発し、SNS 上でのコミュニケーションの適切な取り方や、情報発信の注意点などのテーマを含めた ICT リテラシー教育を行っている。以上のことから、電子機器の普及やインターネット利用時間の増加に伴い、様々な ICT リテラシーに関する教育や取り組みがなされてきていることが推察される。さらに、本研究の調査参加者は ICT リテラシー教育などに触れる機会が多かったことで、ICT リテラシーが高まっている可能性も示唆される。ICT リテラシーの定着度については不明瞭であり推測の域を出ないが、ICT リテラシーによる効果が愛着スタイルによる効果を相殺した可能性が無いとは断言できない。すなわち、ICT リテラシーという要因が剰余変数として働いた可能性が考えられる。

また、インターネット空間での他者との出会いについては好きな対象が共通していたり、同じ目的を共有したりする類似性を持つ相手である可能性が高いことが示唆される。本研究にて作成した尺度においても、共通の関心事を持っているという類似性を持つ相手としてシナリオを設定していた。こうした類似性を持つ相手であったことによって、信頼感が高まった可能性も考えられる。

また、ECR-GO の 2 因子がインターネット上の相手に対する信頼感に及ぼす影響を検討したところ、見捨てられ不安傾向が高いほどインターネット上の相手に対する信頼感が高く、親密性の回避傾向が低いほどインターネット上の相手に対する信頼感が高いことが認められた。内閣府 (2017) によると、自分の部屋や家庭 (実家や親族の家を含む) に次いでインターネット空間が居場所として認識されていることが示されている。この居場所の認識をもとに本研究の結果を解釈すると、見捨てられ不安傾向や親密性の回避傾向の高さが、インターネット空間を居場所化させる背景要因の一つとなっていることが考えられる。

引用文献

中尾 達馬・加藤 和生 (2004). 一般他者を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, 5, 19-27.

Table 1
愛着スタイルにおけるインターネット上の相手に対する信頼感

		安定型 (n=43)	拒絶型 (n=40)	とらわれ型 (n=37)	恐れ型 (n=52)	F
インターネット上の相手に対する信頼感	M	25.86	22.75	24.30	25.75	F(3, 168)=1.58
	(SD)	6.93	5.50	9.40	8.05	

学齢期を対象とした LGBTQ 啓発教材開発および 開発活動者の自尊感情と自己成長感について

○脇田藍・上地玲子

(山陽学園大学)

キーワード：LGBTQ, かるた, 高校生

問題

現在, LGBT という言葉は浸透しているが, 未だ LGBT 以外のセクシュアリティの認知度は低く, 性の多様性に関するさらなる啓発と発達段階に合わせた教育が求められている。しかし, 性の多様性について学齢期の子ども達でも理解できるような教材が不足しているという現状がある。そこで, 本研究では学齢期を対象に LGBTQ について遊びながら学べる教材として, A 大学のボランティアサークルの学生と近隣の B 高校の生徒の有志により「LGBTQ 啓発かるた」を開発した。

また, 箕浦ら(2013)は自尊感情において「自分自身に対する理解や知識に基づいて, 自己について判断された評価および感情であり, 比較的安定した個人特性」とし, 信野(2008)はストレスフルな出来事のあとでも自分が成長したという感覚である自己成長感が生じると述べている。そこで, 本かるたの開発活動に参加した高校生と不参加の高校生による自尊感情と自己成長感も併せて検討する。

目的

- 1.学齢期を対象に LGBTQ を啓発する教材として開発した「LGBTQ 啓発かるた」の制作プロセスを明らかにし, それを用いた活動の影響について考察を行う。
- 2.上記の開発活動に参加した高校生と不参加の高校生との自尊感情と自己成長感の差について検討する。

方法

- 1.「LGBTQ 啓発かるた」の制作プロセス

(1)制作期間：2022年7月17日～2023年1月

(2)制作手順：LGBTQ の基礎知識を身につけるため, 筆者らが B 高校生に向けて「LGBTQ 講座」を行った。この講座は参加自由であり, 参加者は 39 名であった。その後, 講座に参加した高校生の中からかるた制作の参加者を募り, A 大学の学生(6 名), B 高校の高校生(17 名)で制作を開始した。

かるたに使う 48 音の文言(読み札)をグループで分担して考えた後, ①取り札の裏に書く説明文, ②イラスト, ③英訳のうち希望する担当に割り振り, 3 グループに分かれて制作を進めた。なお, 制作を進める際は A 大学の学生が各グループのファシリテーターを務めた。

制作会議の回数は以下の通りとなっている。

- ・対面(大学生と高校生)・・・約 1 時間 30 分×6 回
- ・対面(大学生のみ)・・・約 30 分×1 回
- ・オンライン(大学生のみ)・・・約 1～3 時間×52 回

(3)工夫した点:①LGBTQ に関する理解を深めるため, 取り札の裏に文言の説明文を記載し, その文言の意味や思いを知ることができるようにした。②読み札にその文言の英訳を記載し, 英語も同時に学べる教材にした。③性には多様性があるため, かるたの内容が強制的にならないように優しい言葉遣いを心がけ, 学齢期の子どもでも理解できるようにした。④服の色など中性的なイメージの緑色を多く使用し, ジェンダーをなるべく出さないような人の描き方を意識した。

(4)啓発活動：完成したかるたを用いて, 近隣の小学校や中学校の授業で実施した。また, 複数の図書館や学校へかるたを寄贈し, さらに PDF データによる無料配布を行って世界中で活用できるようにした。

2.アンケート調査

対象者：LGBTQ 講座に参加した B 高校生 39 名

実施方法：Google フォームでアンケートにて, LGBTQ 講座の前後に回答を求めた。

調査項目：LGBTQ 講座前に, 自尊感情を測定するため

「2 項目自尊感情尺度」(箕浦ら,2013)を用い, 「非常にあてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の 5 件法で実施した。自己成長感の測定では「自己成長感尺度」(信野,2008)のうち「他者つながり感」因子の 8 項目を用いて 5 件法で実施した。

また, LGBTQ に関する知識・体験について, (1)「講座受講前から, LGBTQ という言葉を知っていますか」, (2)「LGBTQ の具体的な内容を知っていますか」, (3)「LGBTQ の人々に対する差別やいじめがあることを知っていますか」, (4)「LGBTQ に関する相談を受けたことがありますか」の 4 問を「はい」「いいえ」「自由記述形式」で回答を求めた。また, 講座後は感想を自由記述形式で回答を求めた。

結果

- 1.「LGBTQ 啓発かるた」は, 図 1 の通りである。



図1. LGBTQ 啓発かるた

2.アンケート調査結果は、開発活動に参加した高校生と不参加の高校生において t 検定を行ったが、いずれも有意差は見られなかった。

知識・体験についての回答は39名のうち、(1)言葉を知っている37名、(2)具体的な内容を知っている11名、(3)差別やいじめがあることを知っている23名、(4)相談を受けたことがある4名であった。講座後の感想のアンケートを分類法で分類したところ、開発活動に参加した高校生の方が、「自分達も線引きをせずに打ち解けやすくしていこうと思った」など、学びから実践しようとする言葉が多く見られた。

考察

LGBTQ 啓発教材として開発した本かるたを用いた活動の影響については、「LGBTQ」を啓発することを目的としたものは過去に存在しなかったため、手探りで進めていった。小中学校の授業では、かるたを通して楽しく学ぶことができ、LGBTQ について質問をする児童生徒も多く、関心を持つきっかけ作りになった。

認定 NPO 法人 ReBit(2022)の調査によると、授業でLGBTQ について教えた経験がある小学校教職員は31.0%であり、日常の中で性の多様性を尊重しない言動を見聞きしたことがあるのは小学生で63.2%、中学生では77.6%であることを報告している。本調査における高校生は、約1割が友人からLGBTQ の相談を受けた経験があるものの、具体的な内容を知らない割合が多かった。このことから、小学校から高校までの発達段階に応じた適切な知識を得ておくことが重要である。

本かるたは、用語の意味や性の多様性に関する言動についても取り入れているため、授業で性の多様性を多角的に教える方法として教職員の手助けになると考えられる。また、共にかるたを体験することにより、他者理解や自己受容などが高まりやすく、学校内での安心できる環境作りに繋がると考えられる。

今回の活動の様子は多くのメディアで取り上げられ、全国の学校や企業などから本かるたのデータ申し込みがあるなど反響もあった。本かるたの活用によって、自然と性の多様性について触れるきっかけ作りになる

ことが期待できる。

自尊感情と自己成長感の差については、有意差は見られなかった。自尊感情の高い人は意欲や自発性が向上し(Baumeister, et al.,2003)、客観的に同じ経験をして、それをストレスと認知するかどうか、後の対処の仕方を規定し、自己成長感をもたらす(神藤,1998)。今回の講座に参加した多くの高校生は、講座前からLGBTQ という言葉を知っているが、具体的な内容までは知らなかったため、開発活動の参加有無に関わらず、性の多様性について学ぼうとする意欲が高い集団であったと考えられる。また、講座後の感想から、開発活動に参加した高校生は、性の多様性を自分事として捉え、課題意識が高まったのではないかと考えられる。

最後に、性の多様性は人の数だけあり、また変化していく部分もあるため、今後はそれを考慮した工夫を加えて、本かるたを活用する必要があるだろう。

今後の課題

今後の課題として、LGBTQ に関する学習を受けておらず関心も薄い層といった幅広い世代の人達に対して啓発を行い、さらなる理解を広げることが必要である。

謝辞

本研究を進めるにあたり、かるた制作にご協力くださいました岡山県立岡山芳泉高等学校、山陽学園大学ボランティアサークルあい有志の皆様、かるた実施にご協力くださいました岡山市立豊小学校、山陽学園中学校の皆様にご心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1)神藤貴昭(1998).中学生の学業ストレスと対処方略がストレス反応および自己成長感・学習意欲に与える影響.教育心理学研究 46(4),442-451.
 - 2)信野良太(2008).自己成長感尺度作成の試み.北星学園大学大学院社会福祉学研究科北星学園大学大学院論集(11),125-136.
 - 3)認定 NPO 法人 ReBit(2022).「学校における性的指向・性自認に係る取り組み及び対応状況調査」<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000046.000047512.html>(2023年11月30日)
 - 4)箕浦有希久・成田健一(2013).2項目自尊感情尺度の開発および信頼性・妥当性の検討.感情心理学研究 25(1),37-4.
 - 5)Baumeister, R. F., Campbell, J. D., Krueger, J. I., & Vohs, K. D. (2003). Does high self-esteem cause better performance, interpersonal success, happiness, or healthier lifestyles?. *Psychological Science in the Public Interest*, 4, 1-44.
- 注)メディア報道：山陽新聞 2022.9.7 「かるたで性的少数者の理解深めて 山陽学園大と芳泉高有志が制作中」、レディオモモ 2022.11.5 「Do it now!〜今からできるSDGs」、RNC 西日本放送 2023.3.6 「かるたで学ぶ『性的マイノリティを』」、読売新聞 2023.4.12 「性の多様性 かるたで学ぶ 児童向け教材大学生ら作成」、KSB 瀬戸内海放送 2023.6.6 「大学生が『LGBTQ 啓発かるた』を作成し特別授業 遊びで小学生に『人権の大切さ』伝える」、RSK 山陽放送 2023.8.2 「『おおかやまSDGsフェア』に145ブース 高校生が回収した制服の端切れで小物作りをするワークショップも」、山陽新聞 2023.8.3 「SDGs意識高めて 初のフェア開幕 プースヤステージ」、山陽新聞 2023.8.29 「持続可能な世界へ 集い学ぶ」、OHK 岡山放送 2023.9.7 「『性を気にする人が出てくるかも...』と児童も理解 大学生が『LGBTQ 啓発かるた』で特別授業」、山陽新聞 2023.9.24 「性の多様性 かるたで理解 山陽学園大サークル作成 授業活用へデータ配布」

自己志向的完全主義傾向者のコーピング方略

——主観的幸福感からの検討——

○東 加奈子 ・ 武井 祐子 ・ 則武 良英 ・ 寺崎 正治

(川崎医療福祉大学大学院) (川崎医療福祉大学) (川崎医療福祉大学) (川崎医療福祉大学)

キーワード：自己志向的完全主義，主観的幸福感，コーピング

問題・目的

多くの人は失敗をできる限り避けようと注意を払う。自己志向的完全主義とは自己に完全性を求めることと定義される。自己志向的完全主義は多次元が想定されており、特に Frost et al. (1990) は、高目標設置傾向 (Personal Standard : PS)，失敗懸念傾向 (Concern over Mistakes : CM)，行動疑念傾向 (Doubting of Actions : D) の3次元を提唱している。彼らの3次元の中でも、PS傾向は精神的健康指標と正の関連があり、一方で、CM傾向は精神的健康と負の関連がある(桜井・大谷, 1997)。そこで本研究でもPS傾向を適応的完全主義、CM傾向を不適応的完全主義とする。

自己志向的完全主義傾向の個人差が、ストレス対処法のコーピングを説明する(羽吹, 2006)。コーピングは問題焦点型と情動焦点型に分けられ、前者は、情報収集や再検討などの問題解決に直接関与する行動であり、後者は、注意を切り替えたりして気持ちを調節するための行動だとされている(尾関, 1993)。

コーピングの個人差を検討する上では、完全主義傾向以外の要因も含めて検討する必要がある。コーピングにおいては、抑うつ、情緒的消耗感などが阻害要因であり(橋本・子安, 2012; 則武他, 2020)、健康状態の良好さも重要な要因の一つである。健康状態の肯定的な指標として主観的幸福感があり、橋本・子安(2012)及び則武他(2020)の知見を踏まえると、主観的幸福感

はコーピングの促進要因になる可能性がある。したがって本研究では、主観的幸福感の程度から、自己志向的完全主義傾向者がどのようなコーピング方略を用いるのか明らかにすることを目的とする。

本研究の仮説として、第一に、PS傾向が高く主観的幸福感も高い者は、問題焦点型コーピングの使用傾向が高いと予想される。なぜならPS傾向が高く主観的幸福感も高い者は、自分に高い目標を課し、前向きに問題に対処すると考えられるためである。第二に、CM傾向が高く主観的幸福感が低い者は、情動焦点型コーピングの使用傾向が高いと予想される。なぜならCM傾向が高く主観的幸福感が低い者は、失敗懸念による自らの不健康な精神状態に囚われ、その対処をしようとすると考えられるためである。

方法

対象者 大学生 121 名に対して質問紙を配布した。調査の同意が得られたデータを分析対象とした。その結果、同意が得られた 117 名(男性 32 名、女性 84 名、性別不明 1 名; 平均年齢 18.82 歳, $SD = 4.07$) を分析対象とした。

質問紙 年齢等の基本属性の回答はフェイスシートで記入を求めた。自己志向的完全主義傾向 自己志向的完全主義をより構造的に捉える尺度 (Multidimensional Self-oriented Perfectionism Scale : MSPS) (桜井・大谷, 1997) を使用した。下位因子として「自分に高い目標を課する傾向 (PS)」「ミス (失敗) を過度に気にする傾向 (CM)」の 2 因子、各 5 項目、計 10 項目から構成され、それぞれの項目に対して 5 件法で回答を求めた。

主観的幸福感 主観的幸福感尺度 (伊藤他, 2003) を使用した。全 15 項目 4 件法で回答を求めた。**コーピング方略の使用傾向** コーピング尺度 (尾関, 1993) を使用した。全 14 項目 4 件法で回答を求めた。

手続き 調査は無記名で集団で実施された。

倫理的配慮 調査は無記名であること、回答しないことによる不利益は一切ないこと、結果は研究のためにのみ使用することを説明した。研究で得られたデータは、厳重に保管し管理した。

結果

各変数の平均値と標準偏差, α 係数, 相関係数

各変数の平均値と標準偏差, α 係数, 相関係数を Table 1 に示した。 α 係数は、概ね良好で安定した内的整合性が示された。CM 傾向と情動焦点型コーピングは有意な正の相関を示した。主観的幸福感と問題焦点型コーピング、主観的幸福感と情動焦点型コーピングも有意な正の相関を示した。一方、PS 傾向と問題焦点型コーピング、高目標設置傾向と情動焦点型コーピング、失敗懸念傾向と問題焦点型コーピングは無相関だった。

Table 1
各変数の平均値, 標準偏差, α 係数, 相関係数

	M	SD	α	問題焦点型 コーピング	情動焦点型 コーピング
MSPS 高目標設置(PS)傾向	3.12	0.81	.78	.14	.03
失敗懸念(CM)傾向	2.48	0.87	.81	-.11	-.28 **
主観的幸福感	2.50	0.49	.88	.34 **	.38 **

注) ** $p < .01$

コーピング方略における自己志向の完全主義傾向と主観的幸福感の関連

問題焦点型コーピングを目的変数として、Step1 に CM 得点と主観的幸福感得点、Step2 に交互作用項を投入した階層的重回帰分析、そして、Step1 に PS 得点と主観的幸福感得点、Step2 に交互作用項を投入した階層的重回帰分析を実施した (Table 2)。その結果、どちらの分析でも主観的幸福感得点が正の関連で、交互作用項は非有意であった。

Table 2
問題焦点型コーピングを目的変数とする階層的重回帰分析

Step	説明変数	目的変数：問題焦点型コーピング	β	R^2	補正 R^2	ΔR^2
1	失敗懸念 (CM) 得点		-.07	.12 **	.11 **	
	主観的幸福感得点		.34 **			
2	交互作用項		-.07	.13 **	.10 **	.00
Step	説明変数	目的変数：問題焦点型コーピング	β	R^2	補正 R^2	ΔR^2
1	高目標設置 (PS) 得点		.07	.12 **	.11 **	
	主観的幸福感得点		.33 **			
2	交互作用項		.04	.13 **	.10 **	.00

注) ** $p < .01$

情動焦点型コーピングを目的変数として、Step1 に CM 得点と主観的幸福感得点、Step2 に交互作用項を投入した階層的重回帰分析を実施した。その結果、失敗懸念得点が負の関連、主観的幸福感得点が正の関連で、交互作用項は非有意であった。Step1 に PS 得点と主観的幸福感得点、Step2 に交互作用項を投入した階層的重回帰分析を実施した (Table 3)。その結果、主観的幸福感得点のみ有意で、交互作用項は非有意であった。

Table 3
情動焦点型コーピングを目的変数とする階層的重回帰分析

Step	説明変数	目的変数：情動焦点型コーピング	β	R^2	補正 R^2	ΔR^2
1	失敗懸念 (CM) 得点		-.24 **	.20 **	.19 **	
	主観的幸福感得点		.36 **			
2	交互作用項		-.10	.21 **	.19 **	.21
Step	説明変数	目的変数：情動焦点型コーピング	β	R^2	補正 R^2	ΔR^2
1	高目標設置 (PS) 得点		-.05	.15 **	.13 **	
	主観的幸福感得点		.39 **			
2	交互作用項		.05	.15 **	.13 **	.00

注) ** $p < .01$

考察

本研究の目的は、主観的幸福感の程度から、自己志向の完全主義傾向者がどのようなコーピング方略を用いるの明らかにすることであった。

まず、第一の仮説について、PS 傾向が高く主観的幸福感も高い者は、問題焦点型コーピングの使用傾向が高いという結果は得られず、仮説は支持されなかった。また、PS 傾向が高い者が問題焦点型コーピングの使用傾向が高いという結果も得られなかった。加藤 (2001)

では、コーピングの柔軟性の富む者は精神的に健康であると指摘されている。つまり、PS 傾向が高く主観的幸福感も高いという所謂“適応的な完全主義者”は、問題焦点型コーピングのみを用いるのではなく、状況に応じてあらゆるコーピングを使用しているのだと考えられる。

第二の仮説について、CM 傾向が高く主観的幸福感が低い者は、情動焦点型コーピングの使用傾向が高いという結果は得られず、仮説は支持されなかった。しかしながら、CM 傾向者は情動焦点型コーピングの使用傾向が低いという、本研究の予想とは真逆の結果が得られた。この結果は、中川・佐藤 (2007) の研究結果と一致する。結果の原因について中川・佐藤 (2007) は、過度に失敗を気にして自分の行動に対する自信が喪失していると、ストレスイベントに遭遇した際、いかに失敗を回避あるいは最小限にとどめるかに意識が向き、自己の感情をコントロールできないのではないかと指摘している。つまり、ストレスイベントに曝された時、不適応的な完全主義者は問題解決にばかり注力してしまうために自身の感情に意識を向けることは難しいといえよう。

今後の展望

コーピングの柔軟性が高い者は精神的に健康である (加藤, 2001) ことを考慮すると、問題焦点型コーピングだけでなく情動焦点型コーピングも使用しなければ、不適応的な完全主義者の精神的健康は低いままであると考えられる。今後の研究では不適応的な完全主義者でも用いることのできる情動焦点型コーピングを明らかにすることで、不適応的な完全主義者の精神的健康の向上に寄与できると考える。例えば、完全主義と反芻には正の関連があることが指摘されている (伊藤他, 2001)。Gamefski et al. (2001) は、情動焦点型コーピングの下位分類に反芻があり、反芻を不適応的な方略として分類している。しかしながら、反芻には適応的な反芻である具体的反芻がある (Watkins, 2008)。以上のように情動焦点型コーピングをより細分化して検討していくことで、不適応的な完全主義者でも用いることのできる情動焦点型コーピングを明らかにできると考えられる。

主な引用文献

- 中川 明仁・佐藤 豪 (2007). 完全主義とコーピング方略との関連性についての検討
日本心理学会第 71 回大会発表論文集.
桜井 茂男・大谷 佳子 (1997). “自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係 心理学研究, 68, 179-186.

「LGBTQ 啓発かるた」を使った ワークショップに参加した小学生の心理的变化

○中村文香・上地玲子
(山陽学園大学)

キーワード：LGBTQ, かるた, 小学生

問題

現在、性の多様性が広がり、2023年6月にLGBT理解増進法が成立し、LGBTや性の多様性などに注目が高まりつつある。しかしその一方で、現在でもLGBTQなどを理由にいじめや差別、偏見があるのが現状である。中塚(2015)によると中学生までには約9割が性別違和感をもっており、クリニックを受診している当事者の中で約半数の58.6%が自殺念慮を抱いており、自殺・自殺未遂(28.4%)、不登校(29.4%)を経験する割合も高かった。また、日高(2020)によると、LGBTの10代当事者が学校生活で47.4%が、「いじめ被害の経験あり」と回答(前回調査49.4%)、社会人当事者では78.9%が、「職場で差別的な発言を聞いた経験がある」と回答(前回調査70.8%)としている。

学校現場においては、性の多様性について教わったことがある20代は24.5%、20~50代の全体で10.4%であった。LGBTQや性の多様性についての児童や生徒に向けた絵本や書籍はあるが、人権教育でLGBTQを扱う際に、小学校での教材が不足しているという現状がある。

そこで、LGBTQについて遊びながら学べる教材として、A高等学校とB大学のボランティアサークルの有志で「LGBTQ 啓発かるた」の制作を行った。本研究を進めることによって、低年齢のうちからLGBTQなどの性の多様性をLGBTQの当事者だけでなく、周囲の児童・生徒と一緒に学びきっかけの1つとなり、いじめや偏見、差別が減少するだけでなく、必要な配慮や当事者が生活しやすい様になる、きっかけとなるのではないだろうか。

目的

本研究は、脇田ら(2023)が作成した「LGBTQ 啓発かるた」を用いた効果的な指導方法を検討する。具体的には、小学校において実施するための指導案を作成し、その影響について検討する。

方法

調査方法は、7段階の質問紙法を実施した。

(1) 参加者

近隣のC小学校に通っている、小学6年生51名が参加した。

(2) 質問内容

本調査では、葛西(2021)のセクシュアル・マイノリティに関する意識調査を使用した。また、理解度に関する質問1項目を追加し、計11項目を7段階で回答を求めた。

(3) 指導案

1クラス1コマの45分授業で「LGBTQ 啓発かるた」の制作に関わった有志の大学生と協力して素案・原案作成、担当教諭に確認してもらった後に指導案を作成した。

結果

指導案として、単元名を『「LGBTQ」って何だろう?』とし、単元目標は、「かるたを通してLGBTQについて理解し、日常生活にある何気ない偏った認識に気付くと共に、多様な性の考え方を身につけ、思いやりの心を育む」とした。

表1 指導と評価の計画

次(分)	ねらい・学習活動	知 技	思 判 表	態 度	評価規準及び評価方法
00:00 (2分)	○めあて、挨拶				この授業のめあてを言う。
02:00 (8分)	○LGBTQの意味について説明 (パロポを用いて説明) ・LGBTQの意味を知る。 ・性の多様性について気付く。	① ②	① ②	①	・LGBTQの意味を理解している。 (発言内容,行動観察)
11:00 (20分)	○「LGBTQ啓発かるた」の実施 ・LGBTQに関する事柄について知る。 ・自分自身や周りにある偏った認識に気付く。 ・LGBTQの意味について確かめる。	① ②	① ②	①	・LGBTQについてさらに理解を深めることができる。(発言内容,行動観察) ・LGBTQの実態を理解しようとしている。(発言内容,行動観察) ・性の多様性について少しでも身近に感じられている。(発言内容,行動観察) ・性の多様性について関心を持つようとしている。(発言内容,行動観察) ・自分自身や周りの今までの言動を見つめようとしている。(発言内容,行動観察) ・思いやりのある言動をしようとしている。(発言内容,行動観察)
31:00 (10分)	○事後アンケート				大学生の卒業研究のため、児童にアンケートを行う。
41:00 (2分)	○まとめ ・性の多様性について確かめる。 ・性の多様性について考える。	① ②	① ②	①	・思いやりのある言動をしようとしている。(発言内容,行動観察) ・性の多様性について関心を持ち、調べようとする。(発言内容,行動観察)
45:00	○終了				

小学生51名分のデータをExcelにまとめ、その内3名は未記入などの不備があったため、最終有効回答数は48名分とした。

最終有効回答数 48 名分を質問項目(1)~(11)ごとの前後に分け、対応のある *t* 検定を行った。

t 検定の結果、質問(3)・(9)・(10)以外では有意差が見られた。

表2 授業前後における質問項目 *t* 検定

		平均値	N	標準偏差	t 値
(1)セクシュアル・マイノリティという言葉を知っていましたか	授業前	1.44	48	1.236	-15.006**
	授業後	5.75	48	1.781	
(2)セクシュアル・マイノリティの知り合いがいますか	授業前	1.71	48	1.725	-2.275*
	授業後	2.13	48	1.953	
(3)セクシュアル・マイノリティの友達がいいますか	授業前	1.81	48	1.898	-1.681
	授業後	2.10	48	2.086	
(4)人に、セクシュアル・マイノリティについて説明できますか	授業前	1.29	48	.898	-8.811**
	授業後	3.96	48	2.010	
(5)セクシュアル・マイノリティについてもっと知りたいと思えますか	授業前	3.69	48	2.451	-6.661**
	授業後	5.88	48	1.453	
(6)LGBTQ という言葉を知っていましたか	授業前	4.13	48	2.573	-6.839**
	授業後	6.54	48	1.051	
(7)同性愛と性別違和(旧「性同一性障害」)の違いがわかりますか	授業前	3.29	48	2.617	-7.961**
	授業後	6.15	48	1.399	
(8)セクシュアル・マイノリティの人と友達になりたいと思えますか	授業前	4.13	48	2.275	-6.083**
	授業後	5.83	48	1.589	
(9)「ホモ」おこま」というような言葉でからかわれた人が周りにいましたか	授業前	1.50	48	1.368	1.401
	授業後	1.40	48	1.300	
(10)セクシュアル・マイノリティに關したことでいじめられた人はいましたか	授業前	1.08	48	.347	.443
	授業後	1.06	48	.245	
(11)授業の前と後で理解度は上がりましたか	授業前	2.71	48	1.901	-11.857**
	授業後	6.17	48	1.358	

考察

本研究の目的は、「LGBTQ 啓発かるた」を制作し、本かるたのワークショップに参加した小学生が「LGBTQ」に対して意識がどのように変化にどのように影響を及ぼすのか検討し、適切な啓発活動に寄与するための示唆を得ることであった。

児童自身がワークショップを受け、学んだことを咀嚼し再思考することで、過去に出会った子やクラスの子など周囲のことで、ワークショップでの内容を照らし合わせ、過去の行動や言動が LGBTQ などのセクシュアル・マイノリティに当てはまるのかもしれないと考えることができるようになったのではないだろうか。この考察から、ワークショップを通して児童自身が周囲の人へ配慮やセクシュアリティについて考えるきっかけづくりへの手助け、知識を持って周囲に少しでも意識を向けることできたと捉える。

篠部(2002)によると、「既知の情報以外の内容は新しい知識の習得に寄与するが、ゲームでの瞬時の理解・判断は困難である」と述べている。しかし、今回のワークショップ形式で実施した後、多くの項目において実施後の方が有意に理解度が向上したことから、遊びながら親しむことにより、LGBTQ についての知識を深めることができたと考えられる。しかし、ゲームにおける理解度をさらに上げるためには、一回一回札を取る

たびに考える時間を取るなどの工夫をすることを実施すると、さらに理解度を高める効果があるのかもしれない。このように、かるたを用いた活動によって、身近な遊びの中から LGBTQ 等について触れ、学ぶ機会を手軽に設けることができるのではないだろうか。

今後の課題

身近に LGBTQ のある方がいない場合は、意識化しにくいいため、より深く理解させるためには、カードに書き込まれた説明を読む時間を作り、発達段階に応じた解説を与えることが求められる。

今後の啓発活動では LGBTQ など性の多様性について知る機会をかるたで作ることで、少しでも LGBTQ の取り巻く現状への興味・関心や理解を深め、当事者だけでなく様々なセクシュアリティの人が生活しやすい環境への配慮をかるたを通して広めていけるようになっていきたい。また、かるたの対象は学齢期を想定しているが、A 大学のボランティアサークルの学生が HP で配布している PDF データを活用し、家庭でも LGBTQ 啓発かるたを通して、親子間でのギャップ解消や祖父母世代にもセクシュアル・マイノリティとは何かを学ぶ機会作りの 1 つのアイテムとして活用していきたい。

謝辞

本研究を進めるにあたり、芳泉高等学校有志の皆様、豊小学校の皆様、山陽学園大学のボランティアサークルあい有志の皆様にご心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1)葛西真記子(2021).中学生・高校生の「性の多様性」への意識調査:徳島県の中学生と高校生を対象に. 鳴門教育大学研究紀要(36), 1-10
- 2)篠部裕(2002).街づくり学習かるたを用いた都市計画の基礎知識の学習方法. 日本都市計画学会学術論文.(37)439-444
- 3)宝塚大学看護学部日高教授 第2回LGBT当事者の意識調査 (ライフネット生命委託調査)<https://www.lifenet-seimei.co.jp/shared/pdf/20208-31-news.pdf>(2023.7.25)
- 4)dentsu NEWS RELEASE(2021).電通,「LGBTQ+調査2020」を実施 <https://www.dentsu.co.jp/news/release/pdf-cms/2021023-0408.pdf>(2023.7.25)
- 5)中塚幹也.岡山市の職員が知っておきたい性的マイノリティ(LGBT)の基礎知識 <https://www.city.okayama.jp/kurashi/cmsfiles/contents/0000003/3107/000375143.pdf>(2023.7.25)
- 6)認定NPO法人 ReBit(監修),電通ダイバーシティ・ラボ(企画/原案)(2022).みんな知りたい LGBTQ+(全5巻).文研出

コロナ禍における友人関係

○黒住 若葉・上地 玲子

山陽学園大学

キーワード：コロナ、友人関係、高校生、SNS

問題

コロナによって、人との距離を取ることを余儀なくされたことによって、友人も作りづらく、関係も薄くなっている。マスク着用義務がなくなった今でも、手放せずマスク越しで交流する若者や瞬間的に自分の言葉を共有できる SNS が普及し、顔を隠したコミュニケーションが増えてきている。

目的

高校時代にコロナ禍でマスク生活を余儀なくされたことや外出自粛により一層普及された SNS を使ったコミュニケーションが友人関係にそのような影響を及ぼしたのかを調査するため以下の 3 つのリサーチクエスチョンをたて検証し、「マスクの着用」と「SNS の利用」の共通点を明らかにする。

1. 脱マスクの動きが大きくなってきた現在、マスクをし続ける理由は性格によってマスクへの意識の違いがあるのではないか。
2. マスクの着用は友人関係に影響を及ぼしている。
3. SNS の得意苦手は友人関係に影響し、SNS 内外で何らかの差があるのではないか。

方法

対象者：A 大学 1 年生 51 名

実施方法：Google フォームによる回答を得た。

調査項目：「自己愛的脆弱性尺度」(上地・宮下,2005)のうち「承認・賞賛への過敏さ」と「自己顕示抑制」因子を用い、「よくある」「ときどきある」「たまにある」「めったにない」「まったくない」の 5 段階で回答を得た。また、高校生時代を回想してもらい、友人関係・SNS について 5 つの項目に複数選択にて回答を得た。SNS が苦手と回答した生徒にのみ「LINE 尺度」(時岡ら,2017)を用い、「よくある」「ときどきある」「たまにある」「めったにない」「まったくない」の 5 段階評価で回答を得た。さらに、現在のマスクの着用について 4 つの項目に選択・記述で回答を得た。

結果

1. 脱マスクと性格

承認・賞賛への過敏さの得点の差について、マスク着用を継続する人と継続しない人で t 検定を行ったところ、有意差は見られなかった。また、自己顕示抑制の得点の差について、マスクの着用を継続する人と継

続しない人で t 検定を行ったところ、平均点の差に有意差は見られなかった。

2. マスクの着用と友人関係

コロナが収束したのちもマスク着用する人は、マスクを着用する理由として、感染予防関係ない「マスクをしていれば、気持ちが落ち着く」「マスクは自分の表情を隠すのに役立つ」の回答が多くみられた。マスク着用を継続する人は「マスクをしていれば、気持ちが落ち着く」「マスクは自分の表情を隠すのに役立つ」の回答が多く、自身の保護を目的としている。マスク着用を継続しない人は「マスクをしていれば、相手にうつつ心配がない」「まわりをしているから」の回答が多くみられた。

次に、「マスクの着用を継続する人」と「しない人」で「リアルで心の結びつきや絆を感じる相手の人数」の平均の差について t 検定を実施したところ、「マスクを継続しない人」の方が絆を感じる相手の人数が有意に多かった。

3. SNS の苦手意識と友人関係

SNS でのコミュニケーションが苦手に思っている人は 22% とかなり少ない。SNS が苦手であっても、リアルで心の結びつきを感じる相手の人数は 2~5 人と回答した人が最も多く、深い友人関係は作れていた。対して SNS でコミュニケーションをとるのが苦手な人の過半数はネット上で心の結びつきを感じる相手は 0 人であると回答している。

SNS でコミュニケーションを取っている中で苦手と感じる瞬間についての 7 項目を「よくある」「ときどきある」「たまにある」「めったにない」「まったくない」の 5 段階評価で回答を得た。

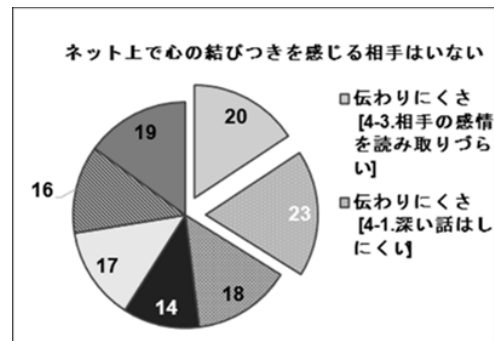


図1 ネット上で心の結びつきを感じる相手がない人と SNS の苦手意識

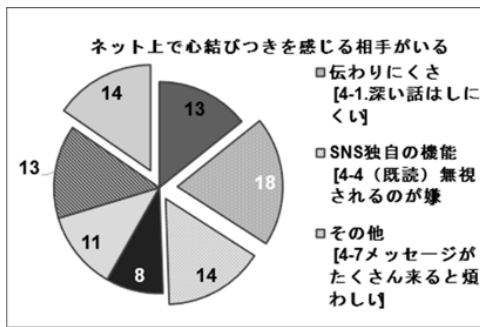


図2 ネット上で心の結びつきを感じる相手がいる人とSNSの苦手意識

ネット上で心の結びつきを感じる相手がない人は、「深い話はしにくい」「相手の感情を読み取りづらい」に高得点をつけており、SNSの伝わりにくさに苦手意識を示していた(図1)。全体的にどの項目も得点が高く、苦手意識を感じる瞬間が多い。ネット上で心の結びつきを感じる相手がいる人は「深い話はしにくい」「(既読)無視されるのが嫌」「メッセージがたくさん来ると煩わしい」に高得点をつけていた(図2)。性格面では、ネット上に心の結びつきを感じる相手がない人は、自己顕示抑制の得点が高かった。

考察

コロナ収束後にマスクを着用し続ける原因は結果からマスクの着用を継続しない人は感染予防や周囲の同調圧力がと考えられる。マスクの着用を継続する人は「顔へのコンプレックスやコミュニケーションをとることへの不安が原因だ」と考えられる。山口(2021)は、この現象を「顔パンツ化」と称している。人に会う合わない関係なく、マスクを付けたくなる心理状態に陥っていることが考えられる。マスクは人間と単純な顔認識システムの知覚的な顔照合タスクを実行する能力を損なうことが明らかにされており(Carragher, Hancock, 2020)、マスクは相手の顔を認証することを妨げ、自身の匿名性を守ることに繋がる。このことを利用して、コロナが収まりつつある現在、高校生にとってマスクの着用は感染予防ではなく、自身を守る手段となっている。

次にマスクの着用が友人関係に与える影響について、マスクの着用を継続すると答えた人は、リアルで心の結びつきを感じる相手が少ない傾向にある。

マスクを継続する人はリアルでコミュニケーション取る際に、対面で会っているのに顔が見えず、マスクによって自身を守ろうとするため深い関わりを作りにくいと考えられる。ネット上で心の結びつきや絆を感じる相手の人数の差に有意差が出なかったのはもともと顔を見て話すことは想定されており、表情がみえないことを理解して、交流を行うためだと考えられる。このようなネット上の特性による、伝わりにくさに苦手意識を持っており、SNSでコミュニケーション

をとることを苦手と感じている人が少数だが存在する。リアルな友人関係は築けていても、ネット上でコミュニケーションをとるのが苦手な人の過半数はネット上で心の結びつきを感じる相手は0人であると回答している。ネット上で友人がいる人にはSNS内の友人にもリアル同様の心のつながりを感じ、情を持って接しているからこそ、無視されるのを恐れたり、「早く返さないと」と思ってしまったたりするため、たくさんのメッセージがくることを煩わしく感じる。いない人はSNSを利用して、苦手意識を感じる瞬間が多い。特にSNSの伝わりにくさを特に苦手にしており、SNSは伝わらないものだとして理解しており、表面上の付き合いとしてとらえているから、ネット上で心の結びつきを感じる相手がない。性格面では、ネット上に心の結びつきを感じる相手がない人は、「自己愛的脆弱性尺度」の結果、自己顕示抑制の得点が高く、自己表現することを恥ずかしく感じて抑制するため、SNS内でも話す内容に一線を引いており、素をあまり出さないことも原因として考えられる。

マスクの着用とSNSの「匿名性」という共通点に主眼を置いた。どちらも自身を守る盾であることが言える。しかし、友人関係を作る上でこの匿名性は、深い関係づくりの妨げになっている。そのため、自分の考えや意見を正直かつ敬意を持って共有するコミュニケーションを大切にしたい。

謝辞

最後に、本研究にあたりアンケートに協力して下さいました皆様、ありがとうございました。

引用文献

Carragher, D. J., & Hancock, P. J. (2020). Surgical face masks impair human face matching performance for familiar and unfamiliar faces. *Cognitive Research: Principles and Implications*, 5, 59.

上地雄一郎・宮下一博. (2005). コフトの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成. *パーソナリティ研究*.14(1),80-91

吉澤裕子ら. (2022). COVID-19 流行禍における大学生のマスク着用動機の検討. *容装心理学研究*. 1(1), 20-28.

保坂裕子ら. (2022). コロナ禍において非対面コミュニケーションのなにか問題とされたのか— 年目に入学した大学生を対象とした調査をもとに—. *兵庫県立大学環境人間学部研究報告*.24.43-52.

読売新聞オンライン (2022). マスクの「顔パンツ」化を考える. https://www.yomiuri.co.jp/column/naruhodo/20211210-OYT8T50021/#google_vignette (2023.7.25)

ダウン症児の母親における就労継続について

○上地玲子

(山陽学園大学)

キーワード：ダウン症、母親、就労継続

はじめに

平成 27 (2015) 年に「女性活躍推進法」が策定され、女性が仕事を続けやすくするための環境づくりが求められている。また、令和 4(2023)年に改正がなされ、男女間賃金格差の縮小を図ることが追加された。この背景には、少子高齢化によって企業等における人材不足が深刻化しており、就労意欲のある女性が結婚や出産後も仕事を継続できる仕組みへの期待がある。

近年、母体血胎児染色体検査

(noninvasive prenatal genetic testing, 以下 NIPT) によって、胎児に染色体異常 (多くは 21 トリソミーであるダウン症候群) かどうかを調べる検査が増加しており、2022 年度からは 35 歳以上とされてきた条件を撤廃し、すべての妊婦が受けられることになった。

出生前検査によって、胎児に障がいがあることが判明すると、妊娠をあきらめるケースが多い。川名ら(2000)は、出生前検査を受けようと思う理由は、「障がい児を育てる自信がない」および「日本ではまだ障がい児・者その家族に対する行政の援助が乏しいため」と回答する割合が 80%弱であることを報告している。行政の援助の中に、保育施設の利用が可能であるかどうかが含まれているのかについては明確ではないが、いわゆる健常児であった場合の暮らしと同等にできないことを不安に感じていることが考えられる。

障がい児の出産が母親の就労状況にどのような影響を与えるのかについての実態について調査しているものは少ない。内閣府男女共同参画局(2019)に示されているように、第一子出産前後の女性の離職率が高いことは知られている (図 1)。しかし、障がい児の出産と離職とは関連するのか、また、障がい児の母親がどのような支援によってワーク・ロスを回避できるのかに関する研究は少ない。

本研究では障がい児の中でも、出生前検査でターゲットとされがちであるダウン症児について焦点を当て、ダウン症児を出産した母親の就業状況について明らかにし、就業継続にはどの

ような支援が必要であるのかを検討することによって、支援プログラムを構築する。また、行政の支援については、都道府県によっても差があるため、今回は岡山県を中心に調査を実施する。

なお、倫理的配慮については、山陽学園大学倫理審査の承認を経て実施している。

(A2022U010)

方法

日本ダウン症協会岡山支部 (以下、JDS 岡山支部) にアンケートの協力を依頼し、会員約 150 家族のうち、ダウン症児の母親に対して Google フォームにて実施した。

アンケート内容は、選択式 5 項目、記述式 3 項目であり、個別インタビューの協力可否も併せて尋ねた。調査時期は、2023 年 4 月 1 日から 2023 年 4 月 19 日であった。統計処理は単純集計を行った。

結果

有効回答数 33 名であった。子どもの年齢は、3 歳から 36 歳であり、平均 11.6 歳であった。

回答時の母親の年齢は 36 歳から 64 歳であり、平均 48.3 歳であった (表 1)。

表 1. 回答時の母親の年代

回答時の母親の平均年齢 48.3 歳		
30 歳代 (12%)	40 歳代 (52%)	50 歳以上 (36%)

子どもの年齢から母親がダウン症児を出産したときの平均年齢は、36.7 歳であった (表 2)。

表 2. ダウン症児出産時の母親の年代

母親の出産時平均年齢 36.7 歳		
20 歳代 (9%)	30 歳代 (61%)	40 歳代 (30%)

回答時の母親の就労形態は、正規職員および非正規職員の割合が同じであり、無職がそれに続いた (表 3)。

表 3.回答時の母親の就労形態

回答時の母親の就労形態			
正規職員(33%)	非正規(33%)	個人事業主・自営業(6%)	無職(27%)

結果の概要をまとめたものは、表 4 に示す。出産後に就労の変化があった場合に自由記述を求めたところ、24%が就労時間の短縮を経験していた。

考察

本研究の目的は、ダウン症児の母親の就労状況について明らかにし、就労継続に必要な支援を検討することであり、その結果を今後の支援プログラムの構築に資することである。

有効回答数 33 名で子どもの年齢が 3 歳から 36 歳と広く分布しているが、20 歳以上が 3 名と少数であり、子どもの平均年齢は 11.6 歳と低くなっている。

母親がダウン症児を出産したときの年齢は 30 歳代が 61% であり、平均年齢は 36.7 歳であった。本調査の回答時の母親の就労形態については、正規および非正規職員を合わせると 66%、無職が 27% である。厚生労働省の調査では女性雇用者数の割合は 45% 前後であることから、本調査の回答者に有職者が多い傾向を示している。内閣府報告の出生数と就業継続 (2017) によれば、30 代前半の出産・育児を理由とした離職者の数が他の年代に比較して高く、インタビューを通じて回答者の就業継続・離職の理由など状況を明らかにする必要がある。

インタビュー協力者の人数が予想よりも少なかったため、協力者全員に依頼する。そのため子

表 4 アンケート回答者の属性概要

子どもの年齢		回答時の母親の年齢			母親の出産時年齢			回答時の母親の就労形態				出産後に就労形態の勤務時間減少(24%)
年齢(歳)	対象人数	30歳代(12%)	40歳代(52%)	50歳以上(36%)	20歳代(9%)	30歳代(61%)	40歳代(30%)	正規職員(33%)	非正規(33%)	個人事業主・自営業(6%)	無職(27%)	
3	2	2				2			1			1
4	2		2				2					2
5	3			3			1	2	3			
6	1	1					1		1			
7	3		2	1			1	2	2			1
9	2		2				2		1	1		
10	3		2	1			2	1		3		1
11	4	1	2	1	1		2	1				4
12	1		1				1			1		
13	3		1	2			2	1	1	1	1	
14	1		1				1			1		
15	1			1			1			1		1
17	1			1			1				1	1
18	2		1	1	1		1		2			
19	1			1				1		1		
23	1			1			1			1		1
24	1			1			1			1		
36	1			1	1							1

どもの年齢構成が予定とは異なることになる。

今後の課題

インタビュー対象者は、本アンケート回答者のうち、インタビュー協力が可能であると回答したものの 14 名を対象に実施し、詳細を聞き取る。

文献

上地玲子・松浦美晴・岩永誠(2023). ダウン症児の母親におけるリアリティショック尺度の信頼性と妥当性の検討. 日本保健医療行動科学雑誌 (投稿中).

川名はつ子・菊地潤・中村泉 (2000). 出生前診断についての人びとの意識の現状. 日本保健福祉学会誌 7,31-40.

厚生労働省 仕事と育児等の両立に関する実態把握のための調査研究事業 令和 2 年度厚生労働省委託事業
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000200711_00003.html(2023.4.27)

厚生労働省 女性活躍推進法特集ページ
<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000091025.html>(2023.4.27)

内閣府男女共同参画局 「共同参画」2019 年 5 月号
https://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2019/201905/201905_02.html(2023.4.27)

謝辞

アンケートにご協力くださった皆様ありがとうございました。本研究にご協力くださいました元川崎医療福祉大学教授稲田正文先生に感謝申し上げます。

大会発表奨励賞受賞者（発表番号順）

受賞者

発表番号 13

題目：恥と罪責感がセルフ・コンパッションに与える影響

発表者：野田 涼祐（吉備国際大学大学院心理学研究科）

村上 勝典（吉備国際大学心理学部心理学科）

宇都宮 真輝（吉備国際大学心理学部心理学科）

発表番号 32

題目：未来展望の曖昧と気分に関連における制御焦点の調整効果

発表者：白石 奈津栄（岡山大学社会文化科学研究科）

堀内 孝（岡山大学学術研究院社会文化科学学域）

岡山心理学会第 71 回大会発表論文集

編集 山陽学園大学・山陽学園短期大学
〒703-8282 岡山県岡山市中区平井 1 丁目 14-1

第 71 回大会実行委員会

大会長 松浦 美晴（山陽学園大学）

準備委員長 上地 玲子（山陽学園大学）

岡山心理学会事務局

吉備国際大学

〒 716-8508 岡山県高梁市伊賀町 8